

通類鑑

贈呈

道頭編輯部

芳田 西内 羊若

妹娘お村

お村の妹



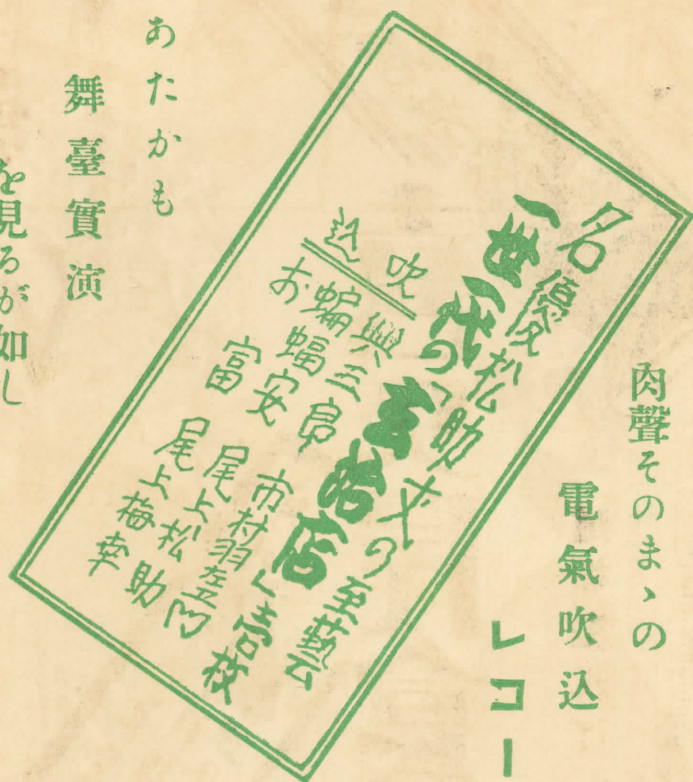
御芝居のレコードは

何んでも取揃へてあります

あ
た
か
も

舞
臺
實
演

を
見
る
が
如
し



肉聲そのまゝの

電
氣
吹
込

レ
コ
ー
ド

ビクター、ポリドール、コロムビアレコード

如何なるレコードでも取揃ふ

御存じの心齋橋北

酒 井 公 聲 堂

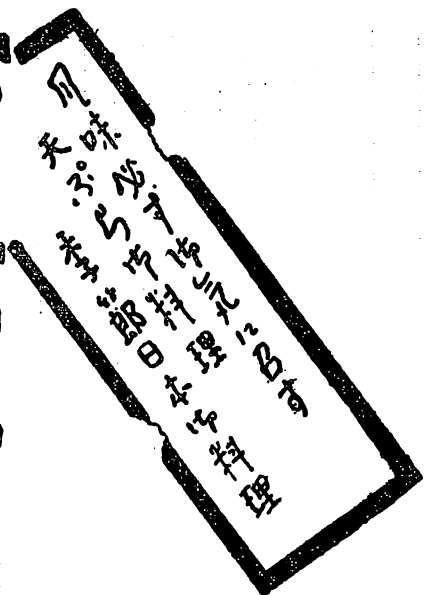
電 話 船 場 6 5 0 番

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



喜久屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀

昭和四年四月號

第三十一輯

◇表紙……(夕霧伊左衛門)……

大塚克三畫

口 繪

◎中座卯月興行上演◇中村鴈治郎の藤屋伊左衛門◇「お國と山三」の舞臺面、中村福助の名古屋山三、阪東壽三郎の井戸理兵衛◇「双蝶々曲輪日記」の舞臺面、中村魁車の女房お早◇「夕霧伊左衛門」の舞臺面、中村福助の扇屋夕霧太夫◇辨天座卯月興行上演◇「松平長七郎」大和橋の場、我童の松平長七郎、右田三郎の才領大山才平◇「名工柿右衛門」の舞臺面、我童の酒井田柿右衛門、福太郎の姉おつう◎浪花座四月興行上演◇「赤穂浪士」の舞臺面、中井哲の大石内藏之助、倉橋仙太郎の大野九郎兵衛、大河内傳次郎の堀田隼人、久松喜世子の間者お仙◎角座四月興行上演◇「萬花地獄」の舞臺面、辻野良一の小枝角太郎、和歌浦糸子の流しの女お妻、中田正造の陣代司馬大學、若宮美子の光江◎松竹座の「春の踊り」開國文化

◇扉……(春のおごり)……

◆考證・研究・記録◆

- 出雲と鴈治郎……………高安吸江(一〇)
- 濡髪長五郎に就て…………南木萍水(一二)
- 「引窓」と俳句……………高原慶三(一四)
- 道行百集……………(歌舞伎研究)勝彦輔(一七)
- 七人伊左衛門……………木谷蓬吟(三二)
- 夕霧雜考……………高谷伸(三六)
- 伊左衛門の思ひ出…………三浦おいろ(三八)

◆脚本と芝居物語◆

□芝居物語…お國と山三……



□脚 本……双蝶々曲輪日記……………(六)
 □芝居見儘……阿蘭陀の國旗……………加世三辯(一九)
 □芝居物語……夕霧伊左衛門……………船越文一(二四)
 □臺 本……文屋三喜撰……………依田覺三(四〇)
 □見たま……辨天座芝居ばなし……………(六四)

紙上映畫封切

メトロポリス……百年後の世界……………(四九)

特別讀物

小山内薫
澤田正二郎

偲艸三途河對話……………松鼻莊主人(七〇)

□た は ご と……………曾我廼家五郎(五五)
 □笑 と 涙……………曾我廼家十吾(五六)
 □喜 美 斷 語……………澁谷天外(五九)
 □五郎表彰當日を思出して……………朝倉雷藏(六〇)

◆萬 華 鏡……………飛鳥明子(四三)
 ◆樂 屋 日 誌……………藤代君江(四四)
 ◆何が彼女に「はい、原稿を書きます」約束させたか……………香稚園子(四六)
 □中座と松竹座……………北村兼子(五五)

◆劇場案内◆

□中 座……………(七八) □角 座……………(七九)
 □浪花座……………(七八) □辨天座……………(七九)
 ◇編輯後記……………松本泰三(八〇)
 ◇挿繪・カット……………大塚克三

錦旗標

三島製織

緩帳

植原商店

神戸市

楠社西門

元町一六五番

電話

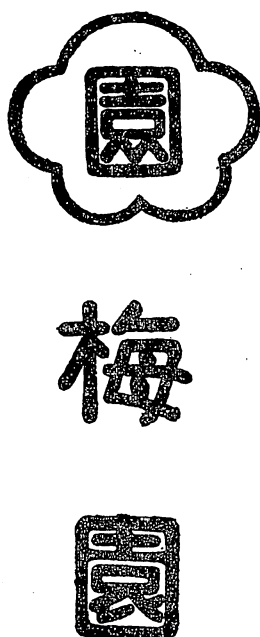


お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそゝる春のお献立が

お待ち申してゐます



お芝居でのお食事は食堂にて……………

お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁目
電話 南六二二七番

スキナ脂取紙

あぶら

櫻咲く御國に

享樂の春が参りました。

御散歩に……

先づ……

スキナあぶら取紙の

御用意を……

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ

現品縮圖

スキナあぶら取紙



“GREASY SWEAT ABSORBER”

Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舗
ス キ ナ 屋 號
中 田 商 店
大 阪



中座月興行上演

〔夕霧伊左衛門〕

藤屋伊左衛門……中村鴈治郎



中座卯月興行上演

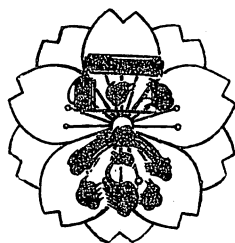
上「お國と山三」の舞臺面

下「お國と山三」出雲大社の神園

名古屋山三郎……中村福助

井戸理兵衛……阪東壽三郎

宮内省御用達



清酒

サクラ色

ほんのりと

サクラ色なり春の宵

山邑酒造株式會社

お花見は京都

祇園・清水・嵯峨(嵐山)・おむろ

平安神宮・岡動物園

高臺寺・平野

宇治・醍醐・香里

大津三井寺・くらま山

京都御所拜観

●御所に最も近くて、一番御便利

●三條御下車御所迄徒歩十五分

(上呈書内案)

御所拜観に遊覧に
最も便利な

京阪電車

の
都京
橋大橋三
橋大橋七橋大橋四

の
阪大
橋満天

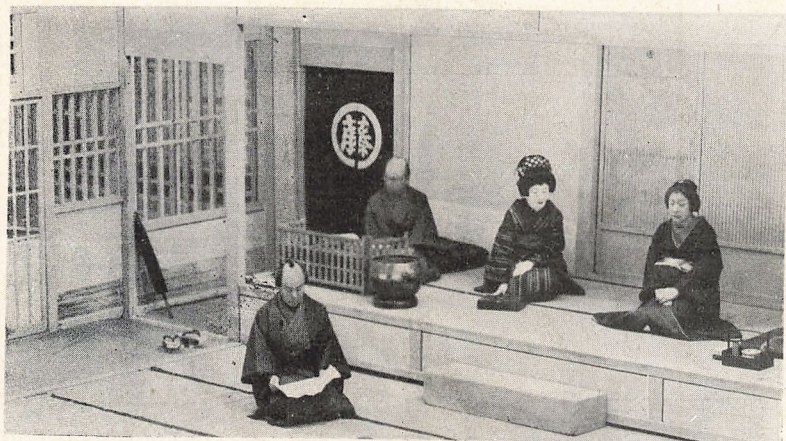


中座卯月興行上演

上「双蝶々曲輪日記」舞臺面

下 女房招早……中村魁車



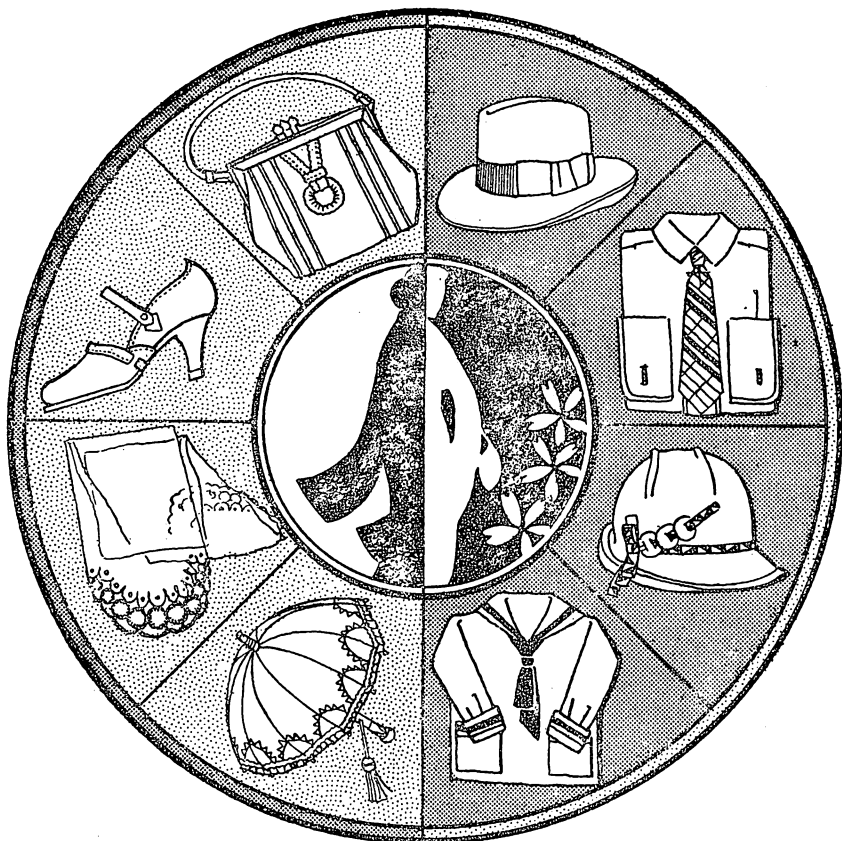


中座卯月興行上演

上 「夕霧伊左衛門」の舞臺面

下 扇屋夕霧太夫……中村福助





長閑な春訪づれて 遊山に、ピクニックに

花に魁け 御買物は大丸へ

春向呉服新柄を始め紳士用品、婦人子供
用品等流行の數々豊富に取揃へて居ります

月
曜
休
業



大丸

夜
間
營
業

大阪心齋橋

吉野・橿原神宮行 新線開通

櫻
!!

壺阪寺 多武峰
長野遊園 觀心寺
天野山

桃
!!

羽曳野大桃林 駒ヶ谷桃林
道明寺桃林 阿田桃林

アベノ橋
野間直通

大型ローマンスカー六輛連結

急行 九十四分

吉野山、玉手遊園

一目千本——中ノ千本
上ノ千本——奥ノ千本

吉野

橿原神宮行

急行 四十一分

長野

アベノ橋

大 鐵 電 車

電話天王寺 331 夜間 1652
332
333

大
アベノ橋
阪



演上行興月卯座天辨

場の橋和大 [郎七長平松] 上

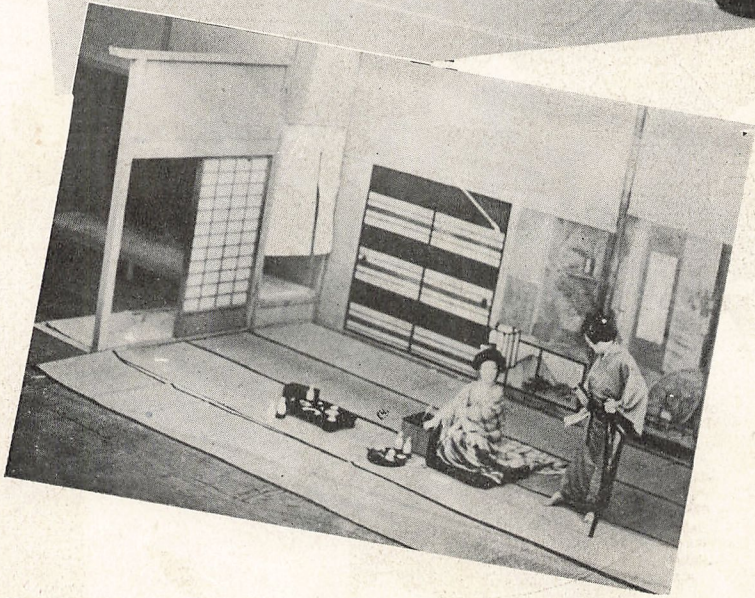
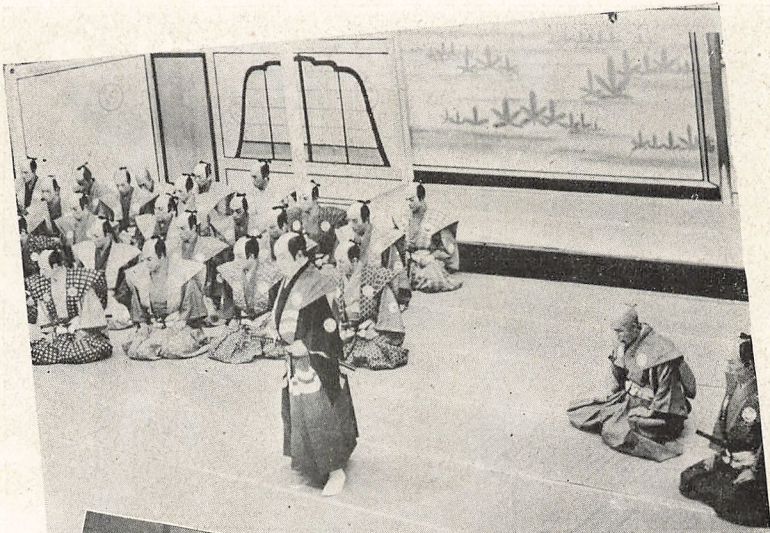
童我岡片……郎七長平松

郎三田右川市……平才山大領才

面 臺 舞 [門衛右柿工名] 下

童我岡片……門衛右柿田井酒

郎太福村中……う つ お 姉



浪花座四月興行上演

上〔赤穂浪士〕赤穂内城の内廣間

大石内藏之助……中井哲

大野九郎兵衛……倉橋仙太郎

下〔赤穂浪士〕旅籠の一室

堀田隼人……大内河次郎

間者お仙……久松喜世子

名代の御料理
大阪の一割烹店

電

氣

旅

館

天王寺公園

電話 自 三三四
至 三三三 番



淡口ノ親玉

進呈

九升樽詰一挺お買上毎二

宇治・ほうじ茶

香保里一罐宛

日本丸天醬油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

電話東二五三六二



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

本店

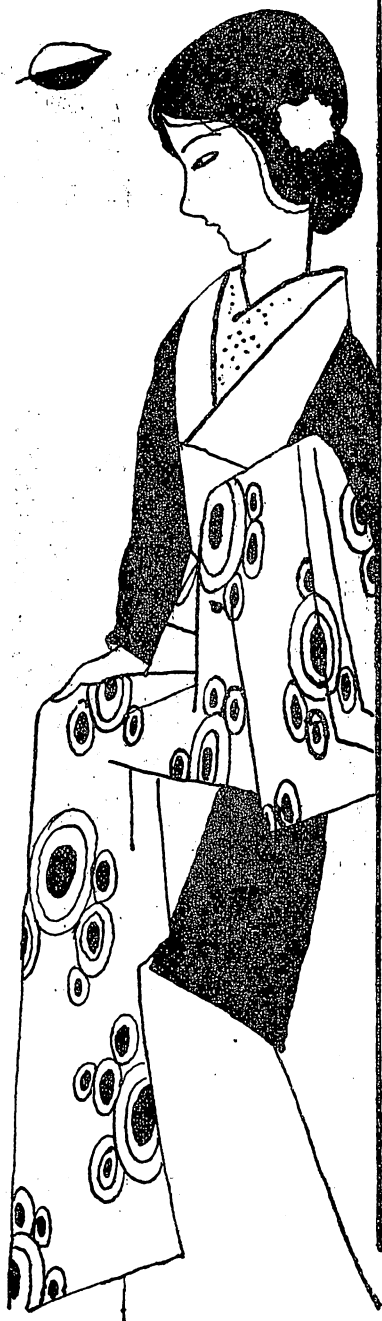
大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四七一八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます



クレオパトラの美身料

パームオイルで造った

松竹石鹼

我が國で始めて完成された

「お肌の榮養」となる……………

パームオイル松竹石鹼は

刺激性のない、泡立ちの細い、肌觸りの滑かな榮養美身料で……
洗粉、クリーム、ぬか袋等の必要が絶対にありません
お肌やお髪をいつまでも美しく健かにします
乳児及産前産後の方の石鹼としても亦理想的であるとの賞讃を博
して居ります

大阪市東成區鳴野町

松竹石鹼工場

大阪市東區南久寶寺町四

朝日堂株式會社

全百國店・有名化粧品店・藥店にあり





角座四月興行上演

上「萬花地獄」御代崎宿外れ

小枝角太郎……辻野良一

流しの女お垂……和歌浦糸子

下「萬花地獄」司馬大學邸内

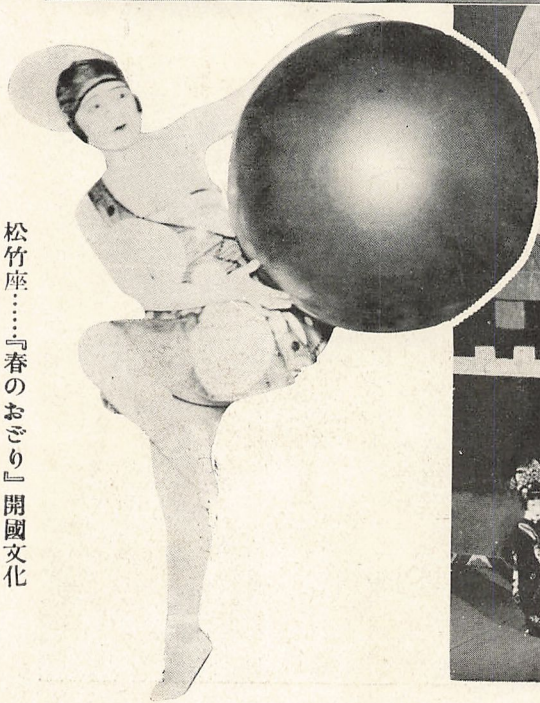
陣代司馬大學……中田正造

光江……若宮美子





松竹座……『春のおどり』開國文化



アングロス井ス

ミルク チョコレート

コーヒ キャラメル

チョコ
レート キャラメル

製造元

アングロス井ス

コンフエクシヨナリコンパニー

大阪市東區豊後町三番地

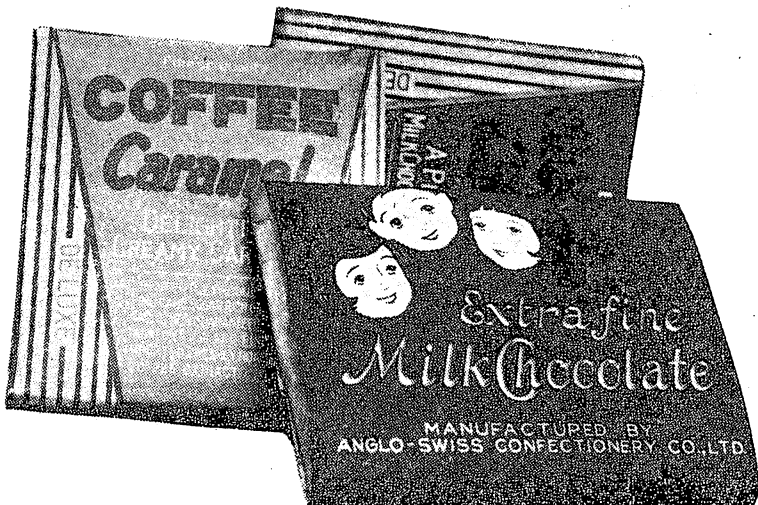
發賣元

株式會社

横山商店

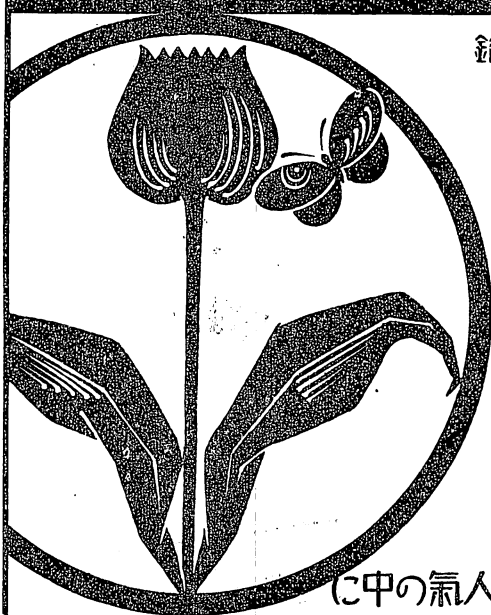
各劇場内賣店及
百貨店に販賣せり

電話 東二〇六一番
振替口座 大阪二八四七番
東京二六二七八番



御園白粉

純無鉛



美に人気が中
すすま輝くや
優良第一の品質

本舖 伊東胡蝶園

第三十一輯

月刊・演劇研究・雑誌
演 劇 類 編

第四年

號 月 四



お 國 と 山 三

園 義 雄



(一)

ドンドコ、ドンドコ、ドンドコ……
(此處は出雲の大社の境内——)

賑やかなお神樂太鼓の音だ。

其の賑やかな太鼓の音を他所にし
て、みすほらしい姿の侍が二人——

もう十月も彼れ是れ、半過ぎたとい
ふのに、一重物を合はせて着てゐる

——ボソ／＼聲で話をしてゐる。

「山三はほんきにあの女子に惚れて
ゐるのであらうか」

「さうもさうらしい御座います」

答えてゐるのは武右衛門、問ふた

の言はずに知れた井戸理兵衛。

「困つたもんぢやノウ」

「オヤ、笛の音が……」

「きつミ、家の旦那様で御座います」ミ二人が話をしてゐる
處へ、山三郎が笛を吹き乍らやつて来る。

「おい、山三——ち風流すぎはしないか。俺達には一番恐ろ
しい冬が、今に来るのだ、笛を吹いてるミきではあるまい」

「さうかミ言つて、何うにもなるものぢやあるまい」

山三郎は至極おちついたものだ。

「何うにもならんこゝしはない、山陽道に行かう、山陽道には
大々名がある。早く何處かに仕官をしよう。宛度の無い出雲

の國に何時まで居たミところで仕様がなないぢやないか」

「俺はイヤだ。何處に行つても、人間の生活には變りはない、
生きて行くミさへ出来たら、それで可い、俺は主取

りの望みを捨てた！」

「山三—貴様、馬鹿なことを言つちやアいかんぞ、此の儘でゐたら、生きて行くことも出来んぞ！」

「理窟ぢやない、俺れは寶を探し中てたんだ。日本の國の寶を見つけ出したのだ！」

「……？」

「旦那様の言つてるのは、あの巫子のことで御座います」

井戸理兵衛は呆れて仕舞つた。

「山三、貴様、さうかしてゐるなア、だが、お前が、あの巫子に、それ程、執心なら、お前の勝手にせい、俺れは、これから、山陽道へ行く」

「武右衛門、お前も行き度かつたら、ついて行け」

「イエー、私は旦那様の影法師で御座います」

斯うして、忠僕は彼と共に止るこゝになつたが、一人の巫子故に、彼は無二の親友井戸理兵衛を失つて仕舞つた。

巫子の名はお國、父の名を金太夫といつた。

山三郎は、お國自身にも、金太夫にも、彼女が天賦の才能の所有者であるこゝを説いて聞かしたが、二人はそれを信ずるこゝが出来なかつた。けれども、幸か不幸か、お國が山三郎を秘かに想つてゐたといふこゝが、嚴い神の掟に觸れ、お國は巫子の役目を解かれ、親からは勘當されるこゝになつた

「廣い世界に今は只、あなた一人が頼りです」

「俺れの言葉を信じて呉れ……」

山三郎とお國は固く結ばれた。

(二)

それから、約十年の後。

「日本一、藝道の神ちゃ」ミ、太閤から褒められ、秘藏の珊瑚の珠數乞貰つたりしたので、それでなくてはへ、人氣の高にお國の名は、此の事があつてから一層高まり、京大阪は言ふに及ばず、日本全國に響き渡つた。

「お國歌舞伎は良うまんナア」

「ほんまに、わて、あれ見てたら氣イが遠うなつたワ」

「お國歌舞伎が拜んで死に度い！」

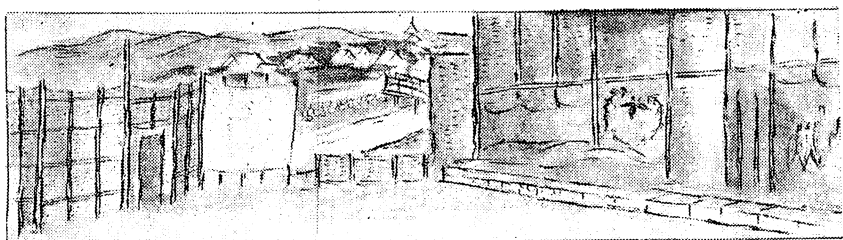
「死ぬまでに一度、見たい！」

見ぬ者は憧れ、見た者はたゝえた。

——お國歌舞伎！——お國歌舞伎！——お國歌舞伎！

京は流石に、彼女が賣り出した本場所だけあつて其の人氣はまた一段々素晴らしいものであつた。

上は貴いお方から、公卿、侍、さては商人、小者にいたるまでが、「お國様へ」「お國様へ」ミ毎日、贈り物の洪水が流れた。



此處は四條河原のお國歌舞伎の芝居小屋である。

廣い河原も見物人にうづもれて、「押すな〜」の大人氣、踊りの見られないものは、せめて樂屋なりミ覗かうミ垣を破つて入つて来る。

「のぞくな〜」

「押すな〜」

群衆が制し切れない。

戸外では、時々、見物人がワァー

イ〜ミはやし立てる。

樂屋へは、例に依つて、「お國様へ」「お國様へ」種々な贈物が運ばれる。

斯うした中で、一人淋しく思ふのは山三郎であつた。

「俺れは一體、お國の何んだらう」

「お國は俺れの何んだらう」

「これが、俺れの本統の歩み方だらうか」

さうした良人の悩みには殆んき無

關心にお國は派手な舞臺着を附けて部屋から出て來た。

「あなた、もう出番ですよ」

「……………」

「出番ですよ」

「解つてる！」

「……………」

「お國!!中の舞ひはやはり私にやらししてくれ」

「いけません。あなたは私のワキぢやありませんか」

昂然として、お國は舞臺に出て仕舞ふ。

山三郎は淋しい氣持になる。

この時、武右衛門が、「旦那様! あなた様へ贈物で御座い

ますヨ。此の大小を……」

「何、大小を……?」

やがて、出番になつて山三郎は舞臺に出て行く。

「武右衛門、暫くぢやノウ。」

立派な武家が、樂屋に入つて來て聲をかける。

「お、さういふ貴方様は井戸の旦那様!」

二人は久闊を述べ合ふ。井戸理兵衛は、あれから山陽道へ出て、森美作守に抱えられて今は其の旗持奉行をつめてゐることを語る。

「御出世なさいましたナア。それに引かへ私の主人は……」

「おゝ、察する。舞臺で女の眞似をしるチウ話ぢやないか
俺は情けなうなつたので、昔を思ひ出さすため、さつき贈
物をしてやつたのだ」

「それではさきの大小は……？」

「身共からぢや……」

やがて、井戸は武右衛門に案内されて舞臺を見に廻る。

突然、舞臺が騒然となる。それは、大島居逸平といふ醉漢
が見物席から、お國の藝を口を極めて罵つたこゝから持ち上
つた騒ぎであつた。

「餘り高慢にならない様、天の訓へだ」山三郎は言つた。

「私は舞臺で恥をかゝされた、こんな恥かしいこゝは無い」
大島居逸平は、山三郎が、お國の慢心を矯めすために仕組
んだ芝居であつたが何の役にも立たなかつた。

彼女が藝を愛する氣持には良人への義理も、人情もないか
の如くであつた。山三郎は、一面、お國のそれを認めた、然
し男として、生きるべき道は他にあるのではあるまいか？そ
の時、彼の眼に映じたものは井戸の贈つた大小であつた。

「あなた！あなたは藝を捨て、侍に歸る氣ですか」

「……………」

山三郎は無言で刀を取りあげた。

「妾は舞臺から離れませんヨ。妾を捨て、も行くのですか」

「……………」

「舞臺を捨て、行くのですか？」

「俺はお前の藝まで奪はうとは言はない、一緒に來るこゝも
留るこゝも、お前の心にまかせろ」

良人の斯うまで強い決心を聞くに、彼女の心は良人の方へ
山三郎の心へ引きつけられて行くのであつた。

「……………」お國は無言で眼をつぶつた。

悲痛な沈黙が四邊に漲る。

「武右衛門！そちはさうする」

「旦那様！私はあなたの影法師で御座います」

お國の兩眼からは涙が落ちて來た。一滴、二滴。

「あなた！あなた！さうしても……」

「ウム、俺の踊るこゝろは戰場だ、血を浴びて踊る舞臺だつ
た」

「それでこそ、名古屋山三だ、作州へ來い、殿に俺が推舉し
てやる」井戸理兵衛……。

お國は再び沈黙に陥つて仕舞つたが、やがて、涙を拂つて
昂然と言つた。

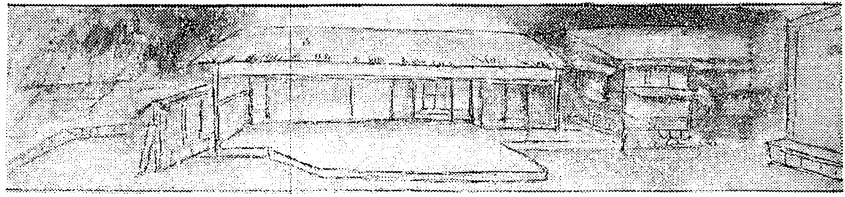
「妾は、妾は、舞臺を離れません。妾には藝といふ良人があ
る」

彼女の聲は慄びを帯びて居た。（終り）

中座卯月興行上演

双蝶々曲輪日記

八幡の里の場



〆云ひわけ涙に時移り哀れ數
そう暮れの鐘、限なき月も
待宵の光り移れば
お早奥より行燈を出し
夜に入らば村々を詮義する我
が役目。

〆云ひつゝ立つて一思案
申し母者人、人をあやめて立退く曲
者。大膽にも此邊りを徘徊は致しま
すまい大方河内へ越る拔道は狐川を
左へさり、右へ渡つて山越へに
めつたにさうは参りますまい。
〆情けも厚き敷だ、み
コリヤ女房我は詮義に参る間此金で
ト、上手の二階へこなし

あつて、以前の金五両投げ出し、吞込ませて
跡に心を附けよ。

お早 そんなら是を。

與兵衛 アノ長五郎はいづれにあるや。

ト、入口をしめ思入れ
〆折から月の雲かくれ、忍んで様子伺ひ居る堪えか
ねたる長五郎、二階より飛んで降り、表をさして
馳け出す、母は抱きこめ

お幸 コリヤ狼藉者さこへ行く。

長五郎 ハテ、知れた事、最前より尋常に繩にかゝらうと存
じたれき餘りミ申せば志しの有難さ眼前歎きを見せませう
よりせめて此家を離れてからミ堪え堪えてをりましたが、
與兵衛殿の手前もあり跡より追付き捕へられる覺悟、御許
されて下さりませ。

〆駆け出すを取て引据へ

お幸 ソノ爰な物しらすめ。

此母ばかりか嫁女の志、與兵衛殿の情まで無に仕をる罰あたり奴が生さぬ仲の心を疑ひ繪姿を買ふ云ひかけたは見のがしたもるかたもらぬかミ胸の内を聞かうため賣つてくれたその時の嬉しさ、わしや後ろ影を拜んだわい、まだその上に河内へ越える拔道まで教へてくれた大恩を、何ミ報ぢようと思ひ居るぞ、コリヤヤイ、死ぬるばかりが男ではないぞよ。

〽七十近い親持つて、喧嘩口論人を殺す云ふ様な不幸な子が世にあらうか

来るミその儘缺け椀に一膳飯を望んだは牢へはいる覺悟ぢやなア、それが何んミ見てゐられう、せめて親への孝行に逃けられる丈けは逃けてくれ、生きられるだけ生きてたも何の因果で科人に。

〽なつた事ぢやミきつミ伏し、前後不覺に泣き叫ぶ
お早 ア、申し、泣いてござる所ぢやないぞへ、最前夫が餘所ながら、渡さしやんしたこのお金は、取りも直さずお前の路銀、今宵の内に姿をかへて落す思案はない事かいなア
お幸 オ、それも心付いて置きました。マア人目立此大前髪、剃り落して姿を變へん、嫁女剃刀を取つて下され。
ト、お早立つて納戸へ入る。

長五郎 アノ申し母者人、姿をかへて繩にかゝらばよく、

命が惜しさ故さいはれるのも残念至極、侍を殺した時、直に相果てやうミは存じましたが、死なれぬ義理にて生き長らへ一日々々送る内親の事が身に沁みて、今一度お顔が拜みたさにお暇乞ひに参りまして返つて恩をかけます、矢張り此のま、與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ。

お幸 スリヤきういふても繩かゝる心ぢやなア。

長五郎 覺悟は致して居りますわい。

お幸 よいわ勝手にしをれ。

〽我れより先に剃刀を

ト、此内、お早剃刀を持ち來り、お幸の傍におきしを、此の時、お幸剃刀にて死なうミする

長五郎 ア、めつさうな。

お早 そうでござんす。コレ長五郎さん、お袋様の仰有る通り、元服をさしやんせぬミ私も共に死にますぞへ。

長五郎 ア、コレ、早まるまいぞ。

お幸 但しは私から先きへ死なうか。

長五郎 ア、コレ待つた。

お幸 そんなら落ちてくれるか。

長五郎 サア、落ちやんす。

お早 元服さんすか。

長五郎 剃りやんす。

お幸 アノほんまに落ちてたもるか。

長五郎 落ちやんすく。

お幸 オ、出かしやつたく、それでこそ母が子なれ。

お早 よう聞き入れて下さんなしたア。

お幸 ドレ、剃つてやりませう。

△涙に袂濡髪が、剃るべき髪は剃りもせで、祝ふて落す前髪を涙が先で剃り落す老のこぶしの定まらず、わな／＼振ふて、又先がぎつくり

お幸は涙ながら前髪を剃り落し、トゞ長五郎の額に疵付いたこなし。

お早 ア、申し、二タ所までお額に疵が。

お幸 ひよんな事を仕りました。幸い血ごめ。

△幸は血ごめと硯の墨、べつたり附けて額打ながめお幸 大方これで人相が變つたが、肝心の見知りが高頬のほくろ

△剃り落さんし剃刀を當てたこしは當てながら是こそは爺御の譲り、紀念と思へばこれ嫁女、さうも剃りにくい、こなた剃り落して下され。

お早 私ちやきて、むごたらしい、それがさうまア、剃られませう、お許しなされて下さりませ。

お幸 ア、思へば／＼親のかたみまで剃り落すやうになりをつたか、えゝ心がらこしは云ひながら。

△可愛いのものやこ取り付いて、わつミばかりに泣きしづむ。兼ねて覺悟の長五郎思ひ設けてきつこ座し

長五郎 サア、此上は母者人、お前のお手で繩かけて與兵衛殿へお渡し下され。

お幸 ナント。

長五郎 重々厚き與兵衛殿の親切は骨身にこたへ、忝なさに母の歎きも御意見も不孝の罪も思はれず片輪ながら可愛いミ、義理も法も辨まへなく助けたい、／＼母人の御慈悲心、暫らくはお心休めと詞に隨ひ元服まで致したれご一人ならず二人ならず四人までも殺した科人、助かる筋はござりませぬ、なまかな者の手に掛らうより、かたみと思ひ母者人、泣かすも繩をかけ與兵衛殿へ手渡ししよう御禮を仰しやれや、ヤ、ヤ、コレさうでなうては未來にござる十次兵衛殿へお前は義理が濟みますまいがな。

お幸 ア、誤まつたく、長五郎よう云ふてくれたなア、いか様思へばわしは大きな義理知らず、誠を云へば我子をしてゝも襷子に手柄さすが人間畜生の皮かぶり、猫が子を喰はえ歩くやうに隠しきやうとしたは何事、こてものがれぬ天の網一世の縁のしはり繩、お早細引を取つても。

お早 いえ／＼それでは連れ合ひの心を無になされるこ云ふ

もの、唐天竺へござつても、此世にさへござれば又逢はれる事もある。何がなしに落しまして下さんせ。

お幸 イヤ、一旦かばうたは恩愛、今また繩かけ渡すのは生さぬ仲の義理、晝はかばい、夜は繩かけ、晝夜さわるる織子、本の子、慈愛もたち義理も立つ、草葉の陰の親御への云ひわけサア覺悟はよいか。

長五郎 待ち兼ねてをりますわい。

〽お早を取て突き退け、手を合はすれば母親は幸ひ有合ふ窓の繩、追取つて小手しぱり、暗き思ひの聲はりあけ

お幸、窓の繩を取り長五郎を縛り

お幸 濡髪の長五郎召取つたぞ、十字兵衛は居やらぬか、受取つて手柄にめされ。

〽ミ呼ぶ、聲きこえて與兵衛は内に入り

ト、此以前より與兵衛、伺ひ出て、門口に立ち聞く、此時、内に入り

與兵衛 お手柄、そううては叶はぬ所、ミてものがれぬ科人、受取つて御前へ引く、女房、モウ何時ぢや。

お早 サアモウ、夜半にもなりませうか。

與兵衛 たわけ者めが、七つ半を最前聞いた時刻、延る役目が上る、繩先知れぬ窓の引繩、三尺残して斬るが法則。〽ちりりミ抜いてしぱり繩ばつさり切れば、ぐわら

〽〽〽さし込む月に南無三夜が明けた。身共の役目は夜のうちはかり、明くれば即ち放生會、生けるを放す所の法、恩に着すも勝手にいきやれ。

ト、是れにて九つの本釣り。

長五郎 やアありや、モウ九つ。

與兵衛 イヤ、明け六つ。

長五郎 残る三つは。

與兵衛 母への進上。

長五郎 重なる、御恩は。

與兵衛 アイヤ、それも云はずに去らば。

〽別れてこそは

ト、與兵衛は長五郎を突きやり、見切りの柱にかけし三度笠を投けてやる。

長五郎 受取つて頂く。

お幸、お早は戸口へ出かけるを突き廻し入口をしめる。

お幸は拜み乍ら泣き落す。

與兵衛、お早、うれいのこなし。

長五郎は拍子につれて向ふへ入る。この見得よろしく。

幕



出雲と鴈治郎

南與兵衛の話など

高安吸江

四月の道頓堀へ鴈治郎が顔を出すことは近年ないことで、私の記憶では大正七年四月に山科まわん久を演つたのが一度あつたといふ思ひます。それも一、二に續けて後三月は不在でしたから、今度のやうに正月からズツミ、ブツ通しにやるといふのは頗る非常に珍らしい事です。正月の吃又、此間の栗山なごの力演また力演は、仁左のやうに自由自在に肩すこしを喰はし得ない此人の性分として、あまりに働き過ぎはせまいか。常々驚歎せられて居る其健康に若しや影響でもあるまいか。ミ内々心配でなりません。さうか此後は我劇壇のため彼が努力の滯費を出來得るだけ防ぎたいものと思ひます。

今回の出し物は故渡邊霞亭翁の夕ぎりに引窓だそうですが、夕霧は大正七年一月、引窓の方は道頓堀では同八年十一月、十三年十月の二回しか出ませんでしたから、やはり久し振に云ふべきです。是は世間周知の如く鴈治郎が得意中の得意のもので

あり、洗練に洗練を重ねた極め附きのもので、既に方々で再々上演されて居るため、又かと思はれる位に完成され、深い印象を残したものですから、感傷的な若い人々にいくら懐かしい春が來ても、御室の花を待たずして既に氣倦い睡味を覺える我等が今更駄辯でもありますまい。それで私は唯此院本に描かれた南與兵衛について少々御話申ませう。

梅の盛りの新清水、傘を力にその舞臺からヒラリミ一飛に飛び下りた男が、畠の中に立て「ウツソリ共、それにゆるりこ、けつかれ」ミ舞臺で呆然と眼を腫ら惡黨共を嘲ります。今日ならさしづめ双の手掌を豎に、親指を鼻先へ附けて左右へ動かす茶目公さいふ處でせう。此れは双蝶々曲輪日記の序の切で、此男こそ後の引窓の主人公南方十次兵衛其人であります。

彼は與五郎の父與兵衛から一字を貰ひ、以前は八幡で人につかふた身上だつたのを、放埒のため郷代官の役目もあがり

零落して世の憂きふしの笛細工、子供ならしの荷ひ賣しながらそれでも猶藤屋吾妻が姉女郎で、後に女房おはやもなつた相思の情人都に逢ふべく、早朝から此處浮瀬へやつて来たさいふ耽溺振です。尤も金はないが、常の色男違つて力はある、關口流の一手も心得て居る故、西國方の侍を二人迄も首筋つかんで踏すえる勇氣はあつても、非人をかたらひ待ぶせした太鼓持の佐渡七に小指をくはれて、手につけた件なごから見るこ、「手裏劍高頻にビツシヤリ」ミ長五郎の黒痣をつぶす程の手き、かさうか、少々怪しいものです。

それから都身受の一條ですが、もごく主人與五郎のを失敬したミは云へ、その金は番頭權九郎が出したもので、其番頭が捕はれて舊惡露見した爲め、つまり他人の禪で相撲の格です。お負けに所の殿様が替り、古代官の筋目を尋出された結果、與兵衛も俄に昔に歸つて南方十次兵衛。まあ何さいふ好運兒でせう。

元來この双蝶々の原本は無論近松の山崎與次兵衛壽の門松ですが、そこに出て来る南與兵衛は、名妓吉野に戀した鍛冶の話や、古今奇觀なごに出て居る油賣、或は後の油屋與兵衛式の話なごに關聯して居るはの無論ですが、双蝶々のやうな色男でなくつて俠骨を特色として居ます。それで出雲が近松から踏襲したのは、右に述べた通り後日好運に恵まれる點で、猶その外に人を殺傷したり或は吾妻の保護をうけるなごの點もそうですが

唯その因果關係は逆になつて居ます。即ち近松では吾妻に優遇せられた爲に、與五郎ミ間違へられて襲はれますが、出雲の方では、先づ佐渡七を殺して後に吾妻にかくまはれ、それに絡つて都の誤解なごが起るやうになつて居るのです。

濡髪長五郎の件は放駒長吉ミ共に近松のには全然無く、是は西澤一風、田中千柳のかいた昔米、萬石通が種本です。一風は心齋橋の書林正本屋九右衛門の事で、紀海音や錦文流ミ共に世話物作者として知られ、千柳は其門人です。

萬石通は壽門松から七年後の享保十年の作で、上中下三卷からなつて居ます。先づ長吉長五郎兩人が戀の出入を喧嘩屋五良右衛門なごがおさめた後、太郎助橋で待伏した番頭甚藏に長崎客二人を此三人で殺害します。濡髪が額に薄手を負ひ、用心桶の溜水でぬらして「此ぬれがみをぬれ髪、額に置けば猶ぬれがみ」云々の文句があり、又五良右衛門が長五郎の月代を剃りますが、是なごは引窓に應用されて居ります。

中の巻は大寶寺町のつき米屋で、長吉の親丸屋仁右衛門の内ですが、双蝶々の様に姉はなく、十三になる妹のお長が居り、そして長吉は唯捕つてしまつて、別に長五郎はやつて來ません下では遊女竹取が犯人長五郎を河内觀心寺の其隱家へ尋ねて行けば、もう追手が來て絶體絶命の處を、五郎右衛門が身代になつて濡髪を落してやる事になつて居ます。双蝶々では狐川を左に取り、右へ渡り山越に逃げのびた長五郎はやはり觀心寺の幻

竹右衛門方でかくまはれます。こゝでは竹取の代に竹右衛門の娘おさらが居て、初心な戀も束の間、五良右衛門の孔を長吉が行つて身代になつたのを、更に十次兵衛が出て理非を説き、終に長五郎に繩をかけて大團圓です。

萬石通は極めて凡作ですが、二十四年後の双蝶々に比べて技巧を弄する事の少い點に於て、たしかに時の隔りをうかゞひ知ることが出來ます。双蝶々は全部で九段、引窓はその八つ目にあたります。前述の如く壽の門松萬石通をない交ぜにして一層趣向をこらしたため、冗漫で且つ煩雜になり、その上時代の風潮として技巧本位に傾いて來たのは已むを得ない次第ながら、今日の眼から見て時には不快をさへ覺える事もあります。又橋本の治郎右衛門内で、其口を貸つて、子ならで親は泣かぬ



濡髪長五郎に就て

南 木 萍 水

『引窓』に現はれる濡髪長五郎さいふ角力取は實際に在つたかどうかといふに、眞偽の程は分らぬが、實説として『脚色餘録』

ものを、生れる時を悦びは、いつの世からの偽ぞや」云はせて居ます。これなごも一應は面白い様ですが、ごうも何きなく理窟ッポイ感をするではありませんか。

今度上演せられる八幡の段でも、同様にすべてが理ぜめですが、それを引窓の技巧によつて融和して行くはたらくは流石に出雲で、やはりカラクリの元祖竹田近江の子だけの事はあると思はれます。技巧本位の出雲、それが鴈治郎の舞臺さ何等かの共通點を有つやうに感ぜられる事に、私は少からぬ興味を覺えるのです。我々は技巧さ知りつゝ、も是を舞臺の上に見て、その異常の魅力によつて一切の不満を忘れさせられる事も度々あります。偉大なる技巧、作として、藝として、我々は久し振に是を四月の中座に見る事の喜を思はざるを得ないのであります。

にはかう書かれてゐる。

山城の國八幡在に都倉與惣兵衛さいふ浪人が住まつてゐた。

元は上州沼田の藩士で、實名は岩村長右衛門といふのだが、故あつて變名し、この里に遁れ来て、手跡の指南なきをしてその日を送つて居た。この息子に長五郎といふのがあつた。性來力業が好きで、角力を巧者にする處から、同じ八幡で顔利きの角力取り荒石斧右衛門といふのに見込まれて、終に養子となり、荒石長五郎と名乗つて修業してゐた。處がこの長五郎には悪い癖があつて、力自慢を盾として兎角喧嘩口論が絶えなかつたといふ。隨て自己防禦の爲め、刃物よけとして常に紙を水にて浸し、額にあてゝゐたといふ。その頃異國でも紙具足して、數枚の紙を水に浸して身に張つたといふ引例がある處から、この理が當時應用されたものであらうが、この濡紙を用ひてゐた爲めに諸人はこれを目標として濡紙々々と呼稱されてゐた。

通稱濡紙がいつか濡髪と詩的に改名された長五郎は大阪へも度々来て、相變らず好きな喧嘩を買つてゐたが、或日、難波邊で服部惣左衛門といふ侍と衝突して、力餘つてかこれを殺害し、身を遁れる爲めに親里の八幡に歸り、密に潜伏してゐた處を露現に及び、終に捕はれて入牢したといふ。

この事件や放駒長吉を取材して、享保十年巳年に西澤一風は『昔米萬石通』と題した狂言を作つて豊竹座に上演した。

これより先に享保三年には近松が山崎與次兵衛と遊女吾妻の情事を書いた『壽の門松』が上演されてゐた。この『壽の門

松』も八幡を背景にせられてゐる處から、二十五年後の寛延二年に入つて、竹田出雲等によつて『壽の門松』と『昔米萬石通』を結び付けて、旨く趣向を立てたのが『双蝶々曲輪日記』で、今度の狂言の『引窓』は即ちその中の一場面である。

◇
『昔米萬石通』にも『双蝶々』にも放駒長吉といふ角力の登場するのはよく御承知の通りであるが、この放駒長吉こそは、純大阪の人間で、島の内大寶寺町に住居して、親爺は丸屋仁左衛門といふ揚米屋で、妹にお長といふのがあつた。この妹のお長を『双蝶々』では姉としてお關と改めてゐる。

◇
脚色餘録の著者は濡髪長五郎を實在の人物に取扱つてゐるが、然し角力取としての實傳には一向その名が見當らないから相撲大全には濡髪といふ名が關取の部に書かれてゐるが、それは長五郎でなく、別人であるに斷つてゐる。又『相撲今昔物語』にも、此時代に幼竹右衛門、放駒長吉といふ相撲あれども、濡髪長五郎といふ事、跡方もなき事なりと、にべもなく否定してゐる。これによつて見るに、濡髪長五郎なるものは、純相撲でなく、又相撲取としてもその道では餘り有名でなかつたらしく思はれる。

◇
『河内へ越へる拔越は、大方、狐川を左へ取り、右へ渡つて

山越に云々は南方十次兵衛の名臺詞であるが、この狐川の名稱に就て『京都午膳』には、この狐川の名義は古くより有て、不解なれき、往古木津川（一名泉川）の流れ、八幡の上に流れて木津根川とも云ふ。爰にある渡し中元木津根渡しとも呼にやあらん云々を解釋を下してゐる。狐川の文字の出所は或はそれ等より轉化したものであらう。

◇
『引窓』では長五郎が母の情けで人相を變へる爲めに前髪を剃落して貰ふ條がある。この前髪に就て『相撲今昔物語』には、この時分の角前髪の相撲取は鬢にも櫛を差して、相撲を取つたも



「引窓」と

俳句

高原慶三

この頃、大阪美術倶楽部の青木嵩山堂の賣立を見にまゐりました時、其角の式紙が目をはききした。

新月やいつもながらの男山

其角

大へん洒落たもので、垂涎三尺たらざるを得ませんでした

のである。これは兩國棍之助に始まりしもので、芝居する長五郎はこの棍之助の風を模したものであらうと、然し角力取の髪風は江戸中期までは大抵前を剃つた野良頭であつた。尤も年の若いのは長五郎のやうに角前髪こいつて、前を剃らぬものもあつた。が惣して階級によつて、髪結び方も違つてゐて、相撲銀杏さか櫛落しは三段目以上なければ結へなかつたもので、以下は惣て栗鬘であつた。

當今では櫛落しは跡を絶つて、銀杏さか栗鬘が多く用ひられてゐる。

所詮「高嶺の花」でございました。

この短冊の句をしみじく眺めてゐる私の心にフト浮かむものがありました。

月三男山

私はいつか、祇園の磯田お多嘉さんに見せてもらつた近衛三貌院の「月は八幡の……」云々がある横物の軸に想ひを走せたのでありました。

其角の句の男山が所謂八幡の男山か、或はむかしから「酒は剣菱、男山」といはれた、その酒の銘の謂か？その道の人からこの際は非教へを請はねばなりません、さにかく八幡の男山として考へる時、私の聯想は更に芝居方面に馳け飛んで、「引窓の舞臺面を想像せざるを得ないのでありました。

その折、私は雑誌「道頓堀」から「引窓」について何か書けこの命令を頂いてゐるものですから、淺學非識の私さの考證や研究を發表して「道頓堀」の讀者諸君に御迷惑かけるよりは一層さうした聯想のつながりを漫然と書いて、御注文の貢を塞がうとするのでございます。

◇
「引窓」に私は不思議な因縁が昔からございます。親父が下手な素人淨瑠璃をやつてゐたので、子供のうちから淨瑠璃に馴染をもつてゐました。そのうちでも特に「引窓」が、親父が堀江の師匠（木谷蓬吟氏の先考名人竹本彌太夫）から直傳を受けて、拙いながらも、師匠の名によつてこれを十八番にいたしてをりました。

それで子供ながらも「引窓」について年少既に耳學問をしてゐたのでございましたが、これを歌舞伎で見たのは中學時代大阪

浪花座で鴈治郎の與平、梅幸のお早、松助の母親、梅玉の濡髪長五郎が最初でございました。

この時の「引窓」は最初の印象もございましたらうが、役者諸君の配役に遺憾のないものがあつた所以か、二十年近い古い事ですすが未だに眼に残つてゐるのです。殊に松助の母親が「母は手箱に嗜みし銀一包取出し」の件りなさまざう、未だに眼前にチラつくやうに思はれます。鴈治郎より梅幸より梅玉より松助ひきりだけが一ぱハツキリと頭に残つてゐるのはやはり松助は名人だつた世評に許りはございませぬ。

そうした印象を文にしてこれも創刊まだ間もなかつた演藝畫報に投書したところ、見事に採用してくれましたのがそもくこれが私の劇評形式の物が活字になつた最初で、春秋の筆法をもつてする私をして今日芝居の惡因縁を作らしめたものは、「引窓」に他ならぬ……といふ斷定になるのです。「道頓堀」にかうして讀者諸君を悩ます遠い源を溯りますとやはり「引窓」に端を發したもので、まつたく何と恨めしい「引窓」ではありませんまいか。

◇
閑話休題、私をして「引窓」に愛着を感じしめる所以のものはかうした由來の上に、いつ見ても「引窓」に見飽きのせぬものは舞臺面の俳句であります。

〽秋の半ばの放生會、夜宮祭と待宵と、かけ荷ふたる供へ物

母は神棚しつらへば、嫁は小芋を月代へ、子種頼みの米團子、月の數程持出づる……
ミ、地の文章にもある通り、八幡山崎邊の待宵の放生會行事の季節趣味が、この「引窓」に遺憾なく描破されてゐるのであります。

四五人に月落ちかゝる踊かな 燕 村

蕪村の句の美しさ「引窓」の舞臺面の情景はたしかに一致するもので、かうした季節趣味を二百年前の演劇形式に採り入れたここは私さも多少俳句を語るものにまつては非常に愉快なこころと思ふのであります。

◇

それにこの「引窓」は鴈治郎といふ人の、よいも悪い處もひつくるめて、よく活かせた芝居だと思ひます。

いつも申上げます通り、鴈治郎の持味は世話時代の綯ひ交ぜ楷書、行書の書流しといふ人であります。

楷書から行書へのつながりが、聊かのわざしらしさもなく、スラ／＼と運ぶ、所謂天衣無縫、八面玲瓏といふ人です。

そこに多少の嫌味を感じる人はあつても、この妙所は當代肩を並ぶ者はごさいますまい。

× × × ×

昨日の八幡の町人南與平に代る今日は十ヶ村の支配を勤める南方十次兵衛の變轉の妙、晝は私生活の上に、義理ある弟をかばひ、夜は公生活の上に、その弟に繩かけねばならぬ南方十次兵衛の立場、又、「引窓」を契機にして役目の裏表を使ひ分ける竹田出雲の技巧のための技巧は、鴈治郎の天衣無縫、八面玲瓏によつて初めて精彩を發揮するのであります。

◇

さて「道頓堀」の諸君、私はかうして抽象的に鴈治郎の「引窓」について管々しい程申上げましたが、結局百聞は一見に如かずでございます。今度御觀劇の際、私の愚論を承認して頂くために、鴈治郎の十次兵衛が目立て巧い仕ごころを一點だけお教へいたしませう。

それは母親が十次兵衛に『何こそその繪姿わしに賣てたらぬか』この言葉を受けて、十次兵衛は右手に捕縄、左手に十手をもちながら正面を見込むでゐたのを、フト母親の心持を感じて十手持つ手を軟かく母親に向けて『何、この繪姿が入用な』で世話になる……この呼吸一點だけによく注意して御覽なさい必ずや婉轉の妙、技巧の絶頂を推賞する私の言が決して過褒でないこころを承認して頂けると思ひます。

× × ×

秋霞は研究 道行百集

(一)

勝彦輔綴

古い院本より道行ばかりを凡そ百種ほど集めました。
何かの御参考にも成らうかと、本號より餘白の埋め草
に連載する事に成りました。

(一) 愛護雅名歌勝聞

道行戀の山道

逢ふ事はなをかたいこのよるこなく、晝もわかぬねやの中
寝ても覺めても忘れぬ枕一つの床の海、うきねの鳥か、鴉
照姫、すぎし競馬の折柄に、つい逢ひ初めて相ほれの愛護の
わか二世迄いふて別れて其後は文も届かず顔も見ず、
それさへ今はその人も館をいで、ひるの山、そ川の阿舍利の
御寺におおす斗りほの聞いていこと思ひのまさりぐさ、せ
めて夢にも見まほし三片手枕のうつしにも尋ね迷うぞわりな
けれ、なれしふすまの曉に鳥さ鐘さは聞きながら、ひまり結

びし抱へ帶、髪も化粧もしごけなく、母の諫めや世の人のそ
しりもなんのわきまへも、まだ白川の橋柱浪のあわたつ山つ
ゞき、常に見馴れし山なれば手に取るやうに思われてつい一
ト足か二タあしに四の宮河原關寺の名のみ小町の姥櫻、つゑ
よおがさよ立よりて、いづくも問へさ岩清水、しばしきてこ
そ水鏡寫す姿は我れ乍らわがたつそまの山嵐、都の富士と詠
めやる麓は鴉の朝霧や、袋を出づる琵琶の海、誰が杀かけて
曳く網に打出の濱をこぎかへる、千舟百舟帆をあけて、さつ
き漣志賀の浦昔しならの花園の里の賤家に立つ煙り墨繪
の松に似ても似ぬ我がさりなりの耻かしや、君を見染し初戀
は、加茂の葵の双葉山、狩装束の花やかさ、袴はせいながら水
冠はこの秋の野の草盡し、桔梗かるかや割れ木瓜、やいばの
太刀をかうはいて陸奥たちの若駒に紫たづな藤の紋、りん
くしやんくしつさんく。さんこそそれから音信も泣いて

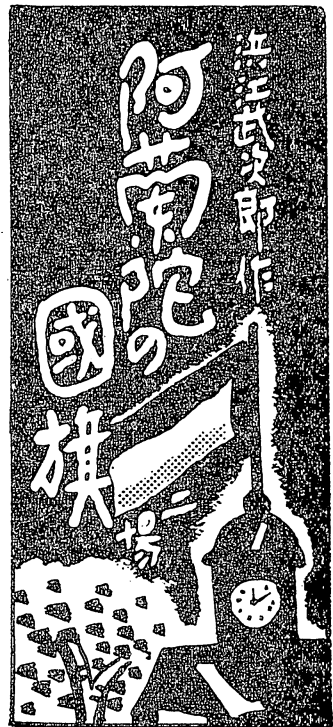
さわたる、あの雁も、女夫へは有るものを、我れは牝鹿の
つま戀かねて獨り三ほく友なし千鳥磯邊づたいを海士の子
が唱いつれたる聲くに、逢うは別れの始めに聞け、得悟
らぬは人心たさへしんきな月の顔ア、さうなりさなるぞい
な、秋の栞りに小鹿が泣けば、いつもあしたは時雨する、雨
さへしんきな事わいなア、ア、さうなりさなるぞいなア、ア
、さて今は片便り堅田に續く唐崎のト木は君が名によせて
松ぞ聞けば嬉しくも落葉拾ふてかんざしに、さすや日蔭も
な、めなる、七本柳數へては、まさるめてたき山王の櫻の林
紅葉してちにまじわるかみご、ろ、祈らんものこそせきのほ
る、さか本坂の小石道、歩みなやみてふしたまふ。

(二) 大内裏大友眞鳥

かごり姫道行

かくれ家の軒洩る月にこがれいで、露にやしなふ袖がうら、
おしやすがり抱きしめて、下着に残る香鳥姫、契りを二世
ミ兼道の未來のために黒髪を、そぎ尼の身ミ染めかへて、う
つふしいろのけさよりも、夕べわかろきづだくろ、からみ
に持ちし始りも柱よ杖きたのみぬる、かひも渚のみなしがい
かたしく袖の片思ひ、寝もせぬ戀をほだいにかけ、五戒をた
もち三界の家をいでたる法の道、朝の脚絆の紐きけて、むす
ぶす、きは招かねぎ、柳がもきに立よりて、見れば悲しや我

夫のねむれるごき佛顔だきつかうにもさするにも、こどか
ぬあしのうらめしき、世の盛衰やミ泣き沈む涙すらく露し
ぐれふりわけ髪を仇し野の煙りさなさば後の世の迷ひを拂ろ
ふ夜嵐に吹き亂れたる柳の枝のわがための楊柳觀音の導きた
もふき嬉しくて、のほろ心もいさかひなき、手足もふいお
ミされじミ、こすへにからむ鳶かづら、たぐりてはれも
の板に取りつく身はわなく、けさにひんまく夫の顔、曳
けぎ、しやくれぎ、ちびきのいし、戀の盗みミ白浪のうらか
へしたるくぎのしがらみおもふ、願ひはたり八すんぬけて、
おつるは首もろミも野末の犬のおそろかす、聲をふせぎに打
つつぶて暗はあやなき松蔭にしばしたよりてなでさする、胸
はだくく突鳴らす、鐘の岬に打つ波も、諸行無常ミひびき
の灘、恐さ嬉しさ現なく、心そどろに夫の首、生きたる人に
いふ如く、わしはお前の前髪の長きぎりも夢の夢、昔し戀
しきミ節や、思ひきらしやれ、もう泣かしやんな、わしは
泣かねぎそれこなさんの、い、やこなたのいやそなたの顔つ
くくミ打ちまもり、思はずわつミ歡くにぞ涙の露の玉の緒
も誰へなば絶へね、二人り行く道二人りは行けき片羽がひ、
櫛も入らねば簀も捨て、ねをなくつるわたり、何處ミ問はん
人もなく、身一つに降るあられがま、青屋のうらの片びさし
われはかづきの尼ならであまのすてぐさいたづらにくらまさ
りゆく袖袂ほしなもののさ漁り火のかけをたよりに迷いゆく



加世三癖

られたのではないかと心の動悸は納まらない風だが浦波が今日加比丹に歓迎されて様々の貰ひものをするのは皆自分の口添えあるからだと暗に恩を着せやうとするらしい。

通詞見習の青年豊田五八郎が一心に洋書を讀みながら二人には心づかず行過ぎやうとした浦波 豊田さん大層御勉強ね。

初めて心づいて加福には丁寧に會釋をして。豊田 大通詞殿、私は今日程赤面したことはございません。

加福 何んだ。

豊田 今日初めて碇泊中の黒船へ参りました。が、私の蘭語は少しも乗組員に通じませんのです。

加福は悸つとしたがさりげなく、

加福 は、ムムそれは貴様が未熟だからだ。七ヶ月や八ヶ月の修業で何が出来るものか。にべもなく加福は云ひ放つて猶も豊田の問を發するのを生意氣な、とばかり豊田のノートを引きさき捨て、了つた、豊田の無念さはその表情に現はれただけで上司に對しては如何ともする詮もない、小通詞の横山與三郎が奉行

長崎は出島にある阿蘭陀商館。舞臺右に茶褐色に塗られた洋館が見える。

庭には薔薇や南洋植物が植えられて長崎でのみ見る異國情緒だ、土塀越しに瀾を見晴らし沖には一艘の黒船が堂々たる雄姿を浮てゐる文化六年の秋の午後である。

執務の終りを告げる鐘が鳴り響く、それが海にひびいて餘韻が物淋しそうであるが事務を終へ大館の人達は之れから手足を延ばされるといった風に安息の面影を浮べて足どりも愉快そうに去つて行く。

と賑やかな聲と共に此の蘭館へ出稼ぎの圓山の遊女達が出て來た、中に染川と呼ぶ遊女は

寶石入りの頸飾を他の遊女達に見せびらかして自分の働きはこんなものだと言るのであつた。

羨しげに他の遊女達は出代りまでに精々御機嫌を取らうなど、裏の方へ去つた、入れ違ひに大通詞の加福吉左衛門と蘭館出入商人の博多屋小右衛門と話しながら出て來る。

小右衛門は加福に頼んで抜荷をしやうとするらしい、加福の手には小判が握られた……一割五分の歩の話も立所に定つた、誓ひの握手は二人の間に堅く交はされた。

突然扉から遊女浦波が出て來たので二人はさうり氣ない體を粧ひ小右衛門は浦波に愛想を云つて踏々と去る、加福は浦波に今の様子を知

所から拔荷買を引立てゝ来たことを告げた。
やがて奉行所の役人中山六左衛門を導いて加
福が出て来た、庭の方から横山が数名の組子
を指圖して密貿易者口ノ津治兵衛を引立て出
て来る、浦波は治兵衛を見て驚いた、裏庭へ
行つてゐた他の遊女達も歸つて来て治兵衛の
様を見て同じやうに驚いたが、加福の命で遊
女達は遠去けられた。

形の如く治兵衛は加福の前に引据えられて罪
狀を讀上げられたが治兵衛は空嘯いてゐる、
それが加福の目には太々しく思はれてならな
かつた。

加福 御國禁を破り海上に於て秘かに西洋人
と交易致候罪に依り死罪獄門。

加福が讀み上げた罪狀は之れだ。

中山 それが奉行所の裁斷であるが、阿蘭陀
國の面目を重じて引渡されるその範圍に於て
直隸處分せられるがよい。

加福 承知しました、コラ治兵衛日本と外國
との交易は昔から阿蘭陀支那二ヶ國丈けに限
られてゐることを知らぬ筈はあるまい、知つ
て拔荷を買ふとは不届至極な奴だ、貴様はた

つた今阿蘭陀の國旗が掲げられたこの櫓の下
で打首になるのだぞ。

と豊田に治兵衛を斬れと命じた、横山は治兵
衛を引立てやうとしたが治兵衛は立ちやらず
治兵衛 大通詞さん今、日本との交易は阿蘭
陀と支那に限つてゐるのだと云ひなすつたね
加福 それがどうしたんだ。

治兵衛 ぢやアお尋ねするが一體阿蘭陀とい
ふ國は當今世界の何處にあるのだね、バタビ
ヤ共和国なら聞いてゐるが阿蘭陀といふ獨立
國のあることは俺は知らない。

加福と横山は急所を突かれて悸つとした。

加福 ハハ、ない國の國旗がどうして日本
の長崎にあの通り翻ります。

治兵衛 ない國の國旗がどうして日本の長崎
にだけ翻るか。

加福 黙れ。

と靴で治兵衛を蹴つた。

治兵衛 ハハ、その通り阿蘭陀は佛蘭西の
靴で蹴飛ばされたのだ、ナポレオン、ボナパ
ルドといふ大將軍の靴で踏みにぢられたのだ
ハハ、ハハ、。

治兵衛の云ふ所中山には合點の行かぬ節が多
かつたので治兵衛の處分は明日といふ事にな
つた、そうして治兵衛は車へ送られた、加福
と横山は阿蘭陀が獨立國でないから條約無効
それよりもこんな大事を秘密にしてゐた自分
達を顧みて、二人はひそくと前後策を講じ
た、秘密を知つてゐる治兵衛と秘密を知つた
らしい豊田も共に亡きものにしようとして、そ
して豊田は呼ばれて来た。

第二場 同 石藏前

同じ日の夜、月が山の端に落かゝり、波上に
は巷の灯が浮んでゐる。

石藏は夜の冷氣に一層冷やゝかに、そうして
重苦しい姿である、藏の石階に黒人のドムが
腰かけてギターを弾いてゐる、遊女玉鶴と蘭
人が手を組んで通り過ぎる、浦波がそつと出
て来て藏を開けてくれと手眞似するがドム
には通じない、金を握らせたが喜ぶのみで何
んの皮應もない、浦波はじり／＼した、治兵
衛の名を呼んだが答へはない、人の氣配で浦
波は物蔭に忍んだ、豊田が出て来て藏を開け
た、時の鐘を鳴らしに來たボーイはドムと一

緒に去つて了つた、豊田と治兵衛の間には息詰るやうな沈黙が暫く続いた。

豊田 貴様は先刻ナポレオンとか云ふ佛蘭西人の話をしたな、バタビヤといふ共和国の話をしたな。

治兵衛 それがどうしたのだ、ナポレオンとは世界を我物にしやうと今歐羅巴を暴れ廻つてゐる大英雄だ、バタビヤ共和国とはそのナポレオンに攻滅ばされた阿蘭陀の今の姿といふことを知らないのはお目出度い日本人ばかり、それをいふことにしてあの通り日本長崎の出島にだけ麗々と阿蘭陀國旗をあげるばかりか、今年入港のあの黒船も海上をイギリスと云ふ敵國に封じられた苦し紛れに阿米利加船を備ひ込んで阿蘭陀船で候とは何といふ横着さだ。

豊田 阿米利加船、俺の蘭語が通じなかつたのはさうした譯か。
豊田は晝の疑問が初めて解けて残念さうに沖の黒船をじつと見入つた、館の方からは哀愁を帯びたヴキオリンの音が流れて來た、二人の間には一種の親しみが湧いて來たらしい、

治兵衛の西洋諸國の事情に委しい話を聞かされるにつれ、豊田の學問熱が一層あふられた。治兵衛を亡きものと頼まれた豊田も治兵衛を斬るが最期、阿蘭陀の秘密が知れ渡ると聞いては手を下すよりも、秘密はこのまゝ葬つてどの道日本では暮らされない治兵衛と共に海外へ乗出さうと考へた。

豊田 俺は長州藩の豊田五八郎と云ふものだが蘭學を學ぶ爲めにこの出島へ入込んだが、腐敗し切つたこんな中で苦しむより西洋へ乗出して親しく彼の國の文明に接したい。

治兵衛 それで俺を助けてくれるのか、よし引受けませう、今夜のうちに外海へ乗つけ、仲間の船を呼んで遠出の漁と見せかけて朝鮮まで渡つてしまへばもうこつちのものだ。

豊田 その姿で所詮館内はぬけられぬ、バツテラポートをこの屋の下へ廻はす間待つておくれ。

豊田はボートの仕度に行くので治兵衛を藏の中へ忍ばせて去つた、加福は横山とドムを連れて様子を見に來た、ドムは藏の中へは入つたが忽ちドムは入口へ轉がり出た。

つゞいて治兵衛も躍り出た。
三人は刀を抜いて治兵衛に斬りつけた、縛されたまゝの治兵衛は危くその間を潜りぬけてゐる。

轟然一發……。

加福は右胸のあたりを射ぬかれて倒れた、横山とドムはこの氣配に逃げ去つた、物蔭から拳銃を持った浦波が出て來て治兵衛の縛を解いた、銃聲を聞いた豊田も戻つて來た、そして治兵衛の無事を喜んだ。

治兵衛 女の撃つた一發でデビルはあのさまだ。

豊田 剛愎のむくひだな。

浦波 かうなつたら私も一緒に呂采へでも何所へでも、治兵衛さん。

治兵衛 馬鹿をいへ、女が連れて行かれるか拳銃がかう己の手に渡りやお前にかゝり合ではない、早く部屋へ行け。

浦波 でもお前はもう日本へは。

治兵衛 なアに餘炎のさめるまでだ、直に歸つて來るよ。

浦波は何んだか物足りなさそうであつたが、

氣強い治兵衛の言葉に今は淋しげにうなだれるばかり。

豊田 餘炎も直にさめるだらう、日本の眠り

ももう直にさめるだらう、さ治兵衛。

豊田は浦波に慰めるやうに云つて治兵衛を促した。

意識づいた加福は此時半身を擡げて二人を呼び止めた、二人はハツとして立止つて加福を見守るのであつた。

加福 待て、出て行く前に俺の渡すものを受取つて行つてくれ。

治兵衛 何だと。

加福はポケットから何か取出さうとして右手がきかない。

加福 手が動かない、誰か俺のポケットにあるものを出してくれ。

物蔭から横山が恐る／＼出て来た。

横山 大通詞殿、大丈夫ですか。

加福 横山か、ポケットにある金を治兵衛に渡してくれ。

横山がおど／＼しながらポケットから晝間の金を出した。

加福 治兵衛、貴様も拔荷買なら西洋人の習慣通り約束は堅く重んじるだらう、さ受取つてくれ、スデルレン、ゲルトだ。

豊田 スデルレン、ゲルト……留金か。

豊田の通詞は立處に役立つた。

治兵衛 よし受取つてやらう、丁度二人の旅費になる。

横山 やられた上に金までやるんですか。

加福 かうなつて見ると殺した跡始末の面倒より、この疵で罪人取逃しの言譯が立ち、その金で阿蘭陀の秘密が買へれば安いものだ、まだ／＼これからうんと儲けるのだ。

治兵衛 何所まで慾の皮がつゝ張つてゐやアがるのだ。

豊田 俺の學問慾も決して加福に負けやしない。

治兵衛 さういひ此方も御同様だ、ハハハ、豊田は土堀へ登らうとした、ドムが又現はれて斬りつけやうとしたが、治兵衛は一發の下に撃退して仕舞つた、土堀の上に立つた豊田は、西へ落ちやうとする月を指して、燃ゆるやうな目で見入つた。

豊田 治兵衛、あの見當だな。

別れを惜む浦波はしかと治兵衛の袖をとつてゐた、定めて心の中では泣いてゐるのであらう、豊田の聲を聞くと治兵衛は取られた袖を振切つて土堀の上に立つた、洋々たる希望にのみ何等の未練もないやうに……。

幕

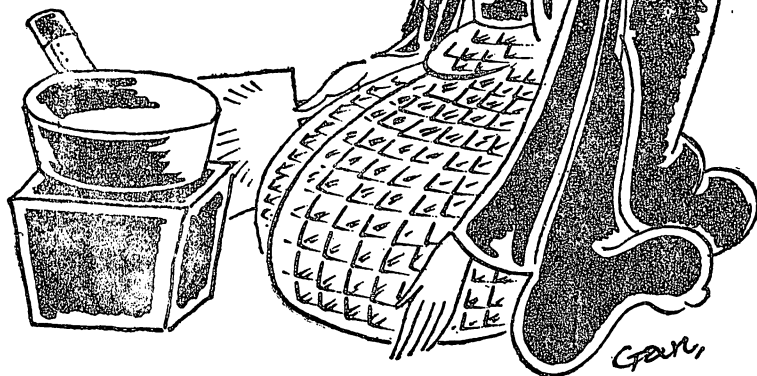
配役

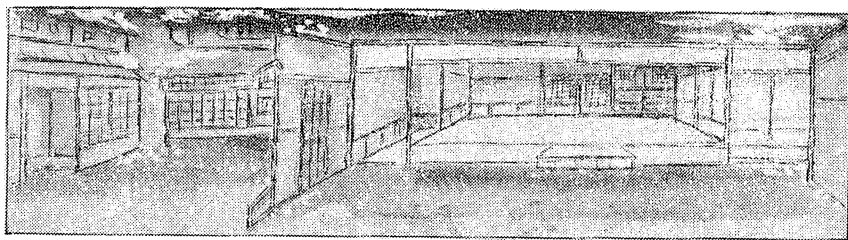
密貿易者の津治兵衛	延 若
通詞見習豊田五八郎	福 助
大通詞加福吉右衛門	壽 三 郎
小通詞横山與八郎	吉 三 郎
黑人奴隸ドム	鷹 正
博多屋小右衛門	九 圓 次
中山文左衛門	右 圓 次
遊女浦波	扇 雀

ヒゲタ醬油



奥様！
上品なお料理の
風味は
ヒゲタが持つて居ります





中座卯月興行上演

(渡邊霞亭作)

夕霧伊左衛門 (二幕四場)

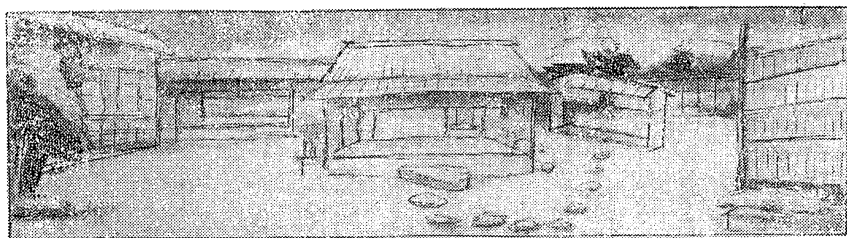
船 越 文 一

(上)の一

雪がちら／＼と降つてゐる。京都大佛前馬町の藤屋と言へば長者番附でも幕の内の大家であつた。店先に積る雪を丁稚の音松と飯焚の權助が口でんが／＼が過ぎて争かひなら搔いてゐる處へ下女のお春が顔を出した。山出し女にも戀があつてお春は番頭の政七にぞつこんと惚つてゐる二人からそれ／＼からかはれてお春はかつ／＼上せた。三人三巴の最中へ噂の政七が紺前掛もしゆうせうに出て來た。音松と權助はあ／＼でゆつくり

樂しまんせや／＼なほも押搦つて暖簾の内へミ姿を隠した。お春はこゝぞ政七にく／＼寄つた。彼女は既に泣いてゐる。奉公初めにふ／＼見染めて何百度附文したか、その紙代でも半期のお給金は飛んで失つた。だが願望は叶ふた。然し秋の扇を捨てられそうなので躍氣／＼なつてゐるのである。變つて下さるなや、何の變つてよいものか／＼濡模様の最中へ飛込んだのは山城屋の助七であつた。

助七はたつた今五十石で大阪から上つて來たのである。その急用は助七の口入れで藤屋の息子伊左衛門へ座頭金五十兩を澤の市の帳元から貸させたのを、政七が伊左衛門から受取つておきながら、助七から催促してくれ／＼はさういふ譯か／＼聞いた。政七はそこが相談だ、その代り五十兩は山分だ／＼惡事の相談を持ちかけた。二人は此の藤屋の娘おむらについて非望を抱いてゐた。では大佛前のわらんじ屋で鯛燕で一杯



飲つて待つてゐてくれ、政七は助七を歸らした。

奥の間から美しい聲が聞える。娘のおむらが政七を呼ぶ聲だ。京娘のあきけないうちにも加茂川の上下で磨いた美しさが光つて見える。政七はおむらに差向ひで語り合ふ好機會を喜んだ。彼はいかにも實直に陰日向なく奉公人の取締に氣骨を折つてゐるかを語つた。おむらがそれはやう知つてゐるさいふので、飛び立つばかり嬉しがつた。日本中の人に知れるより、おむら一人の目に叶ふたことが喜びだつた。政七が藤屋に奉公してから主人の八十右衛門は死去され、後はお家を中心の女世帯で當主の伊左衛門は身持がきまらないので不安な日が此の分限者の家に續いた。おむらは母親の心勞を見るに見兼ねて、女は女同士相見互ひだから、一層大阪の新町へ行き遊女の夕

霧に逢つて伊左衛門の身持の直るやう話して來やうかと思つたが、世間知らずの彼女は大阪へ行く術を知らなかつた。

政七はこゝだおむらを使喚した。自分がお伴をして大阪へ行き夕霧太夫に逢へばすぐ解けるこゝだと言つた。おむらはそれにしても無斷家出後の母の立腹を考へた。政七はその立腹も兄を思ひ母を想つてのこゝだ解れば譯はない。では今夜、人の顔が見へぬやうになつたら、そつち忍んで裏の路次口で待ち合そうと約束した。――伏見までは駕、それから三十石、夜明には八軒家に着く、それから新町へ、二人は違つた意味での嬉しさを胸に秘めて別れた。後で政七は北叟笑んだ。十八のおほこな生娘を連出して日頃の思ひを首尾よう晴そうと、濡れぬ先こそ露をもいさへ一旦なびいた上は自分の女房、兄の伊左衛門が不身持で勤當されたら跡目相續はこの自分、藤屋の旦那政七様ぢや夢中に獨語を言つて喜んだ。だがその始終を聞いてゐた者があることは知らない。下女のお春はそれを聞いて一大事到来、このまゝではすまされぬと暖簾の蔭で首を傾けた。

雪はなほも降りつゝた。羽織袴に大小も物々しく小栗軍兵衛は案内を乞ふた。政七はお家様と奥へおらんだ。伊左衛門の母お順が五十路にしては苦勞のあきを見せた顔つきで、娘おむらを連れて出て來た。小栗軍兵衛は阿州徳島の藩中

名乗つて、先達當家の息子伊左衛門に金子を貸したが、入用につき受取りに來たと言ふ。お順を始め一同は驚いた。その金高が七百貫目と聞いて二度屹驚した。軍兵衛は一旦は斷つたが命にもかゝる事と聞き、たつて頼む手合されて刀の手前、殿には申譯ないがお手元金を貸し與えた、それが御入用と仰出されたので事露顯したら切腹しなければ申譯が立たぬこと、なつたので受取りに來たと言つた。人々は困つたそこへ歸つて來たのは番頭茂七である。茂七は門口で始終を立聞してゐた。彼は軍兵衛に厚く借金の禮を述べ、何處で取引が行なはれたか聞いた。軍兵衛は新町の吉田屋で渡したそれには證文があると言類を取出した。政七は伊左衛門の落度なること故、さかんに武家に口添えた。茂七は自分もよく見、お順にも見せて、その證文の手跡が伊左衛門でない事、押した印形が逆である事を言つて、

『藤屋伊左衛門、餘程うろたへたに見えます、はゝはゝ』と笑つた。軍兵衛は慌てながら代官所へ訴へて出る言つた。茂七は殿のお手許金を自儘になされては御身分にかゝりませうと鼻であしらつた。軍兵衛はではこの店先で切腹すると言ふ。お順もおむらもはらく心配した。茂七は切腹するなら勝手にしたがよいが、場所もあらうに殿のお手許金を新町へ持出したことあつては死後の恥辱、犬死になりはせぬ

かきめつた。軍兵衛はぐんにやり參つて失つた。母親と娘は嘔きあつた。そして手箱より金子十兩を取出して茂七に渡した。

『軍兵衛様、これはほんの輕少なれど、その證文をお賣りなされて下さりませ』

軍兵衛はしぶく證文と金子を引替へた。

『折角、うまくくらんだことも……』

『押しある印の逆さなり』

『朱よりも赤い顔をして、すぐにお歸りなさるは……』

『思へば……』

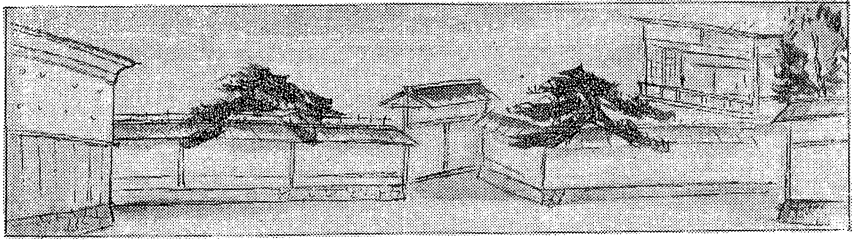
ミ口惜しがるのを、茂七はほんミ門口をたてて『ようお越しなされませ』と嘲笑つた。軍兵衛はその金を握つて澁々ミ立去つた。

『子故に泣かぬ親はなし、あ、伊左衛門には困りますなア』とお順は涙を拭いた。

(上) の 二

茶室には寒菊がゆかく匂つてゐた。風雅な床の間、好みの掛物、茶釜、茶道具、流石は藤屋の茶室である。雪は依然ミして降りつゞけてゐる。

ゆかり濃色の藤屋に風雅なる軒にかほりの茶室にて、結



ぶ夢さへそれぞさはいざ白雪の庭の面……

『お隣りでは雪見酒をお始めなされたそう。人の心も知らず面白さうに唄ふな。あの唄で思ひ出す……』

伊左衛門は去る秋の月夜に吉田屋で夕霧ミ自分が連弾きした夜の面白さを追想して今頃は酒にやつれてゐやうか案じ、いつそこれから腰をうかせた。

『あゝ霧のこ思ひ出す、一時半時もかうしてはゐられぬ。此胸が張裂けるやうに思はれて、さうも心がすまぬこのう。寝てこませうか』

ミごろりミ横になつた。母親のお順が風呂敷包みを持つて瓦燈口から出て来た。不貞寝をミがめて、

『それほぎ内がいやなら思ふ所へ行ぐがよい』

ミきめつけ、藤屋の由來を説いた。先祖八十右衛門が東山義政公が銀閣寺建立の時、御普請御用を承り手柄があつたので此馬町に屋敷を頂戴し、父八十右衛門で十七代筋目正しく人に知られた家柄であつた。その子が傾城遊女に心を奪はれ家を外なる身持放埒、もし藤屋の暖簾に疵がついたら御先祖に申譯がない。

『勘當すれば用はない、早く爰を出て行きやいのう』

ミきつぱり言つた。伊左衛門は驚きながら

『霧のこは思ひ切り家を大事に致しまする。勘當ばかりはお許しなされて下さりませ』

ミ母に絶つたがお順は聞かないばかりか軍兵衛から買つた證文を見せた。伊左衛門はその證文に覚えはないが思ひ出したのは大阪の編笠茶屋で悪侍から難題を持かけられ證文に印を押せミ言はれて判を渡したこゝである。お順はそのいきさつは認めた。

『金ならたつた十兩で長者鑑にのる程の藤屋の主人が勘當ミは邪慳ミも胸慾な親ミも思ふであらうが、家の掟ミ父御の遺言堅く守る母が心を推量して、さうぞ今から何處へなミつミ、出て行つても』

ミこゝをわけて語つた。妹も言葉添えた。『もう何も申しませぬ。お言葉に従ひこれから参るでござり』

ませう。さうぞ御身をお大切に、此の伊左衛門が今一度、誠の男になる時まで達者でて下さりませ』

「伊左衛門も泣いて別れを惜んだ。

「さすが親子の恩愛に跡を氣づかふ心根を、不惑も思へご聞かぬふり……」

『あゝ長生きすれば憂目も多く、天にも地にも一人の悴を勤當する親の心のせつなさは、このやうであらふと思ふ。』
「嘆きながら母親は風呂敷包みより紙衣を取り出した。

『これ此の紙衣、肌寒うあらうとも母が情の一品ぞや、必ず余人に渡すまいぞや』

伊左衛門は押し頂いて泣いた。

「何の人手に渡しませう。春秋共に身にしまめて御恩を着るで

「泣きませう』
妹のおひらも泣いた。

『けふの紙衣に引かへて』

『故郷に飾る錦の小袖』

『その時は御勘當おゆるしなされて下さりませ。おひらの執成し頼むぞや。左様なれば母上様』

伊左衛門は立ち上つた。雪は頻りに降り続いた。母子はなほも悲しき別れを惜んだ。

(上) の 三

三十三間堂が堀の上に見える、一面の銀世界である。藤屋の裏口では番頭政七が頬冠りに尻をからけ、小風呂敷を首に巻いて立つてゐる。手拭の吹流しで女が忍んで出て来た。娘のおひらだと思つて一散に連れて去つたが、手拭の蔭にはお春の嬉しげな顔が見られた。

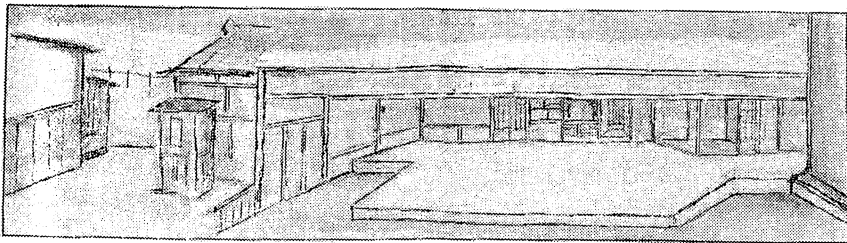
伊左衛門が妹に傘をさしかけられて出て来た。雪には寒い紙衣姿でしほくミ立去らうとするのを二階の障子が開いて母親の顔が浮いた。

『お、母様か』無事でなや』

伊左衛門は母の方に手を合せた。

(下)

大阪の新町、槌屋横町の駕屋勘六の家では餅搗に賑はしかつた。若い者の梅吉が鏡餅を拵えるのを隣家の女房お鶴、お龜が手傳つてゐる。餅搗の若者達は祝儀を貰つて喜んだ。新町の名題の扇屋でも今日は餅つきである。夕霧太夫の身受けがきまつて金が山程這入つたミ噂さし合つた。駕屋の主人勘六ミ女房お徳は夕霧の身請け沙汰を聞くにつけ、藤屋の若旦那伊左衛門の行方を案じた。
「冬編笠の垢張りも紙衣の火灯膝の上風吹しのぐ忍ぶ草、忍



ぶすれぎいにしへの花は嵐の音
かいな、けふの寒さをくひしはる
はみ出し鋤も神さびて銷つまるこ
師走の末……

伊左衛門の紙衣姿がしほくく出て
来て餅くばりの禿さゆき合つた。
それを外すまばつたり突當つたのは
山城屋の助七である。伊左衛門に見
るより座頭金五十兩をさあ返せまわ
めいた。伊左衛門はその金は政七よ
り確かにお返ししたはづだと言ふ。
いや受取らぬ。返すこが出来ねば
代官所の水牢へ打込むに願いだ。駕
屋の勘六はあまりに往來が騒々しい
ので出て見るに驚いた。藤屋の旦那
伊左衛門ではないか。勘六は太枚五
十兩を今夜の初夜過までに返すに約
束した。助七も相手は廓で名を賣る
男一匹だ。約束の時間まで待つこと
にして引上げた。伊左衛門は今更に
勘六の親切を喜んだ。だが大枚の五

十兩を心配した。まあお這入り袖を引くので、伊左衛門は
驚いて避けた。

「引けば破る、拂へばあにしさり、草履ぬぐもはづかし
編笠のなれの果こそ是非なけれ……」

勘六は女房を呼んだ。お徳も伊左衛門の健な姿を見て喜ん
だ。さぞ寒からう羽織を着せる志を伊左衛門は戴いた。

『あゝ、時世は云ひながら、誰あらう藤屋伊左衛門様も
あらうお身が駕屋風情が着せまする羽織を頂きなさるこは
實に涙がこほれます。これが以前の伊左衛門様なら、たこ
へ紅の錦でもお戴きはなさるまい、それを思へばお痛はし
う存じます』

勘六はつくづく伊左衛門の痛々しい姿を眺めた。

『この紙衣の仕合せさら／＼無念さは存せぬ。總じて重たい
俵物材木でも牛馬が負ふは珍らしからず、犬猫が負ふたら
ばこれは三人が手を打さう。俺も丁度その通り偽證文の七
百貫目その他今の五十兩、身に覚えなき借錢まで背負ふて
立つ伊左衛門恐らく日本に一人の男、此の身が金ちや、そ
れで冷えてたまらぬわいの』

と笑つた。勘六は島原で夕霧太夫の長持かつぎをしてゐた
頃長の病氣を伊左衛門に助けられたのである。伊左衛門は酒
をすゝめやうとする勘六に夕霧太夫のこゝを聞いた。病氣を

聞いたが死んだのではないか。泣かぬから聞かしてくれ。頼んだ。お徳は奥でゆつくりミ障子の内へミ案内した。

阿彌陀池の暮の鐘が聞えて来た。勘六は昔の恩に報ゆる爲伊左衛門を逃がして自首して出る決心をした。そこへお徳が出て来た。伊左衛門から夕霧の事を聞かれて、身受された言ふてよいやら悪いやら困つた揚句言つて失つたミ告げた。

勘六はせめて一眼なりミ逢はして進じたいミ思つたがさうにもならない。お徳が酒なりミ買ひに行つた後で勘六は決心してお徳への書置を書いた。伊左衛門はそれミ知つて、罪科もない勘六に身代りさしてはすまぬ。それに夕霧が近々に大盡に身受けせられて廓を出るミいふお徳の話、夕霧故に十年近い長い間苦勞をし盡し人にも浮名を唄はれて勘當ミまでなつたものを今更他人の花にして眺めても居られぬ、一層死ぬのがよいミ、これも勘六夫婦や母親への暇乞に筆を走らせた。無慘やな夕霧は廓の内をぬけ出して、もえ立つ心人の目を忍ぶもつきせぬ縁ミ縁ミ……

羽織を着流し吹流しの手拭に顔を隠す夕霧の後より扇屋の若い衆が見えがくれについて来てゐた。夕霧は駕屋の門口に佇んで思案してゐるが、懷中より一通の書物を取り出して門口を細目に開けてほんミ投込んだ。ミころへがらミ開けて飛出そうミしたのは書置を火鉢の上へおいた伊左衛門である。

『伊左衛門さんか……』

『お、こなたは夕霧……』

『逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなア』

ミ縋りついた。伊左衛門は眼に角たてて立腹した。

『これ夕霧言ふて聞かすも無駄なれど、此伊左衛門はそなた故に勘當うけ、親兄弟にも見放され漸く他人の情にて露命をつなぐ身なれども、さもしい心は微塵も持たぬ、こなたの様な薄情者、太夫々々ミ仰山さうに太夫ミは何の太夫、住吉の太夫か伊勢の太夫か、伊勢の太夫なら大々神樂舞ふて見れや。太夫でなくば伊勢乞食か、乞食なら餅でも米でもやらう程に早う爰を通りやいのう』

ミ恨みのたら／＼である。夕霧は涙もろミにも

『身に覚えはなれども、私に恨みがあるなれば私もお前に恨みがある。去年の暮からまる一年、二年越しに訪れなくそれは幾瀬の物案じ……』

夕霧は男の無情を悲しく思つた。末の約束を思へばこそ果敢ない命を長らへて來てゐるのに、それにまだお前は私を傾城ミ思ふてか、二人は眞實の夫婦でなければならぬ。十五の春に逢初めて二人の仲に出來た子はもう七歳になつてゐる成人するのを樂しみに暮してゐる甲斐もなく、浮世の義理で子ミ呼べないのが苦になつて病氣でもゐた。また張ミ意氣地

で今日までの辛い勤めをして来たのも誰のためだ。夕霧は伊左衛門の心の強さ、胴慾さに泣いた。勘六は奥の間から出て来た。そして夕霧の寝巻のまゝの亂れ髪や、禿も連れずの一人歩きに、さては部屋を抜けて来たのかと驚いたが、それよりも伊左衛門に恨みが言ひたかつた。それは書置のこゝである。それでは勘六の恩返しが無駄になる。夕霧も一旦廊を抜けて出た上は歸る氣もあるまい。そこで二人は後をかまはないで、此處から落ちてくれ。勘六は涙を流して頼んだ。

初夜の鐘が鳴つた。

お徳は酒を買ふて歸つて来た。助七の来る時刻だ。さうしやうと顔を見合せて困つてゐる處へ助七が遠慮もなく現れた。

『勘六、約束の刻限、金は出来てゐやうのう』

助七は勘六の言ひ譯を聞かうともしないで、金が出来なければ伊左衛門を代官所へ連れて行く。吐鳴つた。全く拔さならぬ破目である。そこへ扇屋の提灯を持つて若衆が五六人やつて来た。夕霧を連れて歸らうと言ふのである。助七は伊左衛門を連れ出そうとする。扇屋の若い者は夕霧を連れて行かうとする。勘六もお徳は躍氣になつてそれを止めやうと焦つた。そこへ、駕勘さんは此方から尋ねて来たのは藤屋の番頭茂七である。助七はなほも伊左衛門の袖を引張つた。びりりこ破れた紙衣の袖から現れ出たのは藤屋の手形證文である。『銀

七百貫目右は此手形引替に御渡し下さるべく候、藤屋後家順天王寺屋五兵衛殿、伊左衛門は母の慈悲を有難く思つて手形を押戴いた。茂七が来たのも勘當御免の使者であつた。まる一年の息子之苦行を見届けて悪番頭政七が掛けた濡衣も乾せて、情けの召物ゆかりの紫染の着替へも持参してゐた。まだその上に夕霧太夫の身受けもして来たのである。

『もうこれからは世間晴れての藤屋の奥様』

伊左衛門は狐にでもつままれてゐるのかと疑つた。だが正氣も正氣夢ではなかつた。

そこへ政七が厄拂ひミ落ぶれて『厄拂ひませう』とやつて来た。

『おのれ故に若旦那のこの御苦勞……』

ミ茂七は早速政七の襟がみを引提えた。助七はそれを見て悔りした。今政七に出られては悪事露見だミばかり一散に逃けた。

『それではこやつが……』

『政七ミいふにくい番頭』

『いつそ、さうらミ西の海』伊左衛門は政七を門外へ突きやつた。『厄拂ひ』

お徳が櫛に入れた豆をばら／＼と政七に打ちつけるのを、みなは心から可笑しそうに笑つて眺めた。



七人伊左衛門

木谷蓬吟

夕霧伊左衛門に就て何か書けしこのことであるが、歌舞伎や淨瑠璃に關係した夕霧や伊左の事は、今までに口にも筆にも殆ど叙べ盡くして了ふたので、今更反古染でもあるまいから、今度ハ芝居氣を離れて、私自身で見聞した近頃の話し種、七人の伊左衛門に就て、いさゝか變つたところをお目にかかる。

A の伊左衛門

夕霧太夫が新町扇屋で、四方八方の人々から惜まれながら病死したのが延寶六年正月の六日、それから數へて昭和二年一月六日が二百五十年忌に當る。そこで伊左衛門のお宿坊であつた吉田屋第十四代の現主人木村喜左衛門氏夫妻、息喜行氏や、夕霧の抱主扇屋の流れである中村鴈治郎氏、華城風懷の諸名士の發企で、夕霧二百五十年忌を吉田屋で開くことになった。

吉田屋では、夕霧死後、回忌の追喜が怠りなく行はれて

居た、延寶八年の三回忌から、七回、十三回、廿五回、三十三回、五十回、七十回、百回、百十三回、百廿五回、百三十三回、百五十回、明治十年の二百回忌に及んで居る。こゝに二百五十回忌を営むのは當然の家習であつた。

この時である、參考の爲め明治十年に催された二百回忌に於ける當家の記録を読んで見るに、十二代の喜左衛門が其前年の十二月十二日から明くる二月十二日までの間に、前後十五日に亘つて追善の茶會を催して居る。その内、一月十三日に招ひた來賓名に

加藤藤助氏、高木膳三郎氏、澁谷利兵衛氏、内本宗甫氏の四名がある。其うち高木氏の肩書に『藤屋伊左衛門通家、福井村』とある、通家は、祖先以來親密に交通する家と云ふ義である。

高木膳三郎と云ふは當時の吉田屋の得意客である、この人が

藤屋伊左衛門は先祖このかた親交のあつて家筋だ云ふのは耳寄りの一記録だと思ふた。

世間の定評として藤屋伊左衛門は、舞臺の上に假に製作された假空の人物で、或は阪田藤十郎をモデルにして、それで藤屋名乗らせたのだらう……さう言はれてゐるが。

兎に角、高木膽三郎なる人を調べて見やうと、その肩書にある福井村、先づこの近畿地方で探つて見る、攝津國三島郡の福井村に高木姓の最高舊家が存して居ることを、同村役場から移報された。占めた一さばかり、速刻出立、院線梅田から次木驛下車、北へ東へ、銘酒正宗なごを作る所謂福井米の産地である福井村へ志す。

高木氏は當村随一の舊家で、實に徳川時代大阪の經濟界に活躍した十人兩替の一人、平野屋と高木五兵衛の郷地であつたことが分つた。その高木家十一代の末裔、名望家であり學者であつた高木半氏の妻女が、老弱ながら今尚生存し、その病床を訪づれて懷舊談を聞くことが出来た。老女の話による。

吉田屋の客、膽三郎云ふは、老女の夫、半氏の實弟であつて今は故人になつたが、兄の半氏の學者肌は違つて、異彩のある享樂家で、大阪新町で大盡遊びをしたらしいこと。また、夕霧のお芝居で名高い伊左衛門云ふ紙衣着せられた男は、親族彦坂家（同じ福井村）に深い縁故のある人だ云ふのであつた。

伊左衛門に因みの深い彦坂家を親族に持つた高木膽三郎さん

が、明治の伊左衛門を氣取つて、吉田屋で大盡風を吹かして居た云ふことは、いかにも有りそうな話である。それで茶會の記録に「藤屋伊左衛門通家」肩書したなごは、いよく以て劇的で面白い。

さて、いよく高木家の親族彦坂家を同じ福井村に訪ねて、伊左衛門の事を聞いたが、元録の頃、親族に泉屋伊左衛門云ふのがあつて、新町の夕霧の爲に産を破り、落魄して福井村の彦坂家にたよつて來た、寄寓すること幾許時、去る時、刀劍一腰を禮心に置いて出た云ふ。その伊左衛門の刀なるものを見る、一切の飾りは凡て取除かれて、裸身ばかりである、聞く、明治の初年、本家高木の弟、膽三郎が、此の刀の飾りを賣拂つて新町へ注ぎ込んだ云ふことである。

福井村には立派な村史が出来て居る、高木半氏の編著らしい云ふ話、それには、『彦坂家』の條に

……元録年間、親戚の因故により泉屋伊左衛門が郷里に寄寓し、刀劍一腰を遺して去る、世に夕霧伊左衛門と稱する人はなかり

書いて居る。世に所謂夕霧伊左衛門が、高木家の規族彦坂家の縁者であり、又、藤屋でなくて泉屋であるのは注意ものである。これが果して實在の伊左衛門であつたか否か、詮議立ては本誌では禁物として、大阪の富豪住友家は泉屋と號して居るが、其往時は富士（ふじ）屋と稱してゐた。伊左衛門の泉屋が

住友の泉屋に縁があるか否かは知らぬが、曾ては住友家から福井村へ、伊左衛門調査にやつて来た事もあるこの話を聞ひたが伊左が住友家と關係があることになる、いよく舞臺が大きくなる。するに、伊左は本當は泉屋伊左衛門だが、作者近松巢林子は、同家を彈つて、住友の舊の呼び名であつたふじ屋を採つて藤屋伊左衛門と仕立て替へたものかも知れない——なご、巧い臆説も出やうと云ふもの。

これは、吉田屋の夕霧二百年忌茶會の記事から芽が出て、福井村史に花の咲いた伊左衛門實在説の一つである。根處いさゝかタヂノ／＼ではあるが、少くも藤十郎の藤を取つての藤屋伊左衛門と云ふ説よりは、一枚だけ顔付けが上位にあると信じる。

それに、從來の伊左衛門實在説の一つとして、京都にふじ屋何某と云ふ富豪があつて、傾城買に家を滅したといふ傳聞があるが、これとはさうやう一致しそうな點がある。伊左衛門が失敗後、京都馬町に逼塞したとか（近松の『夕霧阿波鳴渡』京都の住人だとか（近松の『夕霧七年忌』）、兎角京都と縁が深い、住友の富士屋も、元は京都の出身である。と、斯う數へて来るに、實在の伊左衛門は京都の住民だと云ふやうに説けないこともないやうである。

B の 伊 左 衛 門

大阪南區鹽町四丁目、佐野屋橋筋の西一丁、西北角の一構

へが、藤屋代々の住宅であつて、例の伊左衛門は、和歌山から養子に來た人、藤屋は伯母に當る人の家であると言ひ傳へて居る。（後に言ふ和歌山の伊左衛門説と對應の妙がある）

附近に住む古老の話に、伊左衛門で逼塞の後、いつの時代にか、藤屋は藥店と變り、明治三十年頃までも、藤屋の煉膏藥屋にて有名であつたと云ふ。その店頭には誰れの眼にも一番に印象される大きな行燈が置かれてあつて、上部に下り藤の紋ざころを描き、下には筆太に『や』の字を書いてあつたとのこと。

先年、この家の倉庫を買ひ取つて、自宅へ移し入れた人の話に、倉庫は三階作りの類の少い堅牢な材料で作られ、壁が二重になり、間に土沙を塗り込み、耐火用とした嚴重さ、屋根瓦の下部には厚い銅板が一面に張られてあつた。そして二階三階の間にあたる階段の上に、古びた布袋の像の額のやうなものが祝つてあつたから、藤屋傳來の物だとて、新町の吉田屋へ記念の爲め寄與したとのことである。

この家こそ、確かに藤屋伊左衛門の住宅だと傳へられ、伊左は此處から新町通ひをしたのだとて、見て來たやうに言ふ人さへある。これが伊左衛門實在説の二。

C の 伊 左 衛 門

實在説の第三として現れたのは、不思議なことに、前説と同じ南區塩町通四丁目、佐野屋橋筋東へ入つた箇所、わづかに

二丁を隔てたばかりの御近所である。

此地にも昔は藤屋ミ云ふ富豪があつたことは事實である、但しこれは藤屋平兵衛ミ云ひ、播州加古の出身、老いて道惠ミ號した、この長子に生れたのが伊右衛門(伊左衛門ではない)で、夕霧に溺れて却て名を揚げたミ云ふ傳聞。この話は、此の藤屋の末裔であつて、當時上町に住む白出老女の直話である。

然かし、これは伊左では無くて伊右衛門であり、又、過去帳により伊左衛門の歿年(享保十六年五十歳歿去)から逆算することと二年の生れで、夕霧死後三年目にやつと産聲を上げたことになるから、この説は無論預りである。

同じ鹽町に、こんな二説が並んで出るのは奇妙だが、鹽町には、幕府時代に、三軒の藤屋ミ名付ける名家があつたのだから多少混線の傾きもあつたであらう。Bの藤屋は、俗に西の藤屋ミ云ひ、塩町佐野屋橋筋の西、膏藥商であり。Cの藤屋は、中の藤屋ミ呼ばれて、同じく佐野屋橋の東、これは質屋業、他の一つは、東の藤屋ミ稱して、鹽町堺筋の東、漆屋さんである。而かも皆、別々の家であつたが、中ミ西ミの藤屋さんに、伊左衛門型の風流氣が纏綿して、孰れあやめ杜若ミ咲き分けたまでのことか――。

D の 伊 左 衛 門

和歌山板屋町の質商、北村藤左衛門の子、後に藤屋へ貰はれ

て、それで藤屋伊左衛門。墓は夕霧ミ並んで、湊吹上寺の境内にあるミ云ふ。これが紀州伊左衛門の一説。

E の 伊 左 衛 門

四代將軍の側に仕へた牧野采女正時が、老中に無禮を働き追放されて、大阪伏見堀の藤屋ミ云ふ西北國問屋へ養はれた、名を伊左衛門ミ改め、夕霧に溺れ身を滅すこと、筋書の如し。

F の 伊 左 衛 門

肥後國山鹿の産、宗方屋伊左衛門ミ云ふ陶器商人。商用で上阪中、新町の風に誘はれ夕霧に夢幻ミ迷ひ、家をも身をも失ふたミ云ふ珍説。

G の 伊 左 衛 門

前にも叙でたが、京都の分限者藤屋の息の伊左衛門ミの口碑夕霧ミは島原以來の深馴染ミ見れば、盡し筋の通つた一説。

以上、七人の伊左衛門が現はれ、伊賀實在説を確立させたやうでもあり、又却てほやけさせたかの觀もあるが、要するに七人は愚か、十人五十人百人千人の伊左が出て来るに不思議はない、八面玲瓏博愛同仁の才女(私の夕霧觀)にかゝつて、家を倒し身を滅した者が、是れ悉く伊左衛門であつたからである。



夕

霧

雜考

高

谷

伸

正月の賑ひは、さこも晴々したものであるが、まして絃歌さんざめく色里の春は格別である。

その浮き浮きと楽しい春に背いて、廓一番の全盛を極めた太夫が死んでゆく。ものゝ哀れの深いといつてもこれほどの淋しさはあるまい。

さればこそ、忽ち近松の筆となり、藤十郎の藝になつて世に傳へられた。傾城買ひを得意とした藤十郎が、わけて伊左衛門を得意とした事は耳塵集下の巻の一齣がよくこれを盡してゐる。一、延寶六年午の正月に新町のあふぎや夕霧過行きたり。同じく二月三日より夕霧名残の正月といふ外題にて、則坂田藤十郎藤屋伊左衛門といへる買手に成りぬ。此時、藤十郎三十二歳。又所望あつて同六月に右の狂言を出せり。又同年十月二日より右の狂言をいだし同二十九日迄大入。おなじく（缺字二三有？）中頃より右の狂言をいだし。是は来る正月二日より夕霧一周忌致さん見物に思ひ出させる爲也。一年の

内同狂言を四度仕る事およそ是はじめの終ならむ。實永六年己丑霜月朔日藤十郎死去六十二歳。右延寶六年午より實永六年丑のさし迄三十二年此間に夕霧名残の正月、同一周忌、同三年、同七年、同十三年、同十七年、其外同じ狂言をくりかへし致したる事、以上十八度は又珍らしき狂言也。これを見て藤十郎が鴈治郎の紙治以上に伊左衛門を繰りかへしたことがわかる。猶耳塵集にはこれにつき、これ程、繰りかへしても、

見物ゆるしてよく見てゐたり
○
ミ筆を加へてゐる。藤十郎の至藝がこれ程まで見物をひきつけたかと察せられる。

明暦の頃、箕山といふ俳僧師の著した色道大鑑といふのに、夕霧のこきを
一、尤麗容澤なれき瞠眼なり。

ミ評してゐる。つまり、左右の眼に大小があつたといふのである。しかし、これは考へ方によつて色目をつかつたりする時に便利で、かへつていろけを添へたかも知れない。だが、これも明暦とするミ、年代が怪しいから、あてにならぬ。

かうして、生きてゐるうち、随分男を迷はせた夕霧は、死んでからでも、随分われわれを迷はせた。

私の迷はせられたのは、いゝけではない。その墳墓である。夕霧の墳墓ミ稱するものは、私の知つてゐるだけでも次の五つある。

- 一、大阪、下寺町淨國寺
- 二、和歌山、小野芝町吹上寺
- 三、徳島、高雲山本行寺
- 四、京都嵯峨、釋迦堂（清凉寺）
- 五、京都、黒谷金戒光明寺

戒名は、一が「花岳茅春信女」で三が「寂光智山慧照靈尼」で、二は、夕霧伊左衛門の比翼塚で二尺ばかりの石塔が二基、烏邊山のお俊傳兵衛ミ稱する塚のやうに小宇の中に収まつてゐて石面の文字は磨滅して讀めないが、塔婆によるミ、藤伊了屋信士、夕室了霧信女ミある。なかなか洒落た戒名である。

これらの五つの墓のこゝは、「夕霧墳墓考」ミして、昭和二年の夕霧二百五十年忌に灘今津巽の上方趣味社から出した、夕霧

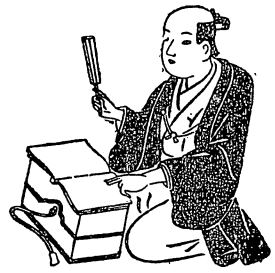
の巻に、かなり詳しく書いて置いた。

夕霧伊左衛門の芝居ミして、現在多く行はれるのは、何ミつても廓文章である。幕あひの餅つきの場面も、編笠に紙衣の伊左衛門の姿も、病鉢巻の夕霧の容も、さながら繪である。鴈治郎の多くやるのは渡邊鶴亭氏改作の「夕ざり伊左衛門」である。理詰めに近づいてゐるだけ、廓文章ミそれミを較べるミ、錦繪ミ、コロタイプミいふ對照がせぬでもない。

しかし、九軒の茶屋茶屋の軒に、春の日ざしが覗いて、街には羽根つく音、廓の少女の木履の音が、春らしい華やかさを見せてゐる時、障子を深く閉ざした家の内では、一代の名妓が、今にも息をひきさらうミしてゐる。外の明るさ賑はしさにくらべて、あまりにくらく、あまりに淋しい内の情景、それだけでミすでに詩である。

夕霧の最後、それだけを偲んでも夕霧伊左衛門の情話の最後の一頁は特殊の色彩がある。その聯想だけでも、夕霧伊左衛門の芝居は面白く見られるミ思ふ。私はその情景を思ひながら、「異説遊君三世相」さいふ短篇を書いた。しかし、それはまだまだ書きたりない愚作である。

夕霧の最後の情景、それこそ美しい繪であり、詩であるミ思つてゐる。



伊左衛門の思ひ出

三 浦 お い ろ

今回中座で、久方ぶりに成駒屋丈に依つて演ぜられることになつた「夕霧伊左衛門」劇に對する考證を、雜誌「道頓堀編輯者」より、自分に書きし命ぜられたので、秃筆を嚙んで、責に任ずることにした。

「夕霧伊左衛門」は、延寶六年二月三日、荒木與次郎座に「夕霧名残の正月」と題して近松門左衛門が書卸して以來、種々な作者に依つて書かれてゐる。「傾城阿波鳴門」「夕霧笹の袂」「浪花文章夕霧塚」「濤標浪花詠」「夕きり伊左衛門廓文章」等何れも夕霧ものである。

夕霧は御存じの通り、新町九軒屋の女郎で、吉原の高尾、島原の芳野と並び稱せられた一代の名妓であつた。その全盛言はん方なく客の招きに應じ切れないので圍ひ女郎を置いて客の座敷に、自分の代りに出したさいふこを見ても、其の持て方が知れやう。

延寶六年正月六日夕霧が、不圖した病が因になつて、百方醫療を盡した効もなく死去した時、大阪市中はその噂で持ちきつて居た。これを直ちに劇化し、追善劇として興行したのが前述の荒木與次郎座であり、近松門左衛門であつたのであるが、素敵もない大當りをこつた。書き卸しは勿論彼の名優坂田藤十郎の伊左衛門、霧浪千壽の夕霧であつた。

藤十郎は生涯に伊左衛門を十八回も演じてゐる。江戸役者の荒事に對して上方役者の傾城買のやつしは、我が上方藝術の傳統の上に注意すべきものである。

夕霧歿後七年を経て書かれた「夕霧七年忌」といふ脚本が、今日残つてゐる夕霧劇狂言本として最も古いものである。（元祿歌舞伎傑作集下参照）

その二年後、即ち貞享四年にこれを竹本座の操淨瑠璃に書き直して上演したのが「遊君二世相」である。

以上、三つの脚本は、何れも近松門左衛門の作である。傳えられてゐるが確かではない。

寶曆七年正月道頓堀竹本座上場の「夕ぎり阿波の鳴門」は夕霧狂言として完成したものを見るべきである。作者は近松門左衛門である。

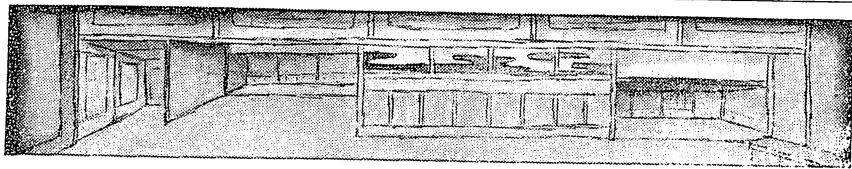
新町扇屋の女郎夕霧は藤屋伊左衛門に馴染みを重ねて一子を擧げる。伊左衛門は親から勘當され、夕霧は一子を阿波の侍平岡左近の子に欺つて左近の家へ入れる。左近の妻は夕霧を乳母として家に迎へる。伊左衛門は夕霧の駕かきに身をやつして、左近の家に行き密かに親子の對面をする。伊左衛門の母は夕霧の病氣危篤に聞いて身請して添はせる。——さういふのが「夕ぎり阿波の鳴門」の荒筋である。明和五年の「傾城阿波鳴門」は「夕ぎり阿波の鳴門」に據つたものである。

今日よく舞臺に上演される夕霧伊左衛門は安永九年改作の「廓文章」である。江戸の舞臺に上つたのは文政十年九月市村座が大切にのせた「廓文章」で、竹本三常磐津のかけ合、藤屋伊左衛門（三津五郎丈）、夕霧（衆三郎丈）、吉田屋喜左衛門（團十郎丈）、女房おせん（常世丈）さいふ役割であつた。

新町扇屋の女郎夕霧は太夫に馴染みを重ねて大盡遊びの放埒をつくした藤屋伊左衛門も、今は七百貫目の借金を負ひ、親許は勘當となり京大佛馬町に逼塞の身の上、廓で餅つきの春立つ日、伊左衛門は深編笠に紙衣を着け、尾羽打ち枯らして、新町

の根屋吉田屋喜左衛門の門口に立つ。喜左衛門夫婦の好意で手厚く持てなされ奥の間へ通されたが子まで生じた仲の夕霧は聞けば此の頃、阿波の平大盡に深くなり、現に隣り座敷でその足腰をもんで居るので、伊左衛門は嫉妬の怒り痴話口説が高じて、夕霧を萬歳傾城に罵つたがやがて、互ひの心も解けて、嬉しい逢瀬を楽しんでゐる處へ、藤屋の親御妙順から使で伊左衛門の勘當に許り、病みやつれた夕霧の身代金八百兩が届く、兩人は親の慈悲に嬉し泣き、夕霧の病も目出度く本復するさういふのが、「夕霧伊左衛門廓文章」の筋であるが、今回中座で上演する渡邊霞亭作「夕霧伊左衛門」は、「夕霧阿波鳴門」を改作したものである。

明治三十一年一月、博文館發行の「文藝俱樂部」を見るに、渡邊霞亭作の夕霧伊左衛門が載つてゐる。これは當時、渡邊霞亭が大坂朝日新聞に聘されて入社以來（彼は、此の以前名古屋繪入新聞の記者だつた）劇化し得る小説を同紙上に書いてゐたが偶々成駒屋丈の所望もだし難く「廓文章」の實説さういふべき「夕霧阿波の鳴門」を書き直したものであるが、同誌に發表したときは五幕十場の大物であつた。明治三十一年浪花座でやつたのを最初として成駒屋丈は既に數回此の劇を演じ何れも大當りを取つてゐる。今回も定めし好評を得られることと思ふが、自分は今度の狂言が書き直されて二幕四場になつてゐて、我等が多年あこがれてゐた大詰の上町平岡左近假住居の場が無いことを遺憾に思つてゐる。



中座卯月興行上演

文屋と喜撰

長 唄 連 中
清 元 連 中

本舞臺、一面の御簾。

官女一 何んと皆様、此の

官女五人のうち五人撰んで御歌合せの御なぐさみ

官女二 さう云ふ内にも、

今度召された小町様、器量と云ひ、利發と云ひ、

嘸ぞまア、戀の御歌を讀かけられるでムんせう。

官女三 それにつけても、

お受けなされし其日からお歌合せに心をゆだね、

辛氣にムんせう。

官女四 チトあちらの庭の景色を御ろうじたら、又

御趣向もムリませう。

官女五 サア、雲井の雁や

鶉、秋を餘所なる空詠め

官女六 わたしらなどは此の身がまゝになるならば通天の紅葉狩。

官女一 夫れもならず小町さま。

官女二 嘸おつかれでムリませう。

官女三 ほんに笑止な事で。

官女四 ムんすわいなア。

竹本ハ爰に僧正遍照は昔の花の良峰と嵯峨の皇居の通ひ路の其の薄雲をさへられて比叡山の御山の墨衣、思ひの床にぞつきたまふ。

遍照 是は僧正遍照と申す智識にて有つるが身に纏ふたる色衣、未來永劫佛罰を。

竹本ハ請なば受よ玉椿、落ての後は芥と

も是非に小町に對面と立よれば局達。

官女一 小町様は勅定にて。

官女二 御歌合せの一ト間の内。

官女三 對面なれば又重ねて。

竹本ハさなきだに車につめる玉章も、く

ムリ枕の仇言も推量あれとの折も折。

小町 色見へうつらうものは世の中の。

遍照 サ、のたまふな、我が仇人。

小町 人の心の色にぞありけり。

遍照 心やさしき歌人よなア。

竹本ハ僧正遍照の珠数の緒につなぎ留よと手をあげて、コレへ／＼と招かば小町はいともしとやかに。

小町 僧正様には今日も又。

竹本ハ春咲木々の花盛りはてし落の詠めなく、夏は青葉の秋來れば、雁なら知らいで散りもつれ、去りとて

生者必滅會者定離三惡道を出で乍ら悟常智識も其の色を赤きと云ひざりしぞ、善惡邪正は心の

現世迷へば煩惱悟れば菩提わけて女煩い眼の迷情けに云ふも知らざりし佛も假りに夜刃と云ひ得道あれや僧正と行かんとするを待て暫しと立ちよりたまふを局たち。

官女一 あはれ智識の御身にて戀はびたまふは、はしたなし、歸らせ玉へ僧正さま。

竹本ハひかへる衣打ちはらひ。

遍照 花咲かば上へに見へぬ談かな。

竹本ハ小町御前を見返り／＼御法の庭にぞ歸る。

本舞臺一面の御簾をおろしてある。

清元へ届かぬながら窺ひ来て、行くをや

らじと是まつた、仇にくらしい何

ぞいのう、お清所のくらまぎれ、

晩にやいのと耳に口、むべ山風の

嵐程ぞつと身にしむうれしさも秋

の草木のしほくくと獨り寝よとは

男面鮑の貝の片便り情けないでは

あるまいか、寄るをつき退けコリ

ヤどうぢや、それを思へば少將は

九十九夜さ思ひつめ傘をかたげて

丸木橋、ヲット危ない、すでの事

鼻緒は切れて片足は、ちんがちが

くくおつめた、其の通ひ路も君

故に衣は泥にあかつきのすぐく

歸るうき思ひ、足らぬながらも我

が戀は、すへつむ花の名代を突つ

けけられて恥かしい、地下の女の

口ぐせにねかして緒牙の片棹で夢

を流して隅田川、男よけならそつ

ちから、逢へば、いつもの口車、

のせる手管はお斷り、逃げんとす

るを戀しらず、引とめるを振はら

ひイヤくくくあふ戀、待つ戀、

忍ぶ戀、駕は仕て戀、もときのか

やよんでこひ。

官女六人 サアく問はせませしよく。

康秀 問はしやれく。

官女 四疊半のしつぼりは。

康秀 これを圖ひと言ふはいのふ。

官女 家根でがざくあはれるは。

康秀 そりや知れた事猫の戀。

官女 給仕の入らぬ据膳は。

康秀 喰はぬは損ぢや持つて來い。

官女 お船は。

康秀 浮て來い。

官女 とんびは。

康秀 とんで來い。

官女 からすは。

康秀 かつて來い。

官女 くいなわくくくく。

康秀

へぎつちり詰つたやにせる、烏帽子

の息のうく計り是じや行かぬと康

秀が富士や淺間の煙はおるか、衛

士の焚火は澤邊の螢、燒や藻鹽に

身をこがす、そうぢやへ花の風の

風の邪魔よるはこなたへ、遣り戸

口長殿さして走り行く。

本舞臺一面の櫻山の體。

清元へ世辭で丸めて浮氣でこねて小町ざ

くらの詠めにあかぬきやつに、う

つかり眉毛をよまれ、主は鯨の取

り所ねらりくらりと今日も又、浮

かれく来てたりける。

へ浪立胸を押なで入り居れど鉢巻

を幾度もみてもみなれ棹、今日の

御げんの初夢悪性と聞いて此胸が

臍の月や松の影、私やお前のまん

どころ、いつか果報も一と譽られ

たさの身の願ひ。

坊主 御師匠様、これへ御出でなされました

か。

喜撰 何しに來た、さうして雨も降らぬにそ

の傘は。

坊主 是はあなたへ御意見のため。

喜撰 何に意見とは、ヲ、分つた、濡るゝを

いとふと云ふ心か。

坊主 マア、そんなものでムりまする。

喜撰 目出度い御代に住吉の。

坊主 松は常盤の一ト踊り。

へ浪花江の岸邊の茶屋へて腰うちか

けてヨイく解けてほぐれて逢ふ

やも松に甲斐あるヤンレ夏の雨。

へ姉さん本所かへ島田金谷は川の合

はたごはじたてお定り、お泊りな

らば泊らんせ、お湯もどんくわ

いてある、障子も此頃はりかへた

壘も此頃かへてある、お寢間の紐

の仇どけの結んだ縁の一ト夜妻あ

んまりにくうはあるまいか、ヲ、

そうだらうく來世の生は黒牡丹

おのが庵かたへ歸り行く。

拍子

——幕——



萬 カレ

華 ドス

鏡 コオプ

飛

鳥

明

子

かれぎすこおぶよ

わたしの言ふことを

きいておくれ

若葉の匂ふ窓ぎわに立つて

お前を覗きあやつりながら

さまぐに織り出される

数々のふしぎな繪模様を

わたしは飽かずにながめくらす

かれぎすこおぶよ

わたしはお前が好きなのだ

あるは甘美にして

あるは芳烈



あるは織細にして

あるは豪宏

握ればたなごゝろにも入る少さなお前は
さてもかすくの夢をお持ちだこゝ

かれぎすこおぶよ

わたしはお前が羨しい

お前のその身軽いらしい

自由な

かたちにはまらない

奔放な姿よ

ねえお前

わたしのおざりも

お前の姿のやうにはゆかないのかしら

ねえ

かれぎすこおぶよ

そつゝわたしに教へておくれ



樂屋日誌

藤代君江

三月三日。日曜日。

いよ／＼今日から春のおざりのお稽古がはじまる。午後一時みんな練習室へあつまつて、江川先生の本讀みをきく。こんごのは題名からして「開國文化」なんて云ふんだからいつもの踊りとはだいぶん毛色のかわつたものだと思つた。ここに「五十年後の日本」なんて云ふ場では、機械やビルディングや人造人間などが踊るんだ云ふ。きつ／＼今年のおざりは素晴らしいものが出來上るにちがひない。

私の役は「日本の印象」の中の腰元である。香椎さん、東條さん、櫻井さん、美川さん、高津さんたちが一緒に踊るのだ。みんな奇麗で、踊りのうまい人達ばかりだから、こちらも負けないやうに一つうん／＼勉強しなければならぬと思つた。

三月五日。火曜日。

江川先生が御病氣なので、けふはお稽古が休みであつた。

三月八日。金曜日。

飛鳥さん、香椎さんたちと一緒に大丸の書籍部へ行つて新村出氏の「南蠻廣記」を「續南蠻廣記」それから本山桂川云ふ人の「長崎花街篇」を云ふ本を買ふ。これからはドシ／＼こんな本を讀んで異國情緒を研究させよう／＼三人で申合せをしたのである。



三月十一日。月曜日。

けさ千葉さんが上海からおかへりになった。

三月十三日。水曜日。

お稽古が早く済んだので、部屋で踊りのおさらへをしませうと云ふ事になつて、稽古場の三味線をもち出して「保名」のおさらへをする。はじめは大真面目にお稽古をするつもりだったのが、だんくはしやぎ出して、さうくおしまひには、わたしが七代目菊五郎の保名をやるのよ、だまか、ぢやわたしが延壽のいいのぎを聞かせるわ、だまかになつて、さうくおさらへは目茶々々。

そこへさび込んでゐらつた山田さんミ大森さんが、何だ清元ならあつしたちにおまかせなさい、さか何さかで、シャシャシャシャシャ、ヨウ、シャ、シャ、シャ、さかへる春のさむさをやり出したものだからみんなキヤツキヤツ云つてあそんでしまつた。ほんさうに面白い一日だった。

三月十四日。木曜日。

山下さんが部屋へやつていらつして、君はね、南蠻人ミ紅毛人ミの違ひを知つてゐるかいつてきかれたから、そんなこと位知つてゐるわ、南蠻人つて云ふのはイスパニアミポルトガル人のことで、紅毛人ミ云ふのがオランダ人ミ英國人のことだわつて、昨日日本をよんだ通りを云つたら、偉いね、感心だね、流石は近ごろ勉強してゐるだけあるつて云つてほめられたので、何だかくすぐつたかつた。

三月十六日。土曜日。

いよく明晩から舞臺稽古である。それで今夜は最後の通し稽古でみんなヘトヘトになるまで練習をした自信がある様な、ない様な、明晩の舞臺が心配である。



何が彼女に「はい、原稿を

かきます」と約束させたか？

香 椎 園 子

春のおさりの宣傳寫眞をうつすので、一生懸命に奇麗にうつる様にお化粧をしてゐるまつ最中に、雑誌「道頓堀」の記者のHさんが樂屋へお見えになつて、何か書けと仰言る。實のところ、私はお友達に手紙をかいたり、樂屋でおしやべりをしたりするのは、大好きなだけれき、四角張つて公開の席上でお話をした、雑誌へ發表される原稿をかくなんぞ云ふことは、餘り好きではない。

だから、わたしは敢然としてHさんに正面から云つたのである。

——何か書けつて仰言いますが、ねえHさん、恥をかくのぢやあるまいし、さう簡單には書けませんわ。つて。

そしたら、Hさんは細い目をますく細くして、あなたは仲々うまいこを仰言る、その御要領で何か一ツごうか——

いやになつちまふ。

それで、わたしは今度は愁然としてHさんに側面から云つたのである。

——そんなつもりで申上げたのぢやありませんわ。ほんとうにわたしには何も書けないのよ。ほんとうだ



わ。それにわたしなんかの原稿が雑誌へ出たら、それこそ雑誌が賣れなくなるわよ。そんなことになるよ申譯がないから、遠慮させていただきますわ——つて。

そしたらさうでせう。

——その御遠慮には及びません。ほんさうに、まつたくなんです——だつて。

ほんさうにいやになつちまふわ。何て記者つて云ふ人間はこんなに頭がいいんだらう。あきれたもんだわそこで、わたしはさうく断然Hさんにむかつて哀願したのである。

——Hさん、一體あなたはわたし何が云つてお詫びをしたら、勘辦してくださいますの。それを云つて下さつたら、私はどんなことでもその通りにいたしますわ。きつミですわ——つて。

神々さま。そしてこの原稿をおよみ下さつてゐるお氣の毒な皆さまよ。さうか正當な判斷をお與へ下さいまし。わたしがいいか、記者さんがわるいかつて云ふ事を。ねえ。さあ、いま申しますから、よく聞いてそしてはつきりミ判斷して下さいませ。こんなですよ。わたしのこの切なる哀願に對して、記者さんはさう云つたのですよ。

——それはね、香椎さん、何か一ツ原稿を書いてお詫びをなされば、原稿をかくのを今度だけ特別に勘辦してあけてもよろしうございます。ね、おわかりになりましたか。

萬事は休しました。

この原稿をおよみ下さいました、ほんさうにお氣の毒なみなさま。これが即ち、何も原稿をかく材料を持ち合せてゐない彼女に「はい、原稿を書きます」ミ約束させた理由でございます。

創立十週年の春を迎えて傑作揃ひ!!

創立十週年紀念映畫

蒲田超特作品、牛原虚彦監督

進軍 (マーチン・グーオン)

鈴木傳明、田中絹代主演

蒲田超特作品、牛原虚彦監督

大都會 (勞働篇)

鈴木傳明主演

蒲田超特作品、菊池寛氏原作、五所平之助監督

新女性鑑

オール・スター・キヤスト

蒲田超特作品、池田義信監督

浮世水路

栗島すみ子主演

蒲田超特作品、野村芳亭監督

雲雀なく里

オール・スター・キヤスト

蒲田超特作品、清水宏監督

東京の魔術

岩田祐吉主演

蒲田超特作品、齋藤寅次郎監督

明け行く空

川田芳子主演、少年少女俳優總出演

蒲田超特作品、豊田四郎監督

彩られる唇

龍田靜枝主演

蒲田超特作品、里見弴氏原作

多情佛心

オール・スター・キヤスト

京都超特作品、大近松ものゝ映畫化

鎗の権三

林長二郎主演

大阪朝日新聞連載

京都超特作品

松平長七郎

林長二郎主演

京都超特作品、小石栄一監督

媚を賣る町

阪本壽之助、泉春子、淺間昇子共演

市川右太衛門主演

小金井小次郎

松竹キネマ株式會社

百年後の世界

科学文化の飛躍、人造人間の創造、百年後の世界の驚異！
見れば映画が描く得る想像力に達する程の事である。

百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界

著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目 著者の新本目

著者の新本目

著者の新本目

百年後の世界

著者の新本目

人造人間 百年後の世界 人造人間

著者の新本目

著者の新本目

百年後の世界



百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界 百年後の世界

METROPOL

百年後の世界！

メトロポリス

百年後の文明都市。

メトロポリス！

——それはわれ／＼の「現在」から遠くはるかなる一世紀の「未来」の——即ち西歴二〇〇〇年紀の、空想に富む科學的な物語である。

そこでは、資本主義が最高の程度にまで發達してゐて、プロレタリアは全然地上から驅逐されて了ひ、地下の暗黒街に住居してゐる。太陽も青空も大氣もすべて資本主義とその附屬物とによつて獨占されてしまつてゐるのだ。

その「地上街」では——

そこは、華麗なるデコレエシヨンに圍繞せられたブルジョアの子供達の遊び場所「エリツク・ガーデン」である。

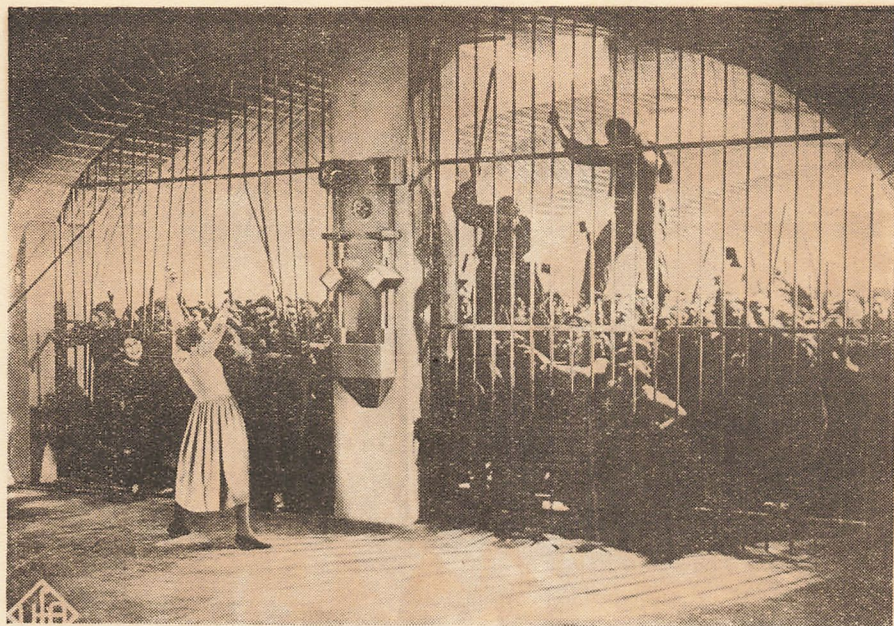
いま丁度、メトロポリスの支配者ジョン・マスタアマン氏の一人息子のエリツクが、美しい女の群と戯れてゐますと、はからずも地下街の職工の子供たちが、女教師のメリイに導かれて通りかゝりました。

「ごらん、子供達。あの人々も亦お前たちの兄弟なんだよ！」

エリツクはその聲に、見なれぬこの婦人をしげ／＼と見つめました。彼は彼女に何かしら心をひかれるものを感じたのです。

エリツクはそれから、地下街の人々の生活に満々たる興味をもつ様になりました。そして彼みづから地下街の生活を生活すべく決心したのでした。

エリツク・マスタアマンは、かくてこの油に汚れた地下の世界へ第一



歩をふみ入れました。その時、彼の眼を射た驚くべき光景は何だつたでせう。獰々として燃えさかる機械に俄然故障が起つて、職工たちの中の幾人か大負傷をしたのです。——しかもこの地下街では、この程度の事故はたいして珍らしい出来ごとでもないのです。エリックは吃驚して、このことを告げるために父の部屋へ走つてゆきました。

ジョン・マスタアマン——彼の驚くべき頭脳はメトロポリス全體を支配してゐる。彼の指の一动一躍にメトロポリスの神経がうごくのである

「お父さん——」

エリックは職工たちのあはれな負傷のことを告げた。しかし父は眉一つ動かさうとはしなかつた。

「こんなことは時々ある事だ。そんなに珍らしいことでもない。——それに第一その人たちのことは、お前とは何のかゝはりもないではないか。」

「いゝえ、彼らだつて我々の同胞です。お父さんの大都市は、彼らの手によつて建てられたものではありませんか」

「勿論彼らの手を澤山使つたさ。エリック。しかし、能率と云ふものを創造する處の腦、即ち頭腦の力に比べては、人の手なんかはものゝ数ではない。能率こそは世界のすべてを創造したものではないか」

「けれど、たとへ世界中を得たとて、人はその魂を失つてしまつたら何の利するところがありません」

エリックは熱心に父に説くのだつた。しかし父は冷やかにそれを聞きなす。

「お前は、昔のある宗教に説かれた言葉を云つてゐるのだらふ」

エリックはます／＼抗辯した。

「お父さん、我々人間は幾世紀の間、黄金と鋼鐵の文明を建設して來ました。けれど、この文明がわれ／＼に何を與へたでせう。文明は人間を神に近づけたでせうか」

「エリック。神は力だよ」

彼ははね返す様に父に言ひました。



「いいえ、お父さん、神は愛です！」

ジョン・マスタアマン氏は、かくの如くにして自分の主義と主張とを貫徹してゆきましたが、尙それでも飽き足らず、一切の人間力を封じて機械力萬能の世界を建設すべく、大發明家ロトワング博士をして「人造人間」の創造に精進せしめつゝありましたが、つひにその成功の日が近づきました。

「今一息で我々の造つた機械人間がほんとうの人間との區別がつかなくなりそうですよ。——その人間は魂がないばかりで全く普通の人間と同じことです」

「魂なんか結句ない方がいゝですよ」

「ところでこの人間の名前ですが——」

「エフ・シユンシイ(能率)と名づけませう」

——その頃、

地下街の一隅ではマリアのやうに美しいメリイが、その赤心で人々を愛撫するので労働者の全部から女神のやうに崇められてゐました。

マスタアマン氏はそれを知つて、自分の意圖を地下街に向つて遂行するには、このメリイの風貌を人造人間に扮飾せしめることが一番いゝ方法だと思ひつきました。そしてロトワング博士にそれを命じたのです。

「女に形どつて作つた人造人間が私の意志を職工たちに説いてゐる間その女をあなたのところへ引とめて置いて下さい」

鋭い白光。

たぎり立つフラスコ。

妖しい液體がドロ／＼と煮え返つてゐるロトワング博士の實驗室では今や機械人間のグロテスクな姿は、大きな硝子管にはめられたメリイの身體との電力の交流で、花恥かしい彼女の風貌に扮飾されてしまひました。寸分も違はぬ麗かな姿です。

しかし、ロトワング博士もマスタアマン氏も、一つの大きな事實を計算に置くことを忘れてゐました。——即ち、人間が僭越にも魂なき人造



人間などを造つた時！——と云ふ事實を。

統制のない人造人間は、その美しい姿にも似ず、地下街の人々に激越な調子で暴論を吐きはじめました。

「一體メトロポリスにそゝがれてゐる油汗は誰が流した油汗であるか！むしろ機械は飢へさせて置け！」

造られた彼女の行動は炎の如く熱烈さを加へてゆきます。

「さあみんな！」

突如！激しい響音と共に地下街には盛んな火花が散亂しました。メトロポリスの心臓！地下街の大機械室が爆發したのです。

猛烈なる勢で落下するエレベエタア。

鐵骨の腹を裂いて奔出する濁水。

逃げ惑ふ老幼。

凄惨なるこの光景の中に、人間メライがロトワング氏の監禁の手を逃れて、まこと女神の姿で現れました。幼きものたちは、彼女とエリックとの手に一まづ救はれましたが、なか／＼地下街の騷擾は静まりませんでした。

間もなく——

騷亂者の人造人間は労働者の手に捕へられて焚殺の刑に處せられることになりました。

と、みる／＼火中に變る鋼鐵の姿！

労働者たちの驚異の中に人造人間の姿は哄笑をつゞけ乍ら熔けてゆくのでした。

「世界をわれ／＼の手へメトロポリスを我々の手へ！」

人類の福祉を建設するものは、人類であらねばなりません。こゝに輝かしい「人間」の労働が開始されました。

メトロポリスはかくていよいよすこやかな成長をしてゆく事です。

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

(カタログ進呈)



大阪市南區長堀橋筋一丁目

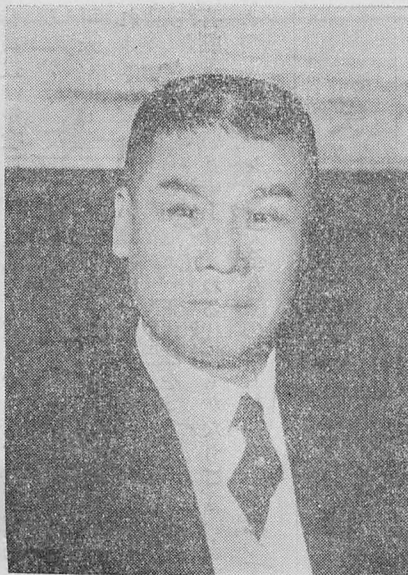
小西六大阪支店

電話 南 (三二九八三) 番番

本店 東京 本町二丁目

たはこん

曾我廻家五郎



曾我廻家五郎

に過つて無慘な最後に終つても悔みません。將來も過去も現在も、たゞ観客本位、それが喜劇でも愚劇、邪劇、駄劇いはいれても観客を飽かさないので五六時間を持ちこたへたらそれで目的が達したわけで御座います。

古い頭腦の私は矢張り、わが國の舊道徳の忠君愛國を骨にして世態人情の張り混ぜ障子、術藝の殿堂にたてられぬのは萬々承知、お臺處の合間に荒んだ社會の暴風をちよつこでも凌んで頂けばそれでよいので御座います。

今度は國民文藝協會から大衆娛樂劇の樹立者といふ事で表彰して下さいました。全く身に餘る光榮、恐縮して居ります。我が曾我廻家は絶體お客様本位を以て旗印として居ります。今後それが爲めには苦心奮闘を續ける覺悟で居ります。例へそれが見當違ひの方向

松竹座と中座

北村兼子

三月三日に松竹座を、同じく四日に中座をみた。この頃は東京の新聞で論説を書いてゐるので劇に關するものは四月ほど前に「芝居とキネマ」にちよつと書いただけで、大阪には縁が切れてゐたが、久しぶりで中座をのぞいて、その夜の汽車で東上するといふあはたどしい観かたであつたから松竹座を一括して批評する。この變つた二つを引つくるめるといふのは無茶であるが無茶もこゝまでくれはお愛嬌ものだ。

松竹座の「母ぞよく知る」は青年男女の愛に反抗した母(ドレッサー)が負ける。中座の大文字屋は三角關係に落ちた息子を父(仁左衛門)が勸當する。松竹座で戀愛學校へ入學したやうな氣分になつて中座へ入れば修身教科書の實演をみる氣分になる。

松竹座ではオリンピア舞踊團のモン・バリを踊るネリトワ、ヤノウエールのデヤズに合はせて空に跳る女性美にうつとりさせるが中座では茶釜賣り(長三郎)と小原女(右團治)の清元につれる振りごと、足が地について落つた氣分になつた。前者は斷髮嬢が拍手す

明治三十七年二月わが會我の家の創立以來、今日までかなり脚本の製造方も演出法も變つて來て居りますが、新しい開拓は申し兼ねますが、變つただけは慥かで十年先きにまた振り返つてじつと足跡をながめたらまた變つてゐるに相違ないでせう。さう變るかは全く未知の問題です。

數年前より喜劇の二字を書かないで、五郎劇と名乗つたのは喜劇の神様への遠慮からです。まづ嚴格な議論を暫くをいて普通一般喜劇と申せば逆手に出ていはゞ觀客に背負投けを喰はせ「ワアツ」に來るやうにすれば伶俐な手法、またあつさり軽く笑はせるなかに、皮肉と諷刺が含まれてゐるのがよいことも聞いてますが、たゞ見ただけの可笑しさで後になんの印象も残らないのが物足りないと思ふのが、私の悪い病かも知れませんが、あくさいいはいはれてもなんさいはれても、眞つ正直に正面から義理人情の美しい處をさらけ出して、正攻法をこつて、ヒタ押しに押して行く私の流義、これが喜劇でございし申上げかねる代物もかなりございます。がなしろ。皆様の御後援をまつて我劇團を一層完全なものにしたいものと思つて居ります。

笑　　こ　　涙

會我廼家十吾

泣く表情は、或民族によつて、表情が違ふ。これに反して、笑う表情は、人類の總ての種類に於て、殆んど同一である……

ミ、ダーウィン氏が、「人間と及び動物の表情」と、題する本で斯う發表されて居り

る。後者は銀杏がへしのいとんが陶醉する松竹の椅子が中座で座蒲團となり、洋風建築が御殿作りとなり、ピアノが三味線となりペラミーが魁車となり、ノートンが延若となり、「Mother Knows Best」が「攝州合邦社」となり、格蘭が仁左衛門となつて、私の頭が道頓堀とブロードウェイとを行きつ戻りつする。

日本の演劇に腹切りのあることはアメリカ映畫に接吻のある如し、腹切りは生命の斷末魔で接吻は貞操の終焉である。けれども接吻は第二第三の接吻がある。切腹だつて一生に一度のものではない。鴈や仁左はあの齡まで何度切腹したかも知れない。

鴈治郎の藝は見物席までのしかゝつてだめをつく。これでもか／＼と涙を請求する。仁左は俺は俺だけの藝をするのだ、泣くらん勝手に泣けといふ調子、本人ではさうでないかも知れないが觀覽席からはさう見える。

仁左の藝は千代之助が相續し、その顔は我童が引きうけるであらう。我童の顔は仁左によく肖てゐる。千代は若いに似合はぬ滋養であるから甘黨全盛の大阪では受けるかどうか中座では幕合ひに運動しながら映畫の低級なことを罵る。松竹座では休憩室で歌舞伎の時代錯誤を笑ふ。どちらかに片寄つてゐるが

ます。此の笑ひの表情が、世界各國の人類が同一にあるにしても、笑ひを侮蔑し、從つて涙を偏重もしくは、涙を偏執して居る民族と、笑ひを愛してゐる、若しくは愛した民族とがあります。

涙を偏重して居る民族は、支那、印度、イスラエル、日耳曼その他、北歐民族である古代希臘の民族や、拉丁の諸民族、アングロサンソン民族は、笑ひを愛して居ます。實に、喜劇は笑ひの王國と云はれました古代希臘が生んだものです。此の喜劇歴史や定義に就きましては、後日、機會がありました時に委曲、申述べたいと思ひます。亞細亞民族中、笠ひを愛する唯一の民族は我日本であります。如何に月本人が笑ひを愛したかは、昔の文學藝術の上に、笑ひの現れた事實と材料が、豊富にありますのを見て明らかです。其の笑ひを閑却したやうな傾向が明治時代に於て、最も強く現れたやうに思ひます。

我國で、笑ひを愛した事は大阪が第一でせう。文化文政頃には、浪花二〇加が盛んに流行したもので、その中興の祖にくらわん亭淀川がありました。

江戸の腹藝といふ成田屋の藝風よりも、松鶴屋嘉七の、かれた面白味のある藝が、如何に喜ばれたかといふ事は、浪花みやけの番附を見ても一目瞭然でせう。

天保時代には、堺の小松家市丸、大阪の大門亭大蝶、初代文部等の、二〇加も落語も、又、歌舞伎でも、面白味の物が一般に喜ばれてゐたのです。

新派劇の鼻祖である須藤定憲氏や川上音次郎氏も共に、大阪で育てられましたもので、須藤氏の滑稽劍舞、川上氏のおつぺけえが其れであります。京の初春亭の門下であつた鶴家團十郎氏も大阪で名聲をあげられ、我曾我廻家師匠も、又大阪で喜劇の基礎を築け。樂天會も又同じ地で成功され、何々もあり萬歳もあると、數うるに違がない程、お可笑味を含有した藝と、喜劇とは大阪に據つて育ぐまれ又、發達したものと

二つとも好きな興行流亂はその中を泳いで兩方をみる。

兩方とも人情に變りはないと見えて三角關係が多い。戀の純れは「栗山大膳」で鷹治郎が東洋的に裁いてゐる。黒田家の殿様(廻車)が素性賤しいお秀の方(我童)を愛して御公儀から興入れのあつた久姫君を離別しやうとするお秀の方を斬つて公儀からの姫君を安泰にする事が忠義で、この筋書きは渡邊默禪氏の放送したのと筋書きはちがふが、そんなことはどうでもいゝ。松竹では名譽を棄て地位を棄て母に背いてまでも愛人バードに走るサリイが抽手される。どちらがいゝのか、兩方をみた観客の頭の中は狂旋する。

天下一品といふ栗山大膳の鷹治郎と、一世一代と打ち出した大文字屋の仁左衛門とを中座といふ容器に入れた。一品の甘さと、一代の澁さと、澁柿でも日に乾したら甘くなるが仁左は甘くならぬ、鷹は澁くならぬ。甘い方が大阪、澁い方が東京、趣味を代表して見物は勝手に喰べわける。

チャズを聴いてゐると、お臂が椅子から浮きあがる。清元を聴いてゐると、お臂がだん／＼蒲團にめり込んでくる。天に飛ばすチャズの輕快と、地に廻りさげる清元の重妙とは戎橋を東と西とに區切る。重妙といふのはち

です。

私が此の道に志した當時も、笑ひの時代でした。其れが間もなく、涙へ涙へ、泣く芝居が、流行して行きました。

その芝居には、洋行戻りの川上一座が、ハムレット、オロセ、バトリ等々を、又新派劇は、新聞小説の悲劇物を上演する事が潮繁なつたのですが、大阪二〇加はまだ古いとか陳腐だとかの聲は聞かませんでした。

鶴屋一座と田螺實樂一座の合同、大門亭と信濃家の合同——と、互ひに腕を揮ひ、看客を吸集しまして、笑ひの人氣は全盛を極めました。日露戦争前より、笑ひよりも涙の芝居に誘はれ出して、二〇加は衰微して行きました。

此の戦争半ばは、我曾我廻家の喜劇が生れましたのです。そして『無筆の號外』といふ狂言で大當りを取つたものです。此れが狼火となり、すたれ行く笑ひの人氣を盛り返して其の人氣は改良二〇加より、劇化され、ホロリと涙を誘う人情味豊かな、そして充分な滑稽に、連日満員の盛況を得たものです。

當時、新派劇は猶、隆盛でしたが、漸く涙の悲劇物が、世人から疎んぜられたやうでした。新しく何々劇、曰く何々……と、目先きの變つた劇が勃興し、應て、劍劇の黄金時代も過ぎ行きてまして慌たしい中に又もや笑ひの時が戻されて來たのです。

闇から先りへ、憧憬れたかのやうに、笑へ笑へ集る人々が多くなつて來ました。生活に必要であり且つ、重大な關係のある笑ひを輕卒にし、涙を喜ぶ時代ではありませんまい。

軌道を脱した汽車を馳しらせるやうな、ナンセンスが歡迎される時代です。笑ひの人生——明るい氣分に生きやうと要求される時です。無論、固苦しい理窟を放れ、清新な、面白い、愉快な、喜劇時代が來るものと確信します。

と變な上熟字だがそんなことは平氣で書いて行く不逞筆者は氣が輕快である。

次の松竹座の春のおどりは和洋折衷だといふから輕快、重妙、横轉逆轉、食満さんの手にかゝつて私たちの魂は振り廻はされることであらう。

太功記、丸本、人形劇

豊島扇三郎

A「ア、始めて人形の太功記を見て結構だつた。誘つて呉れた君に感謝する。太功記處か是迄に未だ人形劇を餘り見て居ないから君の説明と相待つて、大變教へられた。成る程現今の歌舞伎計り見て居ては、歌舞伎の本質が一つ分らないな」

B「しかし、太功記など見ると肩がこるよ」

A「ハ、ハ、ハ。僕が今度此太功記の通しを見て最も考へさせられたのは、淨瑠璃作者の丸本全段に對する凡ゆる苦心をしてゐる點だね。丸本だれ丸本でも中にはホンの後段の伏線を書いたに過ぎない、例へば、忠臣藏の二段目のやうなものもあるけれど、太功記などは始めから終り迄、色々の史談を上手に扱つてゐるから、たとへ大序のつまらぬ處でも、作

喜 美 斷 語

澁 谷 天 外

或人からこんな事を聞いた。良き喜劇の企圖は、醜惡なる情緒を招かない笑ひに依つて、形成するべきである。快ろよい平明な喜劇を得やうとするには、美學の研究が必要だ。ミ。故に題して喜美斷語！

悲劇作者の態度は、人生は恐怖だ。罪惡だ。見解を下してゐる。喜劇作者は、人生を愉快だ。善良だ。ミ看取してゐる。悲劇の觀客は、自己を見せられてゐるから泣くのだ。喜劇の觀客は、他を見せられて居るから、笑うのだ。

犬が西向きや、尾は東。兄貴は俺より、年が上……ミは、當然にして滑稽を含む俚諺。本當の意味の、喜劇は斯うしたものではないだらうか。

煩悶や、懊惱の圓タクに追はれて、疲れ果てた人間の、一時的逃れ場所は、笑ひであらう。笑ひは都會の大通りの安全地帯に似て居る。

ナンセンス。ユーモア。機智、諷刺の凡てを、包含して、そしてハッピーエンドに終つて居るのが、良き喜劇ミ云ひ得るならば、ゲーテのファストミ吃又は、偉大な喜劇であらう。

笑ひは、柔かい匂ひの香水だ。

泣く人の心は暗い。従つて萎縮する。笑う人の胸は明るい。従つて向上する。——雨天ミ晴天だ。

者の空想で描かれてゐるのではないから、實があるね」

B 「そうだ。此種の大時代な丸本物は、作者の想だけで書かれては居ない」

A 「殊に、鷲の森の段を見て、一寸ビツクリしたよ。一體此の太功記はまだ僕は丸本全部讀んだ事がないので、單に全段、光秀の叛逆滅亡史で、それに對し、秀吉の中國から引返す態度のみを書いたのだと思つてたが、當時信長が手を出して居た石山本願寺の方で、此處に乗じて、秀吉等の仕事の邪魔になる様な事が起つては面倒だからと、例へ一時のがれの策略にせよ、中川清秀を使つて、押へて置く秀吉の名將振りや、石山方の有様を一寸描いてあつて、あの段が相等長丁場で、六ヶしさうな語り場なのに意外だった」

B 「鷲の森は、僕も見るのは今度始めてだ孫市の跋踊りを子に踊らしたりして、少しやゝこしいがね」

A 「そして、妙心寺が十日目の前段位かと思つたら、そうではないのだね」

B 「妙心寺は六日目で、鷲の森が七日目で八日が十次郎が尼ヶ崎へ行く途中の話、此段こそ、つまらぬ處で、何故あんな事を作込んだか分らぬ、九日目が西國街道から廣徳寺で先年中座で演じた通り、で、此度は此の八段

五郎の表彰當日を思ひ出して

五部劇文藝部 朝倉 雷 藏

連日満員を續けてゐた東都新橋演舞場に出演中忘れもせぬ正月の十日晝飯を喰つてゐるミJOAKが其の日のニュースを報じて呉れた。何の事もなしに聞いて居るミ、曾我廼家五郎氏表彰さるゝ突然、自分の耳を突いて聞へて來た。ハツミ異様なシヨックを受けて箸を置いた。同時に身が堅くなつた——。寢耳に水であるもの、

『大衆娛樂劇の樹立に對する功勞者として……』

夢にも聞かぬ事に嬉しさが込みあけて其儘、空を飛んで師の處へ駆けつけた。

肝要の師の五郎云ふ人も寢耳に水だゝ呆れて居た。其の日の夕刊は筆を揃へて夫れを報じた。定刻に樂屋入りをするミ澤山な座員達も包み切れぬ嬉しさにキョトクして居つたのが今も眼に残つてゐる。

無理もない。黄金を寄附して銀盃に添へて、感謝狀を貰ふのミ譯が違ふ。聞けば國民文藝會はある種の表彰の様に金や運動では功を奏さぬ。理事の方々は文藝界にも社會的にも知名の人達で批評には可成り辛なお歴々のお揃ひである。其の證據には昭和二年三年の二ケ年に涉つて日本中の演藝界に一人も表彰する人物がないミ云つて素通りをして知らぬ御顔、之でも辛い人々だミ云ふ事が裏書きされる。それが——!!!我が曾我廼家五郎に白羽の矢が立つたは……。

終ひに表彰式のある一月廿七日が來た。御伴を命ぜられた私は、式場の東京會館へ着いた。飾り立てられた式場の大廣間は

目と九段目を省いて、鷺の森から尼ヶ崎へ飛んでゐる」

A 「成る程、そして尼ヶ崎だけ見ると光秀が惡人に見えるが、妙心寺などを通じて見ると、沈着な、名前が語つてゐる如く、文武智勇に秀いでた人物で、少し近代的な人物に描かれてゐるね」

B 「全篇中で一番人間らしく作つてある」
A 「それから僕が今度感じたのは、鷺の森や妙心寺に比べて、十段目が、洗練から間違つた演出を醸してゐる點だ」

B 「偉い。君はよく氣がついた、あれが歌舞伎や丸本劇のすたれる因だ。他の段は餘り歌舞伎でも上演されず、自然單調な人形劇の本來の演出をたどつてゐるのに、十段目のぞまは何うだ。道具と人形振りの寫眞臭さ、鼻もちならぬ。とても歌舞伎の眞似をしてるね」

A 「そして、あの壁の色が明るい色の上に明るすぎる電燈の光りで、サツパリ浮薄な舞臺面だ」

B 「僕もこんな拙い十段目は始めてだ。正面のれん口があるのに、其の右に障子があるから、光秀は其處を突いて、あの場合の科さを正面向に見せるのかと思つてたら、毎時の通り上手の方を、併かも湯殿の方を突く。そ

早や定刻前に新聞紙上でよく寫眞で見る所謂、エライ人達のお顔が無数に見へる、私は思はずカアミなつた。曾我廻家のマークを胸に着けてゐるお蔭で知るも知らぬも私共迄の傍へ見へて、お芽出度う、お芽出度うの連發に、不思議な感慙に打れてハラ／＼涙が出る。

或る方は私の手を握つて下さつて、

『東京で表彰されたい人も澤山に有らうに大阪から來た君の師匠が此の光榮に浴するの、何云ふ幸福な事だらう。五郎氏一人の名譽ぢやない、大阪劇壇の名譽だ』

ミグット力を入れて手を握られる。又不覺にもハラ／＼涙が出る。遠く離れた向ふを見るミ我が五郎師は、大谷竹次郎氏、小林一三氏、南大曹氏、岡鬼太郎氏、澤村宗十郎氏等に取巻かれて居る、其の前に田中智學先生が、

『自分が君のために今揮毫して態々持つて來たのだ』

ミよく聞き取れぬが、そんな意味らしい御言葉の下にヌノ絹に一流の御名筆、墨痕見事に『歡樂眞得』ミ揮毫されたのをサツミ擴けて見せて居らるゝ、我五郎師は閉じた唇に感謝の念が漂ふて無言の儘じつミ首をさけて居る。

式の時が來た。

文字通りキラ星の如く六百餘の會の紳士淑女は會場の椅子に着いた。一しきり會場は神聖其のものの様に靜かになつた。

溝口伯は式壇の前に起立されて開會を宣された。續いて小村欣一侯は立ち上られ、今日の表彰に就て一場の御話、曾我廻家五郎氏、山本久三郎氏、汐見洋氏等の表彰せられし理由を述べ終られる、五郎氏の爲に一言すミ明快な口調で結城禮一郎先生がスート壇上にた、れた。お供を命ぜられた私始め、蝶六、大磯の幹部をはじめ一座の者はサツミ顔色が變つて片唾をのんだ。結城先生の一言は仲々一言では無かつた。今

んなら、段切れに引道具だから其の障子口から久吉が出るかと思つたら、そうでもない」

A「久吉を追つて出る光秀が、本手の揚幕から久吉と同じ様に出ねばならぬのに、簾の中から出て、すぐ引込むのは不可ないと思ふそして、物見の松になつて、後に海が晴やかに見え方角を一寸誰が考へても、和田岬はあの背景の右手だと分つてゐるのに、人形は平氣で正面向きで芝居してゐる。トンチンカンだ」

B「後は黒幕にすべきだ」

A「十次郎の着付は無茶苦茶だ。光秀の衣裳も遠目では、鈍い色だ。面白いと思ふのは十次郎が頻りに初菊と抱合ふ事だ。あゝいふ事は歌舞伎では出来ない事だ。光秀が、ハラハラ……の處で、一寸十次郎を初菊共に抱寄せて情を見せ、そして氣を取り直して突やり軍扇で顔を掩ふのは良かった」

B「此前、玉松だつたかの時見たのは、四方田も駄目らしいと思つて、操初菊のなげきの間に、戦場が氣づかはれる氣持で、下手の方へ體が自然行つて『親の慈悲心子故の闇』の文句で、現在の場面に心引かれて、立戻り、泣上げたのが僕は良かったと思ふ。あの場合十次郎の話によつて、戦況が氣づかはれるのは當然だ。その氣分を餘り、誰も演らないのは僕は不思議だ」

はうる覺えながら大要は左の如きものであつた事だけは慥である。

『今日表彰されし曾我廼家五郎氏』は只今が初對面である、舞臺の五郎氏は昔から知つて居るが素顔の五郎君を見るのは今日が始めてである。併し今日の式場と同氏を文藝會より表彰するに當つて諸君に話す上に於て忌憚なく話せるのは寧ろ一面識もない方が快とする』

一門の者の吾々はギョツとした、結城先生は極めて明快な口調を續けられて、

『明治十八年の春と思ふ、始めて曾我廼家三名乗つて新富座へ上つて開演した。自分は夫を見物に行つた。入りは極めて妙なかつたが、自分は恐ろしい人間が現れたものだ。こいつは一トつさらつて仕舞つて自分の仕事をさして見様と思つた』餘りに變つたお話に再びギョトンとした。結城先生は不審らしい聴衆の顔をジツミ一トわたり見まはされ、言葉を續いて、

『其の頃自分は國民新聞の經營を頼れてやつて居た。其の新聞社へ五郎さんをさらつて行つて椅子を與へたら必ずや面白い仕事を仕てくれると思つたが餘り突飛だミ氣が付いてやらなかつた、夫れは良い事であつた。そんな事をしたら今日の曾我廼家五郎は生れなかつたかも知れない。一新聞記者として松崎天民氏の様になつたかも知れない』

隅の方の椅子に居られた松崎天民先生はさんだ槍玉に舉げられて苦笑の儘首を心持ち下けられた、實に氣の毒な感じがムラ／＼と湧き上つた。場内に淡る笑聲が聞へた結城先生は益々口調に熱を帯びて來るに隨つて六百の聴衆は引きつけられる。

『それから曾我廼家なるものを注意して、上京開演毎に見逃した事はない。時は遷る。思想は變る。劇團も變つて新しい劇團がドン／＼現はれてくる。夫れに遅れじ負けじ開演毎に大入を續けて幾十年本人の身になれば慥しに惡戰苦闘努力の跡は血の慘な話もあるに相違なからう並大抵の努力でない事は他所目に

A 「それもそらだな。段切れは、此度の様に光秀が上手で、久吉が眞中に本文通り陣羽織で、綺らびやかに居る方が、立派で「太功記」らしいね」

(昭和四年三月三日辨天座の人形劇を見て)

彌生の中座

大井重一郎

栗山大膳

素より講釋種の劇化で取立てゝいふ脚本でないが明るい華かな大阪流の芝居とみれば理窟なしになかにも見事に手盛られたものだと思ふ。其處には人生の詠歎がない。深刻がらせず又妙な寫實を思ひつかせる隙がない。此意味に於て鴈次郎の藝風の一面の大まかにして華麗なる點を代表するものと私など以前から感心して觀て來たのである。其大膳は兎角く大芝居になる恐れのある此芝居をデツクリと締め水牛兜に手も觸れぬ巧まさ、紅葉間の貫祿、主水の古流を見る處の味、盡く同感である。殊に諺言と裁決の場の長白を合方も使はず鮮かに言つてのける等鴈としては異例である。只裁決で「願上奉る」と態々舞臺中央まで乗出すは少々大袈裟だ。紅葉間の主水は前年の福助をとる。其と今度は廊下をつけた

も見て居る。人づてに聞けば一堺漁人の名にかくれて幾百種の脚本を一人で書
ゐて上演する其苦心……」

一門下生の私としては書き憎ひ程有難い賞揚の連結。最後に我が五郎師の方に向は
れた結城先生は一層聲に力を入れられて、

『五郎君よ。或る一部の人はモウ會我廼家は行詰つた。モウ古い等云ふ者があ
るが決して、左様な言葉に耳をかすな。古いとは何ぞや。新しいとは何ぞや。何
の根柢があつて古いと新しいを論ずるや左様な言葉はほんの大たらひに盛つた
水の上の少かな漣に過ぎぬ。』

君は今迄の方針を改めず猛進せよ。努力せよと御進めする。今日我が國民文藝會
理事諸君の決議に依つて「大衆娛樂劇の樹立に對する功勞者として」表彰す同
時に此の言葉を君に呈す」

もうたまらない一座の人々は首を垂れて泣いてゐる。聴衆の中に見へる會我廼家最
眞の方々も有難くもハンカチを眼に當て、居る方も見受けらるゝ。

我が五郎師はスツクミ壇上に立つて答詞を述べらるゝを後に私はモウたまらなくな
つてソツト扉をあけて外で一人嬉し泣きに泣いた。式場では各社の寫眞班が我が五郎
師の答詞の立姿をパン／＼と撮影してゐるマゲネシウムの音のみ其の静けさを破つ
て居る。

其の夜樂屋で五郎師にこれから先はさうなさるのですき聞いた。師は一流の表情に
笑を浮べて、

『ナーに、さうするものか努力するだけサ。併し今日の表彰で大變重い責任を感じ
たよ』
只、夫れツキリ何事も云つてくれない。

ので紅葉の廊下の刃傷になつた。其爲大衛立
が活用されず空しく上手にあつたのは聊々惜
しい氣がする。

急行列車の「合邦」

中座の合邦は七十分ですむ。文樂で聞くと
八十分かゝる。之でも判るように入形の動き
より人間の役者の其が手取早く進行するとい
ふ驚き入つたる芝居になつた。萬人の觀る處
仁左衛門の罪をいふ。無論私にも異論はない
あれでは福助が可哀想といふより觀衆が憤懣
に堪えぬであらう。で一切合邦は評なしで玉
手御前に就ていふ。花道中程で一旦揚幕の方
にふり返へる。そして向き直つて下を見、絃
のチリで右足先トンと踏む。此時舞臺で母が
打つ鉦始めて鳴る。之は巧い。が其からは不
思議にいゝ處がない。「けんもほろゝ」で母を
突飛ばすは亂暴。「オイヤイ」の件に役者の腕
を見るのだが一方の合邦が全然芝居を授げて
ゐるのだから致方ない。繼母繼子をケイボケ
イシといふのは無智だし幕切花桶を用ふも拙
い津古靱の重苦しくも胸を壓する沈痛なる印
象を此舞臺から得られなかつた事は偶然文樂
がまだ／＼不勉強な役者よりは立派であるを
證明したのではあるまいか。

名工柿右衛門

伊萬里の海邊に近い有田屋の店先。
今日は鎮守の御祭禮さいふに、朝から
手代の榮吉を始め寅助に傳六は明神丸
へ積込む荷造りに忙殺されてゐる。そ
の忙しい中にも店の者達は、奥座敷に
みへて居る來客、浪人者の夫婦さ妙齡
のお嬢様の事により／＼の花を咲かせ
てゐる。

「さうやらその美しいお嬢様を大目
那様の差し金で若旦那のこれに」
手代の榮吉が仕事の手を置いて小指を
出して示す寅吉は、ゲセ、顔で

「若旦那には柿右衛門さんの娘おつ



ろさんさいふ立派な許嫁があるでは
ないか」

榮吉はすっかり仕事の手を止めて

「だから働くのが嫌やになつたさい
ふのじや。有田屋のためには大恩あ
る柿右衛門殿の約束を鼻紙でも捨て
るやうに反古にして、あのお嬢様を
お嫁に入れたら、おつうさん親子の
心の中はなんだと思はしやる」

到常話に味が入つて来て、榮吉は勿論
寅助も傳六も仕事の手を休めて、思ひ
思ひの熱を吐き出して來た。其處へ奥
から旅拵らへの平三郎に番當與九郎が
附添ひ出て來る。店の者は若旦那にい
やな番頭が見へたので、また仕事の方

梅田心中

大阪の曾根崎に『萬貨物商』といふ世にも珍
らしい看板が出たのはツイこの間の事である
茲の主人彌市郎は當年二十五才の色は極く白
い優男子で、一時は蜷川の萬屋抱へお高と浮
き名を立てた事もあつた。それも道理お高は
廊にこそ生活して居れ、順な點からいへば町
家の娘にも優り、その上當年十八才水も漏ら
さぬ絶世の美人ときてゐるからだ。

そんな事から彌市郎がうつゝを抜かして、
後先きなしの揚詰めに、果ては節季の鬼に
貢めたてられ、生きるの死ぬのと願いだ事さ
へあつた。それを姉お千代の情けで揚屋への
借三十兩もどうやら拂ふ事が出來た。

それからといふものは廊通ひもブツスリと
あきらめ、一意家業に専心する事にした、と
はいふもののお高が事を一日として忘れた事は
ない。然し半年とは續かなかつた。

神明様のお祭り。

その神明様が二人のもつた縁をもどさう
とは……………

姉のお千代がくれた三十兩の大金は、女の
大切な衣裳腰の物を賣拂ふたもので、それが

に精を出し始めた。出會ひがしらに明神丸へ使ひに行つた松太郎が歸つて来る。松太郎は平三郎の旅姿をながめ、

「若旦那、もう御出で御座りますか
チト明神丸の出るには間が御座りませぬか」

若旦那の平三郎がなにか云はふにするに番頭の與九郎は、それを遮ざる様に「コリヤ、松太郎、問ひもせぬ事をベラノ、ミ腮叩くな、親旦那のお言葉で旅立ちなさる若旦那、チャント番頭がお供して居るのぢぢ。船の出るのが早い遅いのミ貴様の知つた事ではない、アノ鼻たらしのお茶ツびいめ」

「モシ番頭さん、そんなに仰しやる
がお前さんでも子供の時は鼻たらしで」

「知れた事を云へ、人間は皆子供から大人になるのぢや」

「そんなら、私を鼻たれノ、ミいふて貰ひますまい、鼻たれも次第送り
ミいふ事が御座います」

大人氣もなく番頭の與九郎は小供の松

太郎ミイサコサ關合ふて居る時、平三郎は人待顔に四邊を見廻して居る。

其處へ柿右衛門の娘おつうが急ぎ足で歸つて来る。

「チ、おつうさん、わしや最前から
ざれ程待つたか知れやせぬぞへ」

「平三郎さま、その見馴れぬ旅姿一體さこへお越しなされます」

「急に父の言附けで、暫く長崎の店へ行くことになつた」

「アノ長崎のお先へ、それは本當で御座りまするか」

「ぢやによつて是非一ト目逢ふて行きたいミ最前から與九郎にも頼んで下女に迎ひに遣つたら、疾くに使先から歸つたミの事」

「エ、何んぢやら辻褄の合はぬ話し
私は旦那様のお使で此手紙を持つて参りましたが、何處を探してもさつぱり分らず」

「ドレ其の手紙を一寸見せて下され
いづや聞かぬ此の名宛、コレ番頭、
こなたは此方知つて居やろうな」

與九郎はドギマギしながら

お千代の夫の知る處となり「不義者の女房には用はない」と離別沙汰にならうとは神ならぬ彌市郎どうして知らう。

それでも姉のお千代は自分が離別された事から弟を恨むでもなく、一層弟を愛し、母が子を育む如く彌市郎の事をかばひ、世間がお高との事をなんのかのと批評する暇間にも、二人が思ひを遂げさしてやるうものと日夜それのみに心をくどく。

彌市郎姉弟は元生國は幡州飾間の津で、田地田畑も相應にあり農家としては立派な暮らしを立てゝ居た二人の親與次右衛門夫婦は蝶よ花よと美しく育つて行くのを見ると百姓にする氣にもなれず、決心し天下の町人にしてやるうと大阪に來た。それから間もなく母は後に迎へて後妻に二人の子まで出き、都合四人姉弟となつた譯である。それでも與次右衛門は「惣領ながら女とて、外へつかはす不慙さに、母が着類を残しなく、朝夕使ふ揃箱まで、つけてやつたは何故ぞ、老の白髮の後までも、形見に見よや着よやとの、親の心」といつて嫁入りの時にもらつた衣類を賣捨てても弟の難儀を救ふのは、末の二人の兄弟よりも同じ腹に育つた情愛からである。

「イエ、一向に存じませぬ」

「知らぬ者が何うして下女を迎ひに遣つたのじゃ」

「ヘエ」

モジ、返答に窮した與九郎は、間の悪るさうにして居たが、漸くの思ひで下女の失策になすり附け、ホウホウの態で奥へ逃げ去る。

平三郎とおつうの二人

怪體な番頭の素振りに始の中は何やら心に雲のかゝる思ひもしたが、それはホンの暫く、相思ふ二人が今別れんとしての萬感こもく相迫る思ひ出、過去を思ひ出し、未來を夢みつ、漸くは談合を盡さない。

「おつう、好い土産を買ふて戻りませうぞ」

「したが是れから追々寒うもなれば食物萬端氣を附けて必ずわづらふて下さるな」

「そなたも同じ事、随分共に達者で暮しや」

哀別の言葉も盡きやうとした時、松太郎が飛び出して來て

「若旦那、サッキ柿右衛門様がみへられて、赤霽の工風に無くてはならぬ金の工面、都合が出来たか聞いてくれまいふて御座んした」

「左様うか、おつう、幸ひに茲に小使ひの持合せが二十兩程ある、これをすぐに上げたがよい」

流石におつうもその金を受取りかねてゐたが、平三郎がたつてすゝめるのでそれを父が赤霽の工風の金として平三郎から受取つた。其處へ、有田屋の主人五兵衛、浪人者夫婦に問題のお嬢様お千代が出て來る。五衛門は平三郎に向ひ、

「平三郎、おしも追々取る年波、出帆前は非そなたの嫁を取りめて置きたいと思ふての」

この話を端で聞いてゐるおつうの氣はさの様に痛ましいものであつたらう。

◇

伊萬里きつての身代持ち有田屋を世人は評して、皆柿右衛門が工風の丹精に依るもの云つて居る。然し當の御主人有田屋五兵衛が商賣觀は、柿右衛

こんな事が原因して、世間が端の噂は、彌市郎とお千代とは姉弟でありながら、夫婦を契る犬畜生とまで云はれる様になつた。

蜷川の茶屋 明石屋の店先

明石屋の内儀や女中がよつて飯焚きの茂助を武士に仕立る可く顔の化粧をしてやつたり衣裳を附けて居る、そこへ節間津屋の姉お千代が出て來る。

「おゝ茂助さん、よう出來ました。それでようござんす」

女中等はいふかりげな顔付をする、お千代は猶も言葉續けて

「妾は彌市郎の姉でございますが、彌市とお高との仲は改めて云はずとも知つての通り、いとしき可愛さが積り積つて外の客は見向もせず、勤めが粗末になる故に異見の爲に親方が堰くとやら裂くとやら、目代に目城をこしらへて他の客衆につとめて居ても顔あらためねば出さぬと云ふ、抱主の身としてはそれも無理からぬ事乍ら一と筋に上りつめた二人の身にはどうかたへる者ではない、淨瑠璃にある心中も、こうしたところからござんせう」と茂助をお高の假の客にして彌市郎に遣はす

門は賃金を拂ふて抱へた金の職人、工風するも丹精するも皆職人の勤である。また出来上つた品物を賣拂ふて儲けるは商人の道、従つて何十萬儲けやうこそそれは自分の働に歸するもので、それを一々恩に著る事はない。

こうした考へ方に進む五兵衛は、今日有田屋が何十萬の富を築上げたに拘らず、身の賤しい事ゝ家に系圖のない事を無上の苦痛に感じて居た。偶々、勝手向き不如意の浪人者中里兵太夫を知つた五兵衛は、金の偉力をかかりて俸の箔を飾るに武士の娘を妻とし、また一つには家名を飾る系圖を得るために、自分には大恩ある柿右衛門との約束を反古の如く捨て去り、平三郎の反對をも顧みず、お千代を俸の妻とする事に約して仕舞つた。

こゝは柿右衛門が住居。

栗作は落間に腰をかけクロを廻して居る。お種は落間に立つて繪筆を運ばせて居る。庭のアチコチには素焼の陶器が無造作に積上げられてある。その間々に繪具皿や繪筆の居かれてあるの

が事更に人眼を引く。

そこへ有田屋五兵衛が訪ねて来る。

「間もなく番頭の與九郎もやつて来た五兵衛は與九郎と暫く話をして居たが」

「お種さん、また来ますぞへ」

「ミ謂つて出て行つた。番頭の話によるミ今日利右衛門の家で、五兵衛が有田中の窯主を買占める話が出来上つて約束書が交はされるミの事である奥の藁ぶきの仕事場から柿右衛門が出て来る」

「柿右衛門さん、赤繪の方はどんな具合ですか」

與九郎のぶし附けな問に利右衛門は

「さア、何時出来るやら、その内に出来るでせう」

人事の様な返事をする。

「そこで柿右衛門さん、もし赤繪が出来たら私に話をして下さらぬか」

「さういふ金儲けをさせたけすぞ」

「いや、折角の親切ぢやが金儲けより浮世の義理が大切ぢやて」

柿右衛門はそう云つて山の方へ窯を見に行つた。與九郎も今は話の會手もないのでスゴ／＼歸つて仕舞ふ。その

柿お千代の心やりである事を話す。そこへ、

「御亭主、萬屋のお高様送りしました」

と駕屋の聲にお高はいつて来る。駕屋は今宵の客を見定めて引上げる。その跡から和泉屋の多助、同じ惡仲間間の八右衛門に佐兵衛が酔つぱらつて明石屋に来る。そして彌市郎の惡口を言ひまくる。多助は一層聲をたかめ

「さア、その柿お千代よ、きつい姉弟思ひぢやと神妙に思ふてゐたら、世間の取沙汰は格別で、犬鵜の所作としてあらう事があるまい事か、姉弟味をやるといふ、何とこれでも新しい話と云はれるか」

すると他の八右衛門が

「道理で、歴々へ嫁入りしてゐながら、作病を起し男を置き去りにして戻つたのぢや聞けば、其の彌市郎のために自分の衣類道具まで賣つたげな」

お高は聞くに聞き兼ねて其處へ飛び出し三人の惡口をなじる。と多助

「お前が來てゐる限りは彌市郎も來てゐるであらう」

と障子を開け見れば、吃驚り、ホウ／＼の體で三人は明石屋を去つて仕舞ふ。其處へ彌市郎が世間をはゝかる態で忍んで来る。この話

跡へ、おつうが歸つて來た。

今日のおつうは何時のおつうかは違つて大變元氣のない顔をして居た。それでも自分が持ち歸つた振袖を妹のお種にやつて、お種を嬉ばして居る。山から歸つて來た柿右衛門はおつうの顔を見るなり、

「オ、おつうか宜う來たな、悦んでくれ、赤晝がさうやら出來上りさうぢや」

年老ひた柿右衛門の樂しみは、自分が工風に工風を重ねる赤晝が出來上るこゝミ、いま一つは年々共に美しく延びて行くおつうの姿、頓て平三郎と妹背を結ぶ暗の姿を見る事である。

「赤晝が出來上つたら金も出來る。

そしたらお前の嫁入り支度に、長持簞笥は七棹八棹、縫もやうの振袖や綾縮緬の打かけ小袖さうちやそなたは祝言の白小袖が一番能く似合ふ」

この柿右衛門の喜びに引替へて、おつうは眼に涙さへためて居る。

「お父つさん、私しやもう歸らねばなりませぬ」

「左様うか、わしも緩り話して居たいが今日は是から仕事をせねばならぬ故、五六日中に又出直してこい」
「逆も五六日中には出てこられませぬ」

「そんなら來月十日は母の七回忌、朝から待つて居るぞや」

柿右衛門はさう言殘して仕事場にはいつて行つた。跡にのこつたおつうは心に深い決心をしながら手紙を書殘し「父さん赦して下さい。お前に恥をか、せぬやう他國へ往つて死ます。今日からおつうは此の世にない者と思ふて居て下さい。御恩を仇にして濟みませぬ、さうぞ許して下さい」

父の仕事場に向ひ拜む様にして幾度もくゞ伏し拜み、涙をふぎ／＼出て行つた。



憂鬱な日が重なつて行く。それでも柿右衛門は赤繪の工風を止めやうとはしない。おつうが家出して最早百日は夢の様に過ぎ去つた。

の全部を聞いた彌市郎は姉のお千代に濟まぬ死んでお詫びをすると言へば、お高の方も妾故にこの様な難題が起つたのでござんす、妾が死んでお詫びを致します。

「お高」

「彌市郎様」

と二人は思はず總り合ふ。

「姉御様はお前が可愛いばかりに、二人を添はさうとして下さんですが、今もいふ通り現在の姉様を見殺しにして何ののめ／＼と生きてゐられませう」

「おゝよう云ふた。とは云へ色の習ひといひながら人の數にも入らぬこの私をようこの様にまで思ふてたもつたのう」

「いゝえ／＼お前こそ、私故に望みある身を捨てさせます、どうぞ勘忍して下さいませ」

「いゝや私こそ」

「私こそ」

と二人はしばし無言で唯涙に暮れるのみ、と彌市郎は決心し

「さ、用意は出來た、倅ひの嫁入りば、ないつそこゝを抜けて出て」

「ほんにさうして半時でも女夫らしふ暮らししたい」

有田皿山丸窯の場——夜——

人々が柿右衛門を夢右衛門に罵倒して自分を顧みてくれない時でも、彼は黙々として研究した甲斐あつて、今一ト窯さいふ處までこぎ附ける事が出来た世の中さいふものは實に皮肉なものである。その一ト窯で柿右衛門の赤繪は立派に成功するさいふのに、手元には一束の薪すらもなくなつて仕舞つた。お種や栗作もその薪を手に入れる可く町々を奔走してみたが結局徒勞に歸した。いまは全く絶望、天に向つて神々を罵りたい思ひである。其處へ番頭の與九郎が来て、出き來上つた赤繪を賣らしてくれるならば金を貸してやらうと憎々しく謂ふ。勿論柿右衛門はそれに應ずる筈もない。火はすつかり消へて仕舞つた。彼は天を仰ぎ

「僅かな薪のない爲めに我望みも叶はぬか、可愛い娘は海へ身を投げ、千辛萬苦の窯の火は落ちた。わしを氣遣ひ呼はりする不義理者の五兵衛に、赤繪が出来上つたうへで仇をこつてやらうと思つたがそれもだめあゝ、神も佛も天道様も御座らつしや

らぬか」

「柿右衛門は悲痛な聲を張上げて絶叫した。與九郎に入替つて五兵衛が來た

「柿右衛門、そなたの返事はさうぢや、夫次第で薪はいまでも運ばす」

柿右衛門は黙して返事をしない。そこへ息せき切つて走つて來たは有田屋の手代傳六である。

「旦那様、大變でございます。伊萬里が大火事」

見れば伊萬里の空は眞赤な火の色に染つて居る。

「何處が火事ぢや」

「中里様の家も焼けました。系圖もなくなりました」

「ナニ、系圖」

「それに若旦那の平三郎様は燃へさかる火の中へ飛込んで死なれましたこの悲痛な報告に反して、こちら栗作はそんな事にも耳もくれず、

「親方、コレ見さつしやれ」

「オ、赤繪が出来た」

柿右衛門一家の思ひは千萬無量、日本の實、國の譽、末代までの赤繪は斯く出て出来上つた。

「尤もぢや。人に悟られたら悪い、残る言葉は道すがら、さ、おぢや」

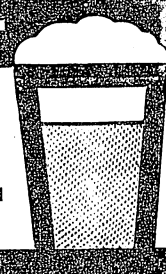
「せかるゝ故か心の鬼か、常は普せぬ、潜り戸も千里も響く心地して、そつと引いては跡へ退き、一寸引いては立かくれ

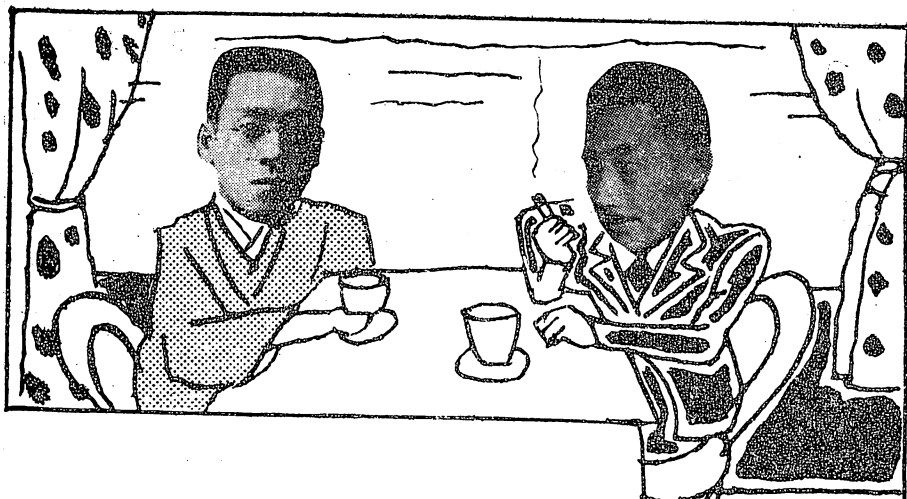
へ噂さをあとに

ル・ペンリキ

清涼飲料

ンモレンリキ





小山内薫 澤田正二郎 三途河對話

松自昇莊主人

……幽明境を異にした空なる物語よとさげし給ふ勿れ。彼方もいまはいみじくも文明開化されて、かつて人の恐れたる三途の河の畔も、いまは赤い灯青い灯の道頓堀にもまさりて、オーゲストラを備ふるキャフエ軒を並ぶ。夜となればジャツズの音も賑はしく、川波もために躍り、蓮花も忽ちに開く。

時は昭和四年三月十日の夜。河畔なるキャフエ・ハスノハナの樓上で在りし日の劇文壇の大家、新劇運動の先驅者小山内薫は思ひがけなくも新來の珍客新國劇の盟主、劍劇の祖である澤田正二郎と出逢つた。女給達はこゝぞとばかりにピアノの鍵をたゞき細くもゆかしき聲を合して、

シロイハナ

アオイハナ

ウスムラサキノハスノハナ

サンヅカハラノ

ハルノヨヨ

と唄ひ出した。月も朧ろに春興いよくたけなはなりだ、今は追はるゝ仕事もなく裕々自適、我身一つの心軽さに二人は夜の更るまで何を語つたか。何を嘲笑したか。何を追想したか。……それほど大した讀物でもない。

— 不幸な試練 —

『お、小山内先生ぢやありませんか』
『おや、澤田正二郎君だね。これは意外だ。まさか君がこんなに早く来やうこは、老少不定は言へ全く人世は不可解だね』

『は、は、は、でも、僕は此方へ来るなり先生に逢へやうこは夢にも思ひませんでしたよ。でも嬉しいですね』

『夫婦は二世だと言つたが、君との對面はつまり夫婦並だね。然し惡縁だよさうして來たのだ』

『中耳炎ですよ。僕は毎年一度、一月か二月頃に必ず扁桃腺炎が何かに冒かされて三十九度、四十度の高熱に悩まされるんですがね。いつもそれを押し通して來たんです。年に一度ぐらゐはかうした病苦の試練と戦ふことは寧ろ僕にまつては有難い俵せださへ信じてゐたのですよ』

『その信念が君を殺すことになつたんだ』

ね』

『まあ、それも言へます。ところが今年の二月興行中に襲はれた中耳炎は惡性で見て、一口の臺詞の發聲にも身を切るやうな堪えがたい苦痛に悩まされました。はてな！實は僕もこの時不安な豫感はあつたんですが、こゝだ！こゝも思つて俳優は舞臺に倒れて後已むといふ悲壯な職業意識を強めたんです。だが實際は僕が休んでは觀客が來てくれませんか、するゝ座員の生活上由々數問題です』

『いや、その心持はよく解るよ。僕が早く此方へ來たのもそれが原因だ。自分一人だつたら粥をすゝつたつて平氣だが、家族とか周囲の生活にまで自分が責任づけられることは堪らないね』
『全くですよ。だが昨日までの私はその責任が愉快だつたのですよ。何しろ新國劇の一ヶ月間の生活費がさつと三萬圓掛つてゐましたからね。これで座員の家族達を合して六百人からの人が喰

つてゐるのだと思ふに愉快に働きました。しかし、その愉快さが此方へ來てみるに寂しさを増しますよ』

— 共通した受難者 —

『うむ、同感だ。時に君と彼方で最後に逢つたのは、確か東京會館で大谷白井兩君の藍綬褒章拜受の祝賀會の席上だつたね』

『え、テンプルの差向ひに座つた時です』

『あの時は愉快だつたよ。あんなに話がはづんだことは珍しい。君んこの雑誌の『新國劇』に出た『新國劇戲會』の記事ね、あれをよくあんなに思ひ切つてやつたさ、褒めるより寧ろ有難さうに禮を言つたのを覚えてゐるかい』

『え、昨日のやうに思つてゐます』

『それに先生、僕は口に出しては言ひませんでしたがね、半年ほき前でした。が依藤君に築地小劇場の經濟を調査してくれと頼んだんです。それは新國劇が

昭和三年の上半期は非常に順調に運びましてね、少し餘裕が出来さうになつたもんですから僭越ながら何さかしたく思ひまして。然し、秋の打撃では全く他人をさうする處の騒ぎぢやなくなりましたよ」

『いや、有難う。そんなに思つてくれたのは君ばかりだよ。だが僕さ君さの場面も決して路傍の人の如く平氣でゐられない時が多かつたね。そうか言つて劇作家若くば演出者さ俳優さ言つた時ではない。今から思ふに共通した受難者だつたのだ。澤田君、君が始めて脚本を書いたから見てくれと言つて僕ん處へ持つて來たのはあれは何時頃だつたね』

『先生が洋行からお歸りになつた當時です』

『大正二年だ』
『そうですか。僕は一高の入學試験に落第して、形式學問の破壊實行の手段として明治大學や中央大學や正則英課學

校なきを轉々しながら勉強しやうとは思はないで開盛座をよく見に行つてゐるうちに、儀にだつて書けるぞと全力を傾倒したのが、あれです』

『世の中さか題してゐたね。四幕か五幕物だつたね』

『五幕七場です。あれを伊井蓉峯に見て貰はう。鶯谷の住居を尋ねたんです。が、相手は當時流行の新派の重鎮です。此方は名もない一書生です。玄關先で一番頭のため態よく拒絶されました』

— 絢爛たる若き日よ —

『それを僕ん處へ持ち込んだのだね』

『え、然し、それまでに病床の姉に讀んで聴かしたんです。姉はすっかり感動して泣いてくれました。それで自信を得たので先生のお宅へ伺つたのです。だがあの當時の先生は若かつたですよ。小山内文學士と言つた感じがすつかり出てゐました。それに先生はあの脚本をよく讀んでくれましたね』

『いや、實はおい、それは讀まなかつたあの頃僕は確か大谷社長に頼まれて歌右衛門のために『忠貞奇談』を執筆してゐた時だから忙がしかつたよ』

『そうでせう。僕は臆面もなく先生に催促しました。するに熱海から返事を貰ひましたね。僕はあんなに嬉しかつたことはない。小山内氏は偉い人だ。俺の拙い長い脚本を讀んで丁寧な批評をよせてくれたミすつかり尊敬してしまひましたよ』

『實は僕も君がえらくなつたので、あの脚本があれば珍寶だと思つて探して見たが見當らなかつたよ。は、は、は、』
『なくて幸せです。だが先生、先生だつてあの當時は忘れられない絢爛たる思ひ出があるでせうが、僕が俳優にならうと思つたのも、先生の自由劇場の第何回目でしたか、有樂座で公演のあつた時、忘れもしません『ボルクマン』を観て、『こんなことは俺にもやれるぞ』と思つたのが最初です』

『ほう、これは初耳だ。その君が剣劇の祖になるまでには意識的な階梯はないかも知れないが、自己を客観するさいふ意味で、今になって回顧するに種々な思ひ出があるだらうな』

『それはあります。文藝協會が出来たのが明治四十一年前後ですから、大正年間十六年、先生、僕は此間を無條件に新劇時代と言ひたいのです』

『なるほご、所謂新劇では観客がついて来ないので剣を振つたまでか』

『それは結論です。つまり舊來の歌舞伎劇、それに對抗すべく生れたのが明治時代を語る新派劇です。それと同じ意味で大正時代を語る演劇、それは新劇でなければならぬのです。この新劇といふことは廣く抱擁しての意味です。文藝協會、自由劇場、芝罘座といふのがあつたでせう。松井須磨子に島村抱月、片上伸、中村吉藏の諸氏が中心になつて上山草人君もりましたし、此方へ来てゐるはづの正邦宏、伊澤蘭奢も

ゐたあれですよ。それに帝劇の舞臺協會、土曜劇場、こうした劇團の運動は夫々目的で相違し、演出してゐるものに相違があつても、要は既成劇團への反抗だつた筈です』

― 血のにじむ立廻り ―

『澤田君、鳥渡待つてくれ。その反抗が大成しなかつたのを鳥渡考へてみたいのだ。もう追着ないことだが、あの當時、歌舞伎にしても新派にしても反動的に勢力を失つたのに乗じてつゝ盛んな新劇時代が實現されるべきをさうして失脚した。それはあまりに群雄が割據し過ぎた。それが互に勢力を争ひ一致を缺き、そして肝心の演技は言へば熟練の點に於て既成劇團に及びもつかないのだから困る、結局物珍らしい一時の流行に止つたのだ』

『そこで。僕が剣劇といふ一踏を發明したのは。あの柔弱な在來の殺陣をもつゝ急激に現實化したなら、観客は必

ず喝采するだらうと思つたのです』

『全く歌舞伎の立廻りは一種の眠つた舞踊に過ぎないのだから舞臺は弛緩し切つてゐたよ。所謂澤正の剣劇で血のにじむ様な真剣な立廻りを君によつて見せられて、観客はほつゝ新しい空氣を呼吸する思ひをしたのだ』

『それで僕の言はふにするのは、この剣劇以後に現れた先生の築地小劇場や又は水谷八重子君の藝術座にしても、前に言つた新劇諸團體にしてもみな物質的に缺損續きでせう。こうして徒らに新劇團の殘骸を晒すばかりぢや駄目です。生き延びなけりや……』

『そこで、君の演劇半歩主義といふ議論が出てくるのだらう。だが、僕にしても君にしても舊團の生涯だつたね。最後の舞臺は何を演つてゐたのだ』

『長谷川君の「沓掛時次郎」ミ大佛君の「赤穂浪士の中篇」廣津君の「勝者敗者」です』

『沓掛時次郎「ちや澤村宗之助を使つて

くれてゐたんだらう」

『そうです。利巧な可愛い子です』

『父の宗之助だつていゝ頭を持つてゐたよ。だがこれから日本の観客は誰によつて君の片影を見やうとするのだ。まづ當分出ないね』

『そうでせうか。僕が休場した後を倉橋仙太郎君が日活にゐた大河内傳次郎君が来てくれてゐましたが……』

『そうか、大河内は日活を脱退したのか聞いてゐたが』

—『路上の靈魂』—

『そうです。僕もその記事を新聞で見ましたが、程なく大河内君の兄さんが僕を訪ねて來ましてね。大河内を預つてくれ、そしてマキノへ入社させてくれと言ふんです。僕も譯が解らないのでさうしやうかと思つてゐましたが、間もなく大河内自身でやつて來ましたので

『月並なことをするな』

と言つてやつたのです。彼も非常に煩悶してゐましたが、罵られたからすゝ飛び出すのは現代人の仕方ぢやないと思ひます』

『そうだよ。やれ脱退だのやれ獨立だの騒ぐが、もう宣傳の時代ぢやない。それも走りの時代ならさにかく、まづ日活や大河内がスターだらう。その位置の定つた人間が月並のことをやるのはよくない。よく言つてやつたよ』

『僕はスクリーンの大寫しになる面影に人格の閃影を養はなければならぬ。演劇でもそうだが、映畫なごは殊にさうだ。その面影の細末にまで洗練された大人格を映すここに言つてやりましたよ。大河内君はよく聞いてくれましたが、映畫人格といふものを樹立しなくちや噓だと思ひますよ』

『いや、演劇も厄介だが映畫も困るなあ。僕も松竹キネマの創立と共に、大谷さんに招聘せられて入社したが、僕の行はんする意圖は社の方針が應々抵觸し

てね、さうく研究部といふものを設立して貰つて、それへ逃けたよ』

『路上の靈魂』はその時のお作ですか』

『そうだよ。あれは實に閉口した。散々奮闘の上で雪の輕井澤で病氣になつてね、大谷社長が心配して暖房装置を送つてくれたのには涙がこぼれたよ。後で逢つた時に

「小山内さん、あなたの熱心もいゝが、身體を大切にして下さいよ」
と言はれたのには心から嬉しく思つた』

—映畫の思ひ出—

『いや、映畫については僕も親い思ひ出があります。新國劇が東京へ再びお目見得をした時、大阪へは直ぐに歸らないで松竹から與えられた暑中休暇を利用して全座員を蒲田の合宿所に寄宿させて、雪駄の皮のやうなカツレッツを噛んで……』

『は、は、は、あのカツレッツは閉口だ。』

それに蚊が多い處だね」

『蚊は炎天に苛まれて、初めての機械で初めての技師を興えられて、初めての映畫を産み出そうにするには一方ならぬ苦心でしたよ』

『それが佐々木李郎君かが脚色した「懐しき力」だね。それから東亞キネマで映したのはいつだったね』

『大正八年の冬です。大阪の寶塚大劇場に出演してゐた時、震災や座員の脱退によつて混亂した經濟整理をする爲めに、もう一つは前から頼まれてゐたものですから、東亞キネマの懇請によつて行友李風さんの「國定忠次」に菊池寛氏の「恩讐の彼方に」を晝夜兼行で撮影しましたよ。だがこの二大長篇を寫すのに、殊更に等持院に滯泊したことは僅かに二日で、大部分は寶塚大劇場に出演の傍やつた仕事です。未明の山谷の寒風に晒され、夜半の野の霜にふるへながら、照明燈の白光にねむい眼をはらして、働きつづけたのです』

だからその作品の藝術的價值や興行價值はさうだったか、知りたくもあり知りたくないやうな氣がしますよ』

『僕も映畫に好意は持つてゐたが、矢張り映畫よりも演劇に執着なり希望がつたね』

—英雄色を好む—

『だが、先生、死んぢまつちや。執着も希望もめちやくです。僕は僕の此の豐滿な肉體だけは十二分に自信を持つてゐましたよ。まさか三十八歳を一期して此處へ來やうとは思ひませんでした』

『いや、僕だつて四十八歳で來たのだ。君より十年間長生してゐたわけだが、生命といふものに未練のない譯はないさうも病氣勝ちだつた僕でさへ豫期しなかつたことだから、君のやうな健康體の人が肉體的に自信を持つのは無理もないよ』

『僕がまだ開成中學に居つた頃ですが、

親友の死に出逢つて始めて死といふ事を考へさせられました。人の死が多く肉體的の缺陷から來るものならば、また人間の不幸が働くことの出来ない虚弱者にあるものならば、人はまづ何を措いても自己の身體を完全ならしめねばならぬ。强健ならしめねばならぬと思ひましてね、僕は自分の顔を窓の硝子に寫して見据ゑましたよ。

「この蒼白い顔は何だ。これが俺の顔だ。いいふのか」

「その硝子戸を力まかに拳骨で叩いて手の皮をさんざん傷つけたことがありますが、それから書物を棄て、體育方面へ宗旨がへをしたのです。この身體は全く柔道のお蔭ですよ。いつて、此方へ來たら何の自慢にもなりませんかね」

『だが、その男性美でよく女を泣かせたもんだらう』

『いや、僕はそう女に苦勞はかけなかつた筈です。いいふのが僕の相手の女は

女おんなとして存在そんざいがはつきりしてゐましたよ。それに僕は他人たにんに親切しんせつでしたよ。だが七年間東京に居つてまだ花柳界けいりゅうかいに一人も關係筋けんけいすぢのない俳優はいゆうは私一人わたしひとりでせうね」

『その代りかたがに神戸かたべの福原ふくはらの口はさうするんだ』

『おや、先生せんせい、御存知ごぞんじですか。ぢや仕方しかたがない、言ひますがあの王子おうじふみ子ふみこばかりは僕の終生しうせいの戀人こひびとです。今度も安井醫院あんきえいへ來て貰もらひましたよ。温順おんじゆんしい可愛い女おんなです。恰度先生ただせんせいの八重梅やえうめさんですね』

『これは驚おどろいた。如何いかに自己じこに忠ちうならんがためためは言へ、他人たにんの非ひをあばくは……』

『あばく……は恐れ入おそりましたね。天下衆知てんかしゆちの事實じじつですよ。先生せんせい、かまはないぢやありませんか。英雄色いゆうしきを好む……』

— 遺産六拾萬圓 —

『は、は、。色を好むのもい、が僕の

やうに借金しゃきんを残のこして來た分ぶんには遺族いしやくは困つてゐるだらう。その段は君はよい昨日も通行人つうぎんの話を耳みみにはさんだが君には六十萬圓も遺産があるさいふぢやないか』

『六十萬圓、うは、ゝゝゝ、冗談じだんですよ。そんなにさうして貯たくわへるんです。なるほど一三年三百六十五日を三百五十日まで働はたらきました。だが残りやしませんよ。不動産ぶどうさんだつて一つもないし、第一僕は多年の希望きやうぼうとして一年間座員ざえんを遊あそばしておける金かねが出來たら洋行やうぎやうしたく思つてゐました。一ヶ月三萬圓ゐるゝとして

も六十萬圓あれば二十ヶ月、三つくに僕は洋行やうぎやうしてゐますよ。時に先生、土方與志ひくろよしさんが築地小劇場きよぢいせうげうじやうから引退りんたいされるつて眞實まんとくですか』

『まあ、眞實まんとくに近いね。僕が死んでから劇場自治會げうじくじしちかいを組織そくしして善後策ぜんごさくを講じてゐたそうだが、やがてはそれに依つて新らしく組織そくしされるものがあるだらう。土方は輕い肺炎はいえんカタルを病つてゐたか

らそれを静養じやうやうするこでも言つて引退りんたいするかも知れないよ』

『そうするこ築地はさうなります』

『まづ青山が主事しゆじか、副主事ふくしゆじには北村喜八きたむらきがなるか。そして各部から代表委員だいひょうゐんゐんを選出せんしゆつしてその委員會ゐんゐんかいに執行權しやうぎんけんを與えて、經營けいぎやうにしる演出えんしゆつにしる劇團げきだん一切の用件ようけんを處理しゆりせしめることになるだらうが、そうなるこ從來の文藝ぶんげい、美術びじゆつ、照明しやうめい、衣裳いさう、大道具だうぐ、裝置ちやうじなどは全部囑託しゆくたつ制せによつて運行えんぎやうして行かずばなるまいよ』

『するこ満四年間、先生せんせいと共に運命うんめいをして來た土方さんはさうなります』

— 築地小劇場の運命 —

『まあ、劇團部げきだんぶを去つて僅わずかかに出資者しゆししやの故で、建物經營けんぶていぎやうに關する劇場部の主事しゆじさいつた名だけが残るこことになるだらう』

『では、もし土方さんに演出えんしゆつをして貰もらはねばならぬ時はさうなります』

「一囑託員として参加するに過ぎないだらう」

「そうですね。然し築地小劇場にして、先生には死別し土方さんに生別するこゝは、餘りにも寂しいこゝですね」

「これが人の世の常だ。だから死んぢや駄目だ。死ぬもの貧乏さ。それで君の方はさうなるのだ」

「僕の方も困るでせう。俵藤丈夫や幹部俳優が一座の結束をかためてゐてくれるでせうが、三月は帝劇で残黨ばかりで開演してゐますが、廿四日頃から名古屋を振出しに追善興行に全國を廻るでせう。恰度僕の敵役として活躍してくれてゐた金井謹之助君が返り咲きに加入してくれる筈です」

「うむ、それはよからう。それで倉橋君ミ大河内はさうするのだ」

『多分追善興行中は一席してくれるでせう。金井君も僕ミ同じく中耳炎をわづらつて東京の大森に静養してゐたのです。僕的一座を大正十三年八月に、田

中介二君ミ共に脱退してから、阪妻プロダクションに這入つてスクリーンの上で活躍してゐましたが、僕の生前から復活説が出てゐたのです」

澤田君、君の告別式は日比谷の音楽堂で演つたと言ふぢやないか。田中總理大臣の吊辭は恐れ入つたね。民政黨ビイキの人が、昨夜こゝで僕を擱まえて「澤田が政友會ミは知らなかつた」ミ憤慨してゐたよ」

― 苦のない世界よ ―

『は、は、は、これは早耳で驚きましたね。あれは牧野商工省参興官がお世話下さつたお蔭ですよ。それにあの音楽堂は震災直後に僕の雪辱の意味もあり疲れ切つた東京市民に魂の糧を與えたミ思つて、久米さんの「地藏救由來」ミ長田秀雄さんの「高田馬場」ミ「勸進帳」の三つを野外劇ミして演出した懷し處です。あの高く晴れやかにすんだ秋の空の下で、數萬の觀衆に藝術の

香氣を呼びかけた時の愉快さ、小山内先生、今思ひ出して嬉しいですよ」

「いや、その因果が報はれた譯さ」

「先生、あなたミ御一緒に此方で何かやりませうよ。小山内黨演出監督、澤田正二郎主演、これは彼方でも見られなかつたこゝですよ」

『は、は、は、處が、此方ではその必要がなさうだよ。第一此の世界は苦がない。従つて樂を求めなくてもよい。僕はなぜ彼方で斯んな裕々とした立場に居るこゝが許されなかつたか。追つかない事だがよく考へさせられるよ』

『へえ、そうですね。ぢや僕も落着きますか。おや、このうちはキヤフェですね。これは地獄ですか、極樂ですか』

『は、は、は、まあ、落着き給へ。あわてたつて仕方がないよ。は、は、は』

『は、は、は、』

二人は寂しげに笑ふ。無情の風が川面を渡つて来る。

劇場案内

中座

中村鴈治郎一座

關西大歌舞伎短期興行

四月二日初日毎日午後三時開幕

春

お國と山三

二幕

秋

双蝶々曲輪日記

八幡の里

夏

開國阿蘭陀の國旗

二場

冬

夕ざり伊左衛門

二幕

大喜利 文屋ミ喜撰

長清元連中

總配役

南與兵衛後に南方十次兵衛、藤屋伊左衛門(鷹治郎)名古屋山三郎、蘭學者豊田五八郎、扇屋夕霧太夫(福助)奉行書役人中山六左衛門、山

城屋助七、喜撰法師(右團次)文屋康秀(長三郎)木戸番の男、小通詞横山與八郎、下女お

(吉三郎)猪隈教利、官女撫子の局(八百藏)大炊御門頼國、近隣女房お鶴、官女松の局(成

笑)近隣女房お龜、官女櫻の局(成三郎)俳優

所化文珠坊(雀)難波宗勝、蘭館のボーイ、官

女桔梗の局(扇)松木宗信、遊女玉鶴、官女菊

の局(鷹之助)徳大寺實久、遊女染川、所化豊

念坊(魁童)髭奴、官女萩の局(辨藏)花山院忠

長、若い者梅吉(政治郎)禿ゆかり(敏夫)出雲

のお國、女房お早(魁車)丁稚番松(章景)仕人

金太夫、平岡丹平、駕屋勘六(鰻十郎)巫子、

遊女初風、所化正念坊(眼童)俳優、所化阿佛

坊(美鷹)巫子、遊女哥之助、所化眞量坊(右

若)小者、蘭人(市昇)大和太納言家來、蘭人

(右左次)増田右衛門尉家來、飯焚權助、官女

早族の局(延郎)近衛家の家來、官女梅の局(齊

五郎)神官梅辻左門、奴隸ドム(鷹正)家來武

右衛門、博多屋小右衛門、小栗軍兵衛(九團

次)後見三原傳藏、番頭政七(箱登羅)母お幸、

女房おとく(建女)手代作兵衛、母親お次(市

藏)大島居逸平、濡髪長五郎、口ノ津治兵衛、

手代茂七(延若)井戸理兵衛、大通詞加福吉左

衛門(壽三郎)鳥丸光廣、遊女浦波、妹娘お村

祇園のお梶(扇雀)

浪花座

新國劇一座

澤田正二郎追悼公演

四月二日初日午後四時開演

第一 沓掛時次郎

二幕十場

第二 殺陣

三景

第三 赤穂浪士(前編)

十六場

出演者名

中井哲、野村清一郎、南吉太郎、根岸若之助

佐藤一郎、鬼頭善一郎、鳥居正、赤井政雄、

柳木雷三郎、鈴木萬喜多、菊岡壽郎、河井勇

治郎、島田正吾、石山健二郎、丸茂三郎、久

松喜世子、山路千代子、春野歌子、二葉早苗

永島九子、玉澤七三子、(參加出演)金井謙之

助、中村正太郎(追悼出演)倉橋仙太郎、大河

内傳次郎

角座

新聲劇お目見得

三月三十一日初日

毎日 晝正午二回開演
夜五時半

雜誌『キング』連載
吉川英治作
徳田純宏脚色

萬花地獄 全十四場

總配役

小枝角太郎(辻野)佐原甚田(新田)怪盜花又三
日之助(小波)拓植半藏、葛蒲屋平吉(武澤)駒
木大内記、山名典六(鈴木)陣代司馬大學(中
田)研師定八(名越)杉山剛三(山本)浪人久米
段之助(芝田)俠客飛車兵衛(藤本)浮世床の床
岩(伊川)蘭八節のお妻(和歌浦)藝者小稻(若
柳)藝者小鶴濱地(腰元小梅(富士岡)大内記
の息女光江(若宮)藝者小染(金剛)藝者お光
(吉野)床岩女房おもよ(澤井)女將お清(中村)
定八娘お吟(富士野)

辨天座

卯月興行

花形大歌舞伎大一座

四月二日初日

毎日 晝正午十二時開幕
夜午後五時半

ヒルの部

大阪朝日新聞連載
徳田純一郎脚色 徳田純一郎監修

一番目 松平長七郎 三幕

二番目 名工柿右衛門 三幕

ヨルの部

額田六郎作
一番目 梅田心中 二幕

中幕 日吉丸稚櫻 小牧山城中の場

大森南雲 合作

二番目 春立ちぬれ花もいづちを男ある女の花の振袖 櫻ごよみ 三幕

總配役

松平長七郎、酒井田柿右衛門、此下藤吉、女

房おまさ、藤里榮三郎、娘おふじ(我童)庄吉
妹お種、彌市郎姉お千代、藝妓染龍(霞仙)三
宅宅兵衛、有田屋倅平三郎、明石屋おつげ(珥
藏)娘おつう、萬屋抱(お高(福太郎)松本仁
左衛門、順禮嘉六、藝妓おつた(卯之助)安藤
治右衛門、旅人甲助、佐藤勘十、女房お今、
同行徳助(關三郎)五兵衛娘おしげ、藝妓石鶴
(我久之助)旅人爾三郎、女中おうめ(我久三
郎)松平徳千代(敏夫)なまこの定吉、有田屋
五兵衛、和泉屋多助、寺男木津勝藏(橘三郎)
倅竹松後の虎之助(義直)初鹿野傳右衛門、宿
役人、朋輩八右衛門、永井早太(松壽)旅人乙
藏、朋輩佐兵衛、藥賣九介實は捕手頭久左衛
門(右文次)安藤右京之進、大山才平、母葉末
青龍院順廣(右田三郎)大信寺宗譽、茶店爺、
窯元利右衛門、同行彦左衛門(卯十郎)上使屋
部對馬守、供頭安藤主計、高田屋平三郎(駒之
助)田村宇平次、番頭興九郎、飯焚茂助、立花
屋幸次郎(秀郎)紀伊大訥言頼宣、中里兵太夫
親興次右衛門、やさや五良助實は加藤忠左衛
門、藥屋下男喜右衛門(大吉)駿河大訥言忠長
山猫の金助、堀尾茂助吉晴、相模屋伊三郎(徳
三郎)順禮娘お袖、兵太夫娘おちよ、息女萬代
姫(延太郎)お光、妹お小夜(ひとし)小濱主馬
藝妓小艶(成太郎)堀田新助、弟子栗作、節間
津屋彌市郎(長三郎)



松本泰三

悉り春景色になりました。郊外電車の窓から入る朝夕の風は、全く春らしい氣をそよらします。讀者諸彦には愈々御奮闘のことゝ存じます。

春光に彩れる四月の道頓堀は發潮たる陣容振りを見せてくれました。松竹座の「春の踊り」開國文化劇それに加ふる空前の大映畫「メトロポリス」の封切中座、辨天座の純關西大歌舞伎、浪花座、角座の雄々しき劍劇、いづれ劣らぬ堂々たる劇壇揃ひです。たゞ惜むらくは斯界の巨星澤田正二郎の名を新國劇に見られない事です。然しそれにかはる老將中村鴈治郎がレコード破りの四月奮闘は、幾らか我等の寂しさを慰めてくれます。

本號は編輯の中心をどの劇壇にも置かず、讀物本位で道頓堀四月の色彩を表はす事に試みました。

まづ松竹座樂劇部女生の飛明、藤代、香椎の皆さんから戴いた創作日誌類は青春に富む若き讀者の満足を得るものと信じます。

本號中特に異彩をはなすものは何んと云つても、紙上封切映畫「メトロポリス」の映畫説明欄の新設だと思ひます。劇愛好者の皆様は映畫に對しても、劇同様の趣味を持つて居られる事と信じます。幸ひこの空前の名映畫「メトロポリス」の説明欄が、皆様の期待されるものであれば、今後は常設館封切二三ヶ月前にこれを試み、優秀映畫の紹介に勉めたいと思つて居ります。幸ひ讀者諸彦の御意見を編輯部宛に下されば至榮に存じます。

皆様にお馴染み深い松鼻莊主人が輕妙得意の筆をふるはれた小内山薫、澤田正二郎の「偲艸三途河對話」は劇壇の巨頭、斯界の偉人を縱横十文字に批判し、諷刺した、この空想に富む筆者独自の諧謔な一篇は彌が上にも讀者を引き入れる名讀物として皆様におすゝめ致します。

前號で發表した南木芳太郎氏の「大阪劇壇明治大正六十年史」は同氏の事業多忙で止むなく五月號より連載する事に致します。

二月中座に催した本紙ドラマリーグは異常の盛況を呈しました處、本月は「第二回道頓堀ドラマリーグ」を松竹座觀賞會として来る十日、十一日の兩日「春のおどり」「メトロポリス」封切映畫を觀賞する事に致しました。幸ひ割引券を本號に折込みましたから御利用の上御後援下さる事を願ひます。

昭和四年四月一日發行

月刊『道頓堀』 第三十一輯年

□ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

□ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

□ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (壹圓五厘)

昭和四年三月廿八日印刷
昭和四年四月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興業株式會社

發行所 鳥江 鏡也

印刷所 山上 貞一

印刷所 中央堂印刷所

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

發行所 道頓堀編輯部

電話 (二四〇番) 六六八番

資生堂石鹼

くよち立泡

價 廉



大 阪 資 生 堂 高 麗 橋

かじ御用の上御役下さる事を願ひます

（六六五番）

若く明るいの顔になる

リート白粉

道頓堀第四年四月號

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年三月廿八日印刷
昭和四年四月一日發行

金參拾錢 (郵一錢五厘稅)

阪大・京東
店商平替尾平